々が此町に集つて來ました。聖人は斯く人々に歡迎せられるのを厭ひ、他に遁れやうと爲されました。然し是非共目的を果さなければなりませぬでしたから、急ぎ宮殿に行き皇帝に謁見せられました。

時に皇帝クロビース陛下は御病氣の爲に、痛く衰弱せられ、痛苦と發熱との爲に惱んで居られましたが、セベリーノ聖人の來られた事を聞かれて、歡ばれ急ぎ側近く招かれまして、「朕の病氣は天主樣に御祈願するより外に致方がない。到底人間の能力では治らぬ、よく來て呉れた」と、仰せられました。聖人は恭敬の心を以て、種々と皇帝を慰藉られて、「願はくは天主樣が陛下に御快復の恩寵を與へて下さる事を」と申し、其寢臺の側に平伏して、熱心に祈禱を始められました、が皇后聖クロチールド（六月三日）も其側で共に跪いてお祈を爲され、多くの家臣も亦其室に居列び沈默つて控て居りました。セベリーノ聖人は、豫て此皇帝は聖クロチールド皇后のお祈禱の爲に、偶像教を棄てゝ、眞實の改心をして居られると云ふ事を、能く承知して居られました。が今此所に居並んで居る家臣等は皆阿諛の爲に、表面ばかり信者になつて居るといふ事も知つて居られましたから、何卒して此等の人々に、天主樣の全能を顯して、是非共良き感化を與へねばならぬと思はれ、特に永い祈禱をして、此事も天主樣に祈られたのであります。頓てセベリーノ聖人は、祈禱が終ますと起上つて、皇帝の御體の上に聖き十字架の印を畫かれ、續いて御自分の粗末な外套を執つて、其上に覆ひ被せられました。スルと其途端に皇帝は何か不思議な事でも出來た樣に感ぜられて、熱も失せ苦痛も消ましたから、素破と起上られて、「朕は全快した」と叫ばれました。

此奇蹟の爲に、其場に居つた家臣は勿論、總ての役人等も大に感動して、其後は皆改心して信仰堅固な信者となり、聖人が望まれた通り、良き結果が立派に顯れました。皇帝は聖人の爲に、九死に一生を得られたのであります、から、何をがな御禮を爲たいと、切に聖人の希望を聽かれますので、聖人は「然らば唯陛下に一つの御願ひが御座います。何卒御全快の御祝の爲に、現今牢獄に繫がれて居る罪人に大赦を與へて下さい」と願はれました。皇帝は早速快く之を御嘉納になつて、大赦の命令を出されましたから、聖人は其多衆の罪人を集めて、熱心に悔悛を說き勸められました。これで之が爲に心を改め洗禮を望む者は多數有ました。

セベリーノ聖人は最早天主樣の御示を遂行たから、此上は一日も早く此世を去ちうと、其覺悟のため、佛蘭西のシャトランドンと云ふ所に引籠られ、降生後五百七年の二月十一日に芽出度其潔白な靈魂を天主樣に御返しになりました。靈父は以前度々此シャトランドンに參詣致しました。

皆樣は此セベリーノ聖人が、人々の靈魂を助ける爲に、斯く熱心で在せられた事を見て、何卒此から人々を善に導くやうに努めねばならぬと決心しなさい。

（俊子）靈父樣、吾々が人を導く爲に、到底此聖人の眞似が出來ませぬ。

（靈父）夫は何故ですか。

（俊子）セベリーノ聖人は、天主樣から奇蹟を行ふ特恩を蒙て居られましたが、吾々は然いふ御恩惠を頂いて居りませぬから。

（靈父）然し人々に天主樣の事を識らせ、天主樣を愛する事を敎へるには、別に奇蹟が必要であると云ふ譯ではありませぬ。夫れで此聖人の修院に在られた時のやうに、自ら德を勵んで良き行爲を以て人々に模範を示し、又人々に恩寵を與へて下さる樣にと、常に熱心に天主樣に御祈になるならば、必ず人々を善に導く事が出來るのであります。何卒今日其樣な決心を以て、此聖人の御傳達を願ひなさい。

二月十二日「1」

（降生後八百六十七年死）

清和天皇時代

聖テオドラ皇后

（太郎）霊父様、私は昨日ルルドのお話を承いて家に歸つてから、いろ〳〵聖繪や聖像を觀て居ましたら、親類の人が來て、天主敎は其座物を拜むのか、矢張偶像敎ぢやなあ」と云ふて嘲ひましたので「私は是は拜む爲に持つて居るのではない」と言ましたのですが、一時は腹が立ちました。

（霊父）可笑ですなあ。霊父様、誰も之を拜む人は有ませんのに、時々外敎人が左樣いふ事を尋ねるのです、私は十字架や聖像の前で祈ますと、いろ〳〵の聖き事を想出して、默想なども仕易くなり、何にも無いよりは心も散らず沈着てお祈する事が出來るのです。

（霊父）御尤です、全く其通り吾々は聖像や聖繪を尊び大切にするのは決して拜む爲ではなく、其事蹟を憶起し、其有樣を偲ぶ便とするに過ぎないので、恰度父母姉弟の寫眞を大切にするのと同じ事でありますが、未信者の中には何でも彼でも拜むといふ惡い習慣が有ますので、天主敎の事も充分辨へず、ホンの生噛りや早合點をして、然いふ事を言ふ人が多數あるのです。是は大變な間違であります。夫れでは今日此十字架や聖像を破壞する異端者に對して勝利を得られた聖人のお話を致しませう。

今から一千年餘り以前、羅馬の東方の國にレオといふ皇帝がありましたが、猶太人の煽動に乘つて心を迷はし「朕は天主敎の敎理を改める權利を持つて居る」と言觸らして、先づ十字架や聖像、聖繪等を崇ぶのは、偶像禮拜であるから之を禁めねばならぬ」と、詔勅を出しました。此異端は少しも事實に合はず、眞に薄弱な理由に基いたものでありましたが、何分にも皇帝の說であるといふので早く弘がりまして、市中や宮殿や聖堂に飾つてある十字架や聖像を倒し、破壞しました。

信者等は之を愛する眞情から、此不法亂暴な處置を憤つて遂に之を拒みましたので、皇帝は其權を振ふて信者等を苦め殺し、尙之に背く者は死刑に處すといふ詔勅を出し、聖像等を悉く失くして了ふ積りで、家毎について嚴しく搜索しました。無論信者の中、不熱心なる者、臆病なる者等は其意に從ひましたが、熱心な多くの信者は之を肯入れる事が出來ないので、嚴しい迫害に遭ひました。

其中に此レオ皇帝に代つて、テオフイロと云ふ皇帝が後繼者となりましたが、前帝よりは一層暴虐く信者を責めました、（聖テオフイロ痛悔者とは全く別人です。）其時聖メトヂオといふ修道者は此異端の誘惑に懸らぬやう、又信仰を勵ます爲め、熱心に信者に向つて說敎して居られましたから、遂に捕はれて、裸体のまゝ千度も鞭たれ、全身傷だらけにせられて暗い穴に投込まれました、乃で信者等は異端に責められ迫害に苦み、火の消ねる如に悶れな境遇に陷りました。

此皇帝の皇后は聖テオドラと申して信仰厚き御方で御座いましたから、天主敎の主義に依て皇子を敎育せられ、蔭ながら皇帝の素志が變ますやうにと熱心に祈つて居られました。それで信者等は此御方を唯一の賴みとして居つたのでありました。

（太郎）皇帝は皇后の信者であるといふ事を知らなかたのですか。

（霊父）幾分か知つて居られたのでせう、然し聖テオドラ皇后は容貌麗しく、性質優柔しく而して德の高き御方でしたから、皇帝も非常に寵愛せられ宗敎の爲に之を離別する事を欲まなかつたのでせう。又皇帝は非常に荒々しく頑固な氣質でありましたから、皇后は何角に付けて絕ねず苦痛を感じて居られましたが、毎時之を耐へ辛捺して居られましたので、皇帝も心の中に皇后の德に感じて居らたのです。

數年の後皇帝は重き病氣に罹られ、甚い發熱の爲に正氣が無くなる迄に苦み、精神が錯亂れて夢現のやう

になられました。而して今迄自分の爲に苦められた多くの人々が恨めし氣に寢臺の傍に近づいて、自分を責る如に覺ね、「アッ鞭で朕を打て居る、痛い〳〵、アッ火で燒かれる、誰か居らぬか」と切りに叫んで救助を求められますので、看護の人々も怖氣を懷いて居ました。

（太郎）此は自業自得で、天主樣の義罰でせう。

（靈父）無論是は天罰であつたでせう。聖テオドラ皇后はいつも側に侍て看護に力を竭され又「何卒今地獄に墮ちかゝつて居る此靈魂を救けて下さい」と心を籠めて祈つて居られました。

或夜皇后は信者なる總理大臣某と唯二人皇帝の傍で看護しながら、共俱祈禱をして居られますと、皇帝は此夜一層叫び狂ひ、迚も其場に居堪らぬ位に酷い痛苦の御樣子でしたが、其中に稍し正氣づかれましたので大臣は身を起して皇帝を扶け動かさうとしました。其拍子に此大臣が今迄皇帝の機嫌を損じるのを恐れて、密かに隱し持つて居つた聖母のメダイを取落しました。スルと皇帝は驚いて眤と之を眺めて居られましたが、奇妙にも打震ふ手を差伸べて、サモ嬉しさうに其メダイを拾取り、丁寧に接吻せらました。其れから後は急に痛苦もなく發熱も無くなつたのです。皇后は其樣子を御覽になつて大ひに歡ばれ、急ぎ十字架を執つて皇帝に見せられました、所が皇帝は熱き痛悔の涙を流させ乍ら此十字架に接吻し、基督の聖像に對して崇敬の念を起されました。

皇帝は間も無く疲勞の爲に安らかに此世を逝られました。

（俊子）然し皇后は皇帝が臨終の時に改心せられたので御滿足でしたでせう。全く皇后の御祈禱のお蔭でしたな。

（靈父）左樣で御座いました。哀憐深き天主樣は毎時斯樣に、靈魂上の爲にする熱心な祈禱をば必ず聽容て下さるのであります。」其後皇后聖テオドラは皇帝の遺言によつて國を統治る事になりましたから、先づ第一に今迄皇帝の爲に國外へ放逐されて居る人々を呼戻し、捕囚て居る信者に自由を與へ、尙異端を防ぎ之を滅す爲に司教樣方の集會を求めて其協議を請ひ、尙又聖に囚はれた聖メトヂオ修道者が永く獄舍に在せられたにも拘らず、未だ壯健でしたから、都コンスタンチノープルの大司教の座に選びなされました。而して皇后は大司教と共に異端を禁じて、信者の迷ふて居る者を導かれ、眠つて居る者を醒ます事に努められました。而して此異端の滅亡を祀念する爲に祝日をお定めになりましたが、是は今日に至る迄も尙續いて居ます。られで皇后は國を治めて居られた間は眞に平和で、人々は皆鼓腹擊壤の樂を得、天主樣の慈愛に感謝して居ました。又唯此國許でなく近邊の國々へも多くの宣教師を援助けて、布教の便を取計はれましたから、救靈を得た人々は數へ切れぬ程でありました。殊に彼のヴルガリア人等が天主教に歸正りましたのは此時で、全く此皇后の御蔭であります。

斯く人々の救靈の爲と、皇帝の救靈の爲に、天主樣から選ばれた聖テオドラ皇后は、後皇帝の位を皇太子に讓られ、御自分は某修院に入られましたが、間も無く目出度此世を去られました。

（次郎）靈父樣、私は今迄聖母のメダイを大切にして居ましたが、唯今のお話によつて是から尙更大事にしませう。

（太郎）私も是から例令何と嘲はれても弄られても眤と耐へて、聖像や聖繪を大切にしませう。

（俊子）私は此皇后に倣ふて他人の救靈の爲に今から一層熱心に祈ませう。

二月十二日「2」（降生後二百九十年生（同三百四年死））

應神天皇時代

聖女ウラリア童貞致命

（靈父）今日は復彼の聖女アグネスと、同年輩で同じ時代に西班牙國で致命せられた、若き童貞女聖ウラリアの祝日でありますから、一寸其お話を致しませう。

聖女ウラリアは、西班牙國のバルスロナといふ町の富榮の家にお生れになりました。幼い時に洗禮を領けられ、成長するに從ふて德を行ふ事を心懸られ、早くも致命の覺悟をして居られましたが、此時ダシアノと云ふ迫害者が總督となつて羅馬から此西班牙國に來任したのです。

（次郎）ダシアノと云ふ名前は聞いた事があるやうですなあ。

（俊子）聖ピンセンシオ（一月廿二日）を苦めた人でせう。

（靈父）然です。其時にお話した通り此總督は極く暴虐い性質の人で、深く天主敎を嫌ひ多くの信者を苦しめて殺した人です。時に聖女ウラリアは纔に十四歳の少女でありましたが、漸次信の火の手が熾になるのを見聞せられて、御自分も蟾て致命の榮譽を得る事が出來ると、心窃に喜んで居られました。而して信仰の爲に種々の苦痛を受けたいといふ望みがありましたから一般信者の信仰を強め勵ます爲に、特別天主樣の御聖慮を蒙て直接總督の許に行かうと決心せられ、或日朝早く家を出てダシアノ總督の家に行かれました。

ダシアノは若く可愛らしい娘の子が訪ねて來たのを見て、不審に思ひ乍ら「汝は誰であるか、何の用向で來たのか」と優しく尋ねました。スルと聖女は嚴然い言語で「私は猥りに罪なき人を捕へて酷らしく苦める閣下を、咎める爲に來たのです」と答へられましたので、「罪なき人とは誰か」と重ねて問ひますと「天主敎の信者であります」と云はれたのです。ろれで總督は扨は此少女も信者であると念ひましたから、試しに「汝は此國の神々を拜んで供物を爲ねばならぬ」と申しますと、聖女は何か決心したやうな態度で「私は眞の神なる耶蘇基督を信仰して居ますから、決して偶像等を拜む事が出來ませぬ」と斷然答へて其信仰を表白されました。

ダシアノ總督は這麽小娘に敎を棄させるのは造作も無い事と、心の中で其大人振つた言語を嘲笑ひ乍ら、脅し賺して聖女の心を動かさんと種々に力を盡しましたが、此可弱き少女の決心を翻さす事が出來ませんので、已を得ず兵卒に命じて、柳の鞭を以て打擲さうゝ町中を引廻さしました。聖女ウラリアは天主樣の爲に斯く公けに苦痛を受けるのは自分の救靈の爲め、又信者の信仰を强める爲めであると、大ひに喜んで其苦痛を耐へ辛棒して居られましたから、人々も其健氣な樣子を見て甚く感じました。乃で總督は此少女が年齡に似氣なき勇氣を以て、自分の命令に從はぬのを怒つて、他の見懲の爲に人々を集め、故意と慘酷しい責苦に遭しました。即ち聖女を裸體にして寢臺の上に縛付け、錨の如な鐵の熊手を以て徐々と身体中を搔拐らせ、尙も下から火を以て焙りました。然し聖女は一言も發さず、只眼を閉りヂット其苦痛を耐へて少しも顏色に現はさず、喜悅の面容をして居られますので、非道の總督は益々苛ち鉛を鎔して鼻穴に入れ、蠟燭を點して眼を燒き、尙其上に硝子の破片を以て顏を搔き破り、終に石灰の中に投入れて、上から沸る油を注ぎました。

（俊子）可哀相に……小さい御方に能く其麽慘酷しい事が出來ましたなあ。

（靈父）此總督のやうに惡魔の奴隷となる者は、皆血が冷いとなつて心が暗み、斯いふ慘い事を爲るのを何とも思はないやうになるのです。聖女ウラリアは頭から足の先に至るまで、一つとして滿足な所無き迄に疵付けられ、全身血塗れとなつて、其痛み苦みは到底萬分の一も言ふ事が出來ない位でありましたが、斯る中にも堅き信仰の能力に由つて、絶ゑず天主樣に祈り天主

樣に近づき恰度其痛苦を感せぬ者のやうにして居られますので、人々は皆哀憐の念盧が起り、又奇異な想念が起つて、此樣な可弱き少女が如何して此酷い痛苦を耐へて居るのであらう？、是は必ず眞の神樣が御助力になるに相違ない、と聖女の立派な覺悟と堅き信仰とを眼前に見て痛く感化されました。

それでダシアノ總督は唯此少女を我が意に從はせる事が出來ぬのを殘念に思ふ計でなく、人々の心までを感動させて、自分の目的が反對の結果となつたので、今は情用捨もなく荒々しく聖女を引起して十字架の如な樹に縛付け其儘棄置けと命じましたが、間も無く聖女ウラリアは靜に頭を擡げて天を仰ぎ耶蘇マリアの聖名を唱へ、笑を含みつゝ遂に眼を閉ぢて此世を逝られました。其時人々は聖女の靈魂が白鳩の形となつて天に昇るのを見ました。

總督は其死屍を山に棄て、野獸に喰させやうとしましたが、其晩大雪が降り積つて聖女の屍を埋めました

から其害を免がれる事が出來、夜に乘じて信者が之を大切に葬りました。後凡そ五百八十年程經つた時に此町の司敎樣は天主樣の御示に因て、聖女の御墓を見出す事が出來て、其遺物を天主堂に納めましたが、尙今日に至るも立派に保存せられてあります。而して聖女ウラリアは此バルスロナ町の保護の聖女と仰がれ、特別に其御傳達を願ふ人が多數あります。

皆樣は未信者の中に居られますので、種々の誘惑にかゝる機會が多數ありませうが、何卒每時此聖女の御取次を由て例令如何な伽厚に遭ひましても天主樣の爲に之を快く耐へ忍ぶ力を願ひなさい。

聖マルチニアノ山修士

（靈父）今日は一生涯の間惡魔の誘惑を防ぐ爲に力を盡された聖人のお話を致しませう。

今から約り一千年程前にシリア國のセザレと云ふ町にマルチニアノと云ふ聖人がありました。此御方は早くから親世の果敢なき事を悟られ、御年十八歳の時に町を離れて近くの深山に入られ、其所で唯獨り祈禱、苦業をして朝暮熱心に天主樣に奉事て居られました。漸次に德高くなり特に天主樣の御恩寵を蒙て奇蹟を行ふやうになられましたので、之を聞傳へた病人や惡魔に付れた者等は、其取次を願はんと多數訪ねて來ました。聖人は祈禱を以て皆之を救ふて居られました。

スルと例の惡魔はろ〳〵と妬み恨みの心を起して聖人を誘惑はうと、度々此所に來ました。或時も異形恐ろしい狀をして聖人の面前に現はれましたので、聖人が「呪はれたる者よ、假令汝は如何程力を盡して我を害せんとしても、御主基督は保護つて下さるから到底我に勝つ事が出來ぬから、早く去れ」と申されますと、惡魔は「待て〳〵汝は幾許天主樣に依賴つても、我は之に打勝つ方法を知つて居るから、是非此處を離れるやうにしてやる」と脅して大風の如に遁げ去りました。後聖人は種々の强い誘惑に遭ひましたが、每時其手段に打克つて二十五年も永い間此山奥で功績を積み、天使の如に潔く生活して居られましたから、其名聲は國中に擴まりました。

時に此町にジョエと云ふ婦人がありましたが、人を迷はす事が却々巧手でした。或日町の人々が寄集つて頻にマルチニアノ聖人の德高き事等を談話して居るのを聞いたジョエは、笑ひ乍ら「マルチニアノが德の衆れた聖人であると仰有るが、何も別に不思議な事も感心な事も有ませぬ。誰でも如彼淋しい山奥に行くと自然に出來る事ですから……設令私が一度逢ふて之を迷は

して見せうか、其でも心を亂さなかつたら偉い者ですが……」と誇り顔に云ひますので、人々は「否々決して其麼事は無い、お前が行つても駄目である」と申しました。スルとジョエは之を打消やうに「うれでは賭を致しませう、兎に角私はマルチニアノを墮落させる事が出來なかつたら町中の人が皆私を嘲弄つても構ひませぬが、若し私の思ふ通りになりましたら汝等は賞與を出さねばなりませんぞ」と申しますと「田夫野人の常として好奇の心が起つて之を承諾しました。乃でジョエは急いで家に歸り殊更見苦しく汚ない衣服を着け、別に美しい衣服を古い巾に包んで之を背負ひ、杖を曳きながら雨模樣の寂しい夕方に町を出て聖人の居られる山を指して行きました。

此日マルチニアノ聖人は正午過から洞穴を出て例の如に祈禱をして居られました。夕暮から雨風になりましたので匆々洞穴に歸りました、所が夜更になつて戸を敲く音がするので、耳を欹てますと、悲げな聲を出して「何卒一夜の宿を借して下さい」と願ふ者がありますから、奇妙に思ひ乍ら起つて戸を開けますと、大きな風呂敷包を背負ふて居る見苦しい女が立つて居ます。うれで聖人は是は必然惡魔の誘惑であらうと驚いて之を斷りましたが「私は哀れな女乞丐で御座います。今日闇らず山道を踏迷ふて此所まで辿り着きましたが、お腹が減つた上に甚い雨風で此上何する事も出來ないやうになりました。何卒お救け下さい」と再三も哀願ますので、聖人も雨に打たれた憐れな姿を見て不愍の情が起り、萬一救けずに居つたならば、猛獸にでも喰はれるか經からでも落ちて死にでもすると自分は天主樣に背くやうになるからと思ひまして、終に天主樣に祈り御攝理に托して洞内に入れました。而して火を焚いて暖てやり粗末な僅の食物を與へて後「汝は今晩此洞に寢て明日は早く此所を立去らねばならぬ」と嚴しく告げ、自分は別の洞穴に行つて其所で一心に祈禱を爲られました。うして

翌日朝早く前の洞穴に行きました。所が不思議にも其處に若き婦人が立派な容姿をし、嫣然に笑ひながら立つて居りますので、聖人は屹驚して暫時之を凝視て居られましたが、是は必定惡魔の所爲であると思ひ「汝は誰であるか、如何して此所に來たか」と詰りましたが、其中に前晩の乞丐であるといふ事を曉り、猶更不思議に思ひました。

(次郎)ジョエといふ女は却々惡い奴ですなあ。

(靈父)左樣です、ジョエは夜の間に全然姿を變へて美しく化粧をしたのです。而して聖マルチニアノが今種々に疑ひ訝つて居るのに附込んで、一層其心を惑はし罪惡を犯さうと、樣々の嬌態をして言葉巧みに誘ひましたので、流石の聖人も漸次に心動かされて來ました。それで他人の來るのを恐れて密に戸外に出て見られました。所が此時平素德を行ふた報として天主樣は特に御恩寵を以て聖人の心を照して下さつたものですから、忽ち「今我は恐ろしい危險に迫つて居る」といふ事を深く感じられました。而して容易な事では此惡魔に打克つ事が出來ぬと思ひ案じて居る中、夢中になつて其側に積んであつた薪に火を點け其中に飛込まれました。少時して火の中から出て强く我と我身を誡め「マルチニアノよ此火の中に居るのは愉快であらう、萬々永遠なき地獄の火を耐へる事が出來るならば此女に順へよ、是れ即ち地獄に行く道であるから」と言ひ畢つて再び火の中に入られました。うして「私は天主樣に背くよりは此火の中で死ぬ方が望である、何卒一時心の中に犯した罪惡を赦して下さい」と祈禱畢つて復火の中から出られました。

先刻からマルチニアノ聖人の樣子を睜めて居た彼のジョエは、始めは驚き次に矜憐の心が起り終には自分の爲に其樣な痛苦を爲られるのを深く感ずると同時に痛悔の情が制へ切れぬやうになりましたから、直樣髮の飾も美しい服も脱ぎ棄てゝ其火の中に投入れ、熱き涙を流して「嗚私は惡う御座いました、何卒聽容して

下さい、私は全く惡魔の煽動によつて聖人を誘ふ爲に來たのですが、今は反對に聖人の御蔭で救靈る事が出來ました、私は聖人の仰に從ふて何地へなりとも行つて一生の罪惡を贖ひませう、何卒私の罪を赦して下さい」と誠意籠め地に平伏して謝りました。スルとマルチニアノ聖人は火傷の疼痛も打忘れてジョエの改心を歡ばれ「今迄の惡い所業を悔悛めたならば、今からペトレヘエムに往て修院に入り身を終るまで一心に天主樣に拳仕よ」と敎へ諭されましたので、ジョエは感謝の涙に咽びつゝ「私は必ず仰の如くに致しませう、何卒私の爲に天主樣にお祈を願ひます」と、遂に聖人に別れてペトレヘエムに行き其附近の修院に入つて十二年の間其所で贖の爲に種々の酷い苦業を爲し、又多くの人々の救靈の爲に力を盡し善き終を遂げました。

(太郎)靈父樣、マルチニアノ聖人は火の中に入つても体は燒けなかつたのですか。

(靈父)否ゑ甚い火傷を致しまして、永い間起臥も自由になりませんでした。然しろれが爲に罪を避ける事が出來ましたので、苦を厭へて天主樣に感謝して居られましたが、後身體も治くなりましたので、此から後全く人里離れた所へ行かうと思ふて此山を立去らうとせられました。所が惡魔は復奇怪な形をして跟いて來ながら「例令何處に逃ても我は蹤て行くから駄目である、汝を地獄に下す迄は決して側を離れぬ」と喇り乍ら申しますので、聖人は「余は此處を去るのは、辛いとか厭たとか又退屈になつたからではない、唯好き地を選んで汝に打克つ爲である、如何程汝は我を誘惑はうとしても、前の女が改心したように却て我の爲に功績となる計である」と應へて、熱心に祈禱を爲られますと、惡魔は狂ひながら隱れ去りました。

乃でマルチニアノ聖人は山を下りて或海邊に來られました。スルと一人の船頭に出會なされましたので、丁寧に「此邊に人に逢ふ事が出來ぬ如な寂しい所がありませんか」と尋ねられました、所が此船頭は熱心な信者でありまして、聖マルチニアノを見て、「此は聖人であらう」と想ひましたから、恭しく應へて云ふには、「此海の遙か遠方に大きな巖がありますが、土も無ければ草も生ゑず唯荒るにまかせてありますから、之を見た丈でも恐ろしい感じが起ります」と陳ました。聖人は大に歡ばれ「何卒私を其巖に連て行つて下さい、而して食物の爲に二ヶ月に一度位草とかパンとか飲水を持て來て下さい。又樹の枝や葉を持つて來て下されば、私は籠を編んで上げますから、貴下は夫れを金錢に替へて受取つて下さい。猶御禮として貴下の爲に天主樣にお祈禱を致しませう」と約束せられましたから、船頭も早速承知して籠の爲に棗の葉を買込み、粗末なパンと飲水とを積み、聖人を載せて遠く其巖に着ました。マルチニアノ聖人は直に岸に上つて見られますと僥倖にも其所に深い大きな洞穴が有ますので其所を住居と定め、船頭と堅く約束して舟を還されました。

斯して聖人は此巖で祈禱と苦業をして居られましたが、始の中は二ヶ月に一度前の船頭が木の巢や食物を持て來ては籠と替へて行く計でありましたから、此處ならば婦人の誘惑もなく大丈夫であると喜んで居られる中、惡魔はいろ〳〵の所業をして聖人を脅かさうとしましたが、毎時之に心動かされず防いで居られました。ろれで最早罪に陥るやうな便がないと思ふて六年の間無事に生活して居られました。然し山の奥海の中何地如何なる所でも天主樣に背くやうな危險のない場所は少しも無いといふ事を曉るやうな事が湧て來たのです。ろれは

或日大風大雨で波が荒れ、吼ゑるやうな凄ましい音をして大波小波が此巖に押寄せました。聖人は何心なく洞穴を出られますと、巨きな船が今しも此巖の附近し摧けて沈みました、が頓て只一人板片に縋つて此巖の岸に漂ひ着た者があります。漸々近づいて來るから能く視ますと二十五歳位の若い婦人で、聖人の姿を見るなり走り寄つて「何卒お救け下さい」と云ひ乍ら倒

れました。聖人は喫驚して「吁復惡魔が斯樣な工夫をして」と暫く心配して默想して居られましたが、何か決心をせられて、今此婦人を救ひぬと死んで了ふから天主樣の爲に之を救ふ義務がわると、祈り乍ら婦人を扶起して後、貴女は乘組の人々が皆溺れ死んだのに、唯一人助かつたといふのは、全く天主樣の御恩寵でありますから、熱心に感謝せねばなりませぬ。そして私は貴女と共に此處に居る事が出來ませぬ。それで此所に一人分の食事しか有ませんから當分それで辛抱して船頭が來たならば其船に乘つて町に行きなさい。何卒其間熱心に天主樣に奉事へて德行を修め、祈禱を勵みなさい」と懇に諭して後、聖人は別を告げて其所を去られました。婦人は此淋しい所に一人居るのが懼しいものですから、地に跪き涙を流して俱に居つて頂きたいと聖人に願ひましたが、聖人は少しも聽容られず、どん〳〵と走つて海岸に行かれ、大聲を出して「天主樣よ私は今罪に陷るのを防ぐ爲に此地を去ります。然し路も無ければ船も有ませんから、唯天主に身を托して水の中に入り惡魔の誘惑を逃れます、何卒聖慮通りにして下さい」と十字架の符をしてザンブと海の中に飛込まれました。

（次郎）其麼事をするのは、自殺ではありませんか。

（靈父）自殺とは全く相違ます、度々申上る通り聖人達は間々斯いふ事を爲されますが、是は皆我力計に依つて、苦痛を免かれる爲とか、失望の結果だとか、自暴から出たのではなく全く天主樣の默示に從ふのでありますから、普通の人は之に感じても決して傚ふ可き事ではありませぬ。殊に此時には食事が一人分しかありませんでしたから、此婦人を救ふ爲に自分は飢死をしなければなりませんから、何れにしても御攝理に托さねばならんのでした。

（淺子）聖人は死なれたのでせう。

（靈父）否に萬事天主樣の御攝理に托されたものですから、不思議にも救かつたのであります。則ち聖人は海に入られましてから、浮沈みする間も絶ず耶蘇の聖名を唱へて居られました。此時大風はまだ息まず、波濤も亦甚かつたので聖人は終に力盡きて今や溺れんとせられますと、奇妙にも一艘の小さな舟が波間に漂ふて居ますので、是は天主樣の恩寵であらうと、感謝しながら其舟に上られました。スルと其舟が木の葉のやうに風に吹飛ばされ、浪に流されて間も無くギリシヤの或海濱に着きました。乃で聖人は涙を流して天主樣の限りなき御愛憐を感謝されました。然し此から後如何して宜いか、最早何處に行つても惡魔の誘惑にかゝるのを曉つて居られますから、一時途方に暮れて居られましたが、此上は全と所に止まらず、足に托せて歩き廻らんと決心して、二ケ年の間乞食となつて彼地此地を巡つて後アテヌといふ町に着かれた時に重き病氣に罹られて、動く事が出來ないやうになられました。其時此町の司教樣は天主樣の默示を蒙けて、今聖堂の側に德高く功績の多いマルチニアノと云ふ者が臨終に迫つて居る」と云ふ事を知りましたので、急いで其處に行きますと、乞食の姿をした穢ない人が地に倒れて起つ事も出來ぬやうになつて居ます。マルチニアノ聖人は司教樣の姿を見て大に喜ばれ聖体の秘蹟を傾け終油の秘蹟を授かつて後「主よ今我が靈魂を御手に托す」と云ひつゝ遂に安らかに此世を去られて天國に旅立たれました。聖壽は五十一でありました。

（俊子）感心な聖人でしたなあ。罪惡を避ける爲にそんなに痛苦を爲されて……。

（太郎）歳の上に選された婦人は如何なりましたか。

（靈父）其後例の船頭は、毎時の如に嚴に行きますと、見馴ぬ婦人が海邊に佇立んで居ますので大に驚いて其仔細を尋ねました。それで婦人は難船して命を拾ふた事、聖人が斯々と告げられて海に入られた事等を詳しく話しました。スルと船頭は大に感じ嘆いて暫し涙に暮れて居りましたが、それでは云ふて婦人を船に乘せ連行かうとしました。然し婦人は「我家の者が皆死

に絶にて今は親も無く兄弟も無く誰に訴る所もありませんから、何卒身を終る迄此所に置いて下さい、私は奇妙にも此地で生命が助かつたから、殘る一生を天主樣に献げませう」と決心の体でありましたから船頭も之を承知し、編物の糸と食物を持つて相變らず此所に通ふて居ました。六年經つと此婦人は苦業しながら此世を去りましたので、船頭は其死屍を船に載せて歸りセザレといふ町の司教樣に其話を爲ましたので、司教樣は此婦人の德行を聞知られて立派な葬式をして此町に葬られました。

皆樣は此世間と惡魔と私慾に打克つたマルチニアノ聖人のお話によつて得る所が多いで御座いませう。是に由て見ると此世は戰の場で何處に居つても惡魔の誘惑があつて、絶ねず吾々を害しやうと努めて居るのでありますから、此聖人に倣ふて此から後、罪を犯す便があれば直に之を防ぐやうに力を盡しなさい。而して又此聖人の御傳達に由て此禍を避ける恩惠を願なさい。

二月十三日「2」(降生後二五九年死)

聖ポリオクト大將致命

應神天皇時代

(靈父)羅馬皇帝ワレリアノの時代に第八回の迫害がありました。時に東の方のアルメニア國にネアルコと云ふ信者と、ポリオクトと云ふ未信者の二人がありました。共に有名な大將で、兵馬の時には力を協せて城を守り敵を攻め、家に歸つては常に往來して樂を分け憂を慰め、人も羨む程仲好き間柄で、唯一人は信者であり一人は未信者であると云ふ丈の相違でありました。

然しポリオクトは品性高く潔白で、常に好んでネアルコに公教の話を聞いて居られましたので、唯信者と云ふ名義が無い丈であつたのです。

時に羅馬皇帝から迫害の詔勅が出ましたので、之を聞いたネアルコ大將は迫害の爲に自分は致命するから、仲好きポリオクトに別れねばならぬと非常に悲んで居りました。或日圖らず二人の大將が途中で出會なされました。所が、ネアルコの樣子は常と異つて鬱々とし不愉快氣な面容でしたから、ポリオクト大將は不審に思ふて其理由を尋ねられました。ネアルコは出來る丈之を隠さうとしましたが、自然に涙が出たので、「今私の心配を打明ても、貴下が之を慰める事が出來ませんから、默つて居りませう」と沈んだ聲で申しました。

ポリオクトはネアルコの肩に手を懸けて、「然らば私は何か貴下の御心配になるやうな事でもしたのですか」、「否ね、決して其麼理由ではありませぬ。殘念ながら近々の中に貴下と別れねばならぬ樣になるから……」と申しました。ポリオクトは驚いて「夫れは如何いふ理由で別れねばなりませんか、私は死んでも貴下と別ぬと、思ふて居りますのに、「然ども……是非別れねばならぬ事が起つたので……」「何故早く其理由を聞かして下さらぬのですか」と恨む如に問詰められますので、ネアルコも最早其の切なき友情に默つて居る事が出來ぬやうになりましたから、友と瞋めて「此度天主教信者に對する皇帝の詔勅を聞かれたか、全く之が爲である」と告げました。ポリオクトは短い乍らも其言葉を聞いて全然其理由を了解られました。良久默然つて居られましたが、此時天主樣は特に其心を照して信仰の恩寵をお與へになつたのです。稍あつて「夫れは決して御心配しなさるには及びませぬ、私も天主樣の御恩寵に由て貴下と共に生命を献げませう」と決心の体を面に現して申されました。

ネアルコは之を聞いて大ひに驚き且つ喜びまして、「何して貴下は其麼に能く教の事を知つて居られるのですか、「私は之を知らずに居られませうか、私は貴下に屢々教の話を承ました。其都度痛く感じましたので度々聖書や教理の書籍を見て天主樣の御示をよく知る事が出來たのであります。最早心の中では天主教信者であります。然し乍ら私は未だ洗禮も受けず、永い間天主樣を敬はず、空しく時を過して多くの罪科を作りましたから、今貴下と一所に身を献げましても同じく

天國に行く事が出來ませうか」と申されました。「必ず其御心配は無用せぬ、福音にも有ります通り哀憐深き天主樣は一日働いた者にも、半日働いた者にも同樣工金を拂ふて下さるのですから、貴下の信仰さへ堅かつたならば必ず終なき幸福を授けて下さいます」と敎へ勵ましました。ポリオクトは大ひに喜んで直に其處に跪いて「天主樣に感謝し其御恩寵を祈られました。而して少頃して互に袂を分つて家に歸られました。

却說ポリオクト大將はネアルコに別れて家に歸らうと街を回られますと、人々が寄集つて居るので何事ならんと近づかれました。視れば信者に敎を棄てさせ供物を命ずる爲に、多數の偶像を置據て居ますので、ポリオクトは天主樣に無禮を加へ信者を躓かさうとする此惡い手段に忽ち怒の心が簇々と出て、突然其偶像を碎毀されますと、扨こそ信者が來たと、人々は皆大將を中に取圍んで、散々打擲き終に裁判所に連行ました。此所の判事の中にポリオクト大將の夫人の父親が居ましたが、人々の騷ぐ聲を聞いて出て見ますと、我娘の婿が捕はれて居ますので、大ひに驚いて先づ何事の爲であるかと種々訊ねますと、大將は何時の間にか天主敎を信仰して、如何しても其心を翻さうと爲されませんから、驚き呆れていろ〳〵に諭し誡めた上「夫れでは慘酷な死刑に處されるのも承知であらうな」と云ふて暗に脅しましたが、大將は笑を含み乍ら「軍人は平素から死ぬ事を恐れませぬ、況して天主樣の御助力がある以上は假令如何樣な苦痛に遭されても、敎に背くやうな事は斷じて出來ませぬ」と答へられました。岳父も其堅き決心を見て、「嗚呼虛僞の天主敎は竟に我が大將までも迷はしたか」と大ひに嘆き悲みました。

其中に大將の夫人は夫の事を聞き慌てゝ此所に來ました。而して國家に功勞ある大將に對して其赦免を請ひましたが、裁判長は其言葉を差止め、「皇帝の命令は却々嚴しく、尙又此町の人民は天主敎を甚く忌み嫌ふて居るから、大將であるからと云ふて之を救けるならば、必ず騷動が起るに相違ない」と云ふて聽容れて呉れませぬ。乃で夫人は大將の足許に平伏し「何卒志を變て下さい」と大聲で泣き崩れました。大將は之を見て、敎を棄てさせる惡魔の誘惑であらうと思はれましたから、言葉を改めて「何故父も妻も涙を以て我に眞の敎を棄てさせやうと爲らるゝか、却て汝等の身の上について泣かねばならぬ、而して果敢なき此世の樂を棄て吾が言葉に從ふて天主樣に拳事るならば我と共に終りなく樂福を享ける事が出來るが、若し岳父に從ふて偶像を拜み一時の樂に耽るやうでは、必ず未來に於て地獄の苦罰を免れる事は出來ない」と、懇に敎へ諭されました。

裁判長はポリオクト大將が己のみならず、他人をも導かうとするのを見聞して直樣死刑の宣告を下しました。ろして執行場に連行きました。丁度其處に友のネアルコ大將が群衆に交り、涙を浮かべて悲嘆んで居るのを見られましたから、ポリオクトは其方に向ふて、「勇氣あれよ、一歩先に行つて天國に於て待つて居るから」と申されて、頓て血の洗禮を受けられました。それでネアルコ大將は恭しく其血を布に浸して遺物とし鄭重に其死骸を葬りました。

（俊子）血の洗禮と申しますのは。

（雙父）天主樣の特恩によつて、未信者でも洗禮を傾ける前に、公敎を信じ此敎の爲に生命を棄てる時には之を血の洗禮と申しますので、此血の洗禮を受ける者は必ず致命人の榮譽を得るのであります。往古斯いふ致命人が多數ありました。

（次郎）丁度一月に承ました聖セバスチアノ軍人に能く似て居られますなあ、私は斯いふ軍人は大好きです。

（雙父）佛蘭西の名高いコルネユと云ふ文學者は此聖人の致命の有樣を信者の良き模範とする爲に「聖劇ポリオクト」と題する脚本を作りました。ろれで今日外國では此良き演劇に由て大なる感動を與へられて居ます。

皆様は未信者の中に仲好き友人がありますれば、此ネアルコの如に行を以てよき模範を示し、言葉を以て親切に教理の話を聞かせ、出來る丈其友人の救靈の爲に力を竭さねばなりませぬ。是は友人に對する眞の愛であつて、又天主様に對する義務でありますから……又皆様は例令如何様な事があつても、此聖ポリオクトの事を想ふて偶像を拜禮し供物等を爲ぬ計でなく、却て之を拜む人々の爲に、毎時熱心に此聖人の傳達を願ひなさい。

二月十四日「1」

(降生後二百七十年死)
應神天皇時代

聖ワレンチノ司祭致命

(靈父)今から聖ワレンチノ司祭が致命せられたお話を爲ませう。此時は大追害の時代で、羅馬のコロヂオ第二世皇帝は、天主教は羅馬の國体に適ず其進歩を妨げる宗教であると思ひ、全く之を滅ぼして了はうといふ目的で、厳しく信者を探し出して之を殺しました。

(太郎)靈父様、私等の友達も時々、天主教は國体に適ぬとか進歩を妨げるとか種々な事を云ふて居ますが、實に奇怪ですなあ。

(靈父)然です。是は皆天主教の事を能く知らない人の云ふ言語です、少しでも教理の事を研究ると却て國家の爲め、人の爲に是非信じて守らねばならぬと云ふ事が明に分つて來ます。御承知の通り昔し此羅馬の國でも天主教信者程德の優れた者が無く、又軍隊の中にも信者程勇敢な兵士は無かつたのです。ろれで異端者や無宗教者が天主教に對して毎時斯様な淺薄な批評計を爲て居りますが、却て眞理の光が倍々輝くやうになるのであります。

扨此コロヂオ皇帝の迫害の詔勅に由て、第一番に捕へられましたのは、今からお話する聖ワレンチノ司祭でありまして、鎖で繋がれたまゝ二日間獄舍に閉籠られました。而して皇帝は自分の前に聖人を喚出して、

「ワレンチノよ、汝は何故此國の敵となつて基督教を弘めるのか」と訊ねられましたので、聖人は「陛下よ基督教信者は決して此國の敵となる者ではなく、却て他の人々よりも多く國家を愛し、國民の義務を盡して居るのであります、幸にして陛下も一度此宗教の眞なる事をお曉りになることが出來ましたならば、必ず陛下には御滿足を得られ、隨て人民の幸福ともなり、國家の光榮を得られるのであります」と淀みなく謹んで答へられました。所が皇帝は稍心を動かされて、尚も詳しく説明を求められますので、聖ワレンチノ司祭は「若し陛下は眞の神を信ずる様になられたならば、直に偶像教をお棄てになつて、此天地萬物の主宰者なる唯一つの造物主に奉事られるに相違ありませぬ」と耶蘇基督の神なる事公教會の事、人間の過去現在未來等に就て、いとも熱心に大体の教理のお話を致されました。

スルと皇帝クロヂオ陛下も聖人から天主教の教理を聞かれて、始めて其眞理なるに驚かれ大ひに感動されました。ろれで側に居る多くの侍臣に向はれ「汝等も此人の話す高尚な宗教を聽けよ」とお勸めになりましたので、侍臣も亦耳を傾けて熱心に聖人の説教を聞いて居ました。

(俊子)迫害のお蔭で聖人は皇帝の前や多くの侍臣に聖教の話をする事が出來たのですなあ。

(靈父)全く然うでした。其中に天主教をひどく憎み嫌ふて居つた此町の知事が來て、此場の有様に打驚き、聖人を睨んで「先祖の宗教を蔑如にする者よ」と叫び

ました。

今迄聖人の話に感動して居られた皇帝も、此知事の一言に心迷はされて、折角良き勸に從ふ勇氣を失はれました。同時に永き習慣となつて居る偶像敬の事を想出されたものですから、直に聖人を知事の手に托されました。スルと知事も亦聖人を罪人の如く苦める爲にアステリオと云ふ判事の許に送りました。聖人は判事の前に出られますと地に跪いて「世の光なる主基督よ、何卒此未信者なる判事と其家族の心を照して、主を認める御恩寵を與へ給へ」と熱心に祈られました。アステリオは其祈禱を聞咎めて「世の光とは何か」と不思議さうに訊ねましたので、聖人は襟を正して「耶蘇基督は此世界の眞の光で、言換れば凡ての人の心を照す天の光である」と應へられますと、アステリオは「それでは其眞僞を試して見やう、丁度我家に二年前から盲目となつた貰兒がある、萬一汝が云ふ通り基督は此世の光であるならば、此兒の眼を治して貰ひ度い、然すれば我は基督の敎を信じて汝の云ふ通にする」といひ乍ら、其兒を聖人の前に連れて來ました。乃で聖ワレンチノ司祭は小兒の眼の上に手を觸ふて、「眞の光なる主基督よ、何卒此一族の救靈の爲に此兒の眼を治して下さい」と祈られました。間もなく奇蹟が行はれて兩眼共鮮かに開きましたから、之を見たアステリオも妻も驚き畏れて、直樣聖人の足許に平伏し「吾々は如何したならば宜しいか、何卒敎へて下さい」と涙ながらに問ねました。聖人は「此家に祭祀つてある偶像を皆碎いて、三日の間大齋を爲よ、而して又罪なき信者を悉く獄舍から出して自由を與へよ、さすれば汝等は洗禮を領け、救靈を得る事が出來る」と敎へられました。それでアステリオは大に歡んで早速聖人に敎へられた通り、偶像を棄て〻大齋を守り、獄舍に繫がれて居る信者を皆許しました。而して間も無く家族家臣と共に四十六人揃ふて洗禮の秘蹟を授かりました。

スルと此不思議な出來事の評判は、直に羅馬國中に弘まつて、多〻の感動を與へ、之が爲に改心した者も多數ありました。然し天主敎に反對し信者を嫌ふて居つた人民は大ひに怒り、爲に騷動を起さうとしました。皇帝も始めには其奇妙に深く感動せられましたが、ヒヲトの如に心の中に感心しながらも、人民の騷動を怖れて遂にアステリオを始め四十六人を、慘酷に殺すことを侍臣に命じられました。

聖ワレンチノ司祭はアステリオ等に死の覺悟を爲せて居られましたが、捕へられて再び牢舍に入れられましたので、彼等に致命の特恩を與へられた事を深く感謝して、自分の致命を待つて居られました。二日の後牢舍から曳出され、鞭で散々打たれた上遂に首を斬られて名譽ある致命の冠を得られました。後敎皇陛下は聖人の致命せられた場所に立派な聖堂をお建てになりましたが、今日にも其儘に遺つて居ます。

皆樣は此お話によつて如何いふお考が起りましたか。

（次郎）靈父樣、私は此聖人の御傳達を以て此皇帝のやうに人を怖れるやうな、臆病な信仰が無いやうに願ひませう。

（太郎）私は如何な人の前でも、少しも恐れず憚らず、熱心に自分の信仰を表す惠を願ひませう。而して又未信者に道を傳へる爲に力を盡す惠も願ひませう。

（俊子）私はアステリオ判事が改心せられた後のやうに、天主樣の聖寵のお勸に從ふ恩惠を願ひませう。

（靈父）短いお話にも關らず、皆樣はうれ〳〵立派な利益を得られましたなあ。何卒いつも左樣いふやうに聖人について倣ふ可き事や願ふ可き事を注意して忘れぬやうにして下さい。さすれば知らず識らずの間に、皆樣は信仰上多〻の利益を得らるゝでありましやう。

二月十四日「2」(降生後四七〇年死)

雄略天皇時代

聖オクセンショ(軍人)山修士

(靈父)五世紀の中頃、シリヤ國のある山の麓に小さな村落がありました。一日此村の小兒等は各自羊をつれて附近の野山に遊に出懸けました。羊の番をする事を怠つて遊に耽つたものですから、何時の間にか羊を見失ひました。それで小兒等は痛く心配して所々方々と一生懸命に搜し廻りましたが、一向其所在を見當ることが出來ませんので、其儘家に歸る事も能う爲ず、皆泣きながら唯うろ〳〵して居ました。スルと後の岩窟から駱駝の荒い皮を着た一人の老人が出て來られるので、猛獸か化物であろうと思ひ、大ひに怖れて一同逃げ出さうとしましたが、其中に老人が近づいて「皆何故泣いて居るのか」と親切に尋ねられました。それで小兒等は心配も消ゑ失せて、口々に其理由を話し、此儘歸つたならば叱責れると鬱いで居ますから、老人はヨシ〳〵と頷いて少頃祈禱をせられて「其羊は此山の東の方に居るから早く行つて連れ歸れ」と敎へられました。其時小兒等は「イヤ先刻其所に行きましたが、一頭も居らなかつた」と答へましたので、老人は「余の告げる事を疑はず早く行け」と云はれました。それで小兒等は急いで再び其處に行きますと、老人の云はれた通り羊が居ましたので、大ひに歡んで各自之を曳き連れて家に歸り、親達に詳しく其事情を告げました。乃で此老人の事を聞いた人々は、此方は必ず何かの德に優れた行者に相違ない。多分此世間を避けて苦業を爲られ、此近邊の國々の爲に天主樣の恩惠を祈つて居られる御方であらうと想ひ、早速訪ねて行きますと、果して其通り此老人は聖オクセンショといふ行者で原と智慧も、才能もあり、至つて信仰の堅い近衛の士官でありました。

(太郎)然しますと矢張迫害を遁れる爲に、此處に來られたのですか。

(靈父)否ね、豈早此時分には迫害が無かつたばかりでなく、時の皇帝マルシアノ陛下も熱心な天主敎信者で在られたのであります。聖オクセンショは此皇帝に大層寵愛られて居られましたが、某司祭と仲好き友達となつて、時々此司祭と共に永い祈禱を爲たり、苦業を爲たりして、靈魂上餘程詳しい事までも知られ、世間の譽の果敢ない事なゝを曉られましたので、終に身を獻げて天主樣に奉事やうと決心し、世を避けて此山に來られたのであります。而して此山の中に小家を作へて其中に住居せられ、入口を皆塞いで出入する事が出來ないやうにし、唯小さな窓を一つ開けて此所に訪ひ來る人々に、此窓から說敎して、天主樣に對する愛を起させ、聖旨に從はしめる爲にいろ〳〵の良き勸めを致して居られました。それで此麓の人々は斯樣な德高き聖人が附近に居られるのを何よりも幸榮として、病氣や災禍や心配があると直に聖人の許に行つて、祈禱を願ひ慰藉を受けて居りましたが、奇妙にも每時功驗がありますので、聖人の許に行くと恩惠を得るといふ噂が漸次に高くなりました。

謙遜なる聖人は斯く人々に噂せられるのを厭はれて何地か人に知られぬ地に移り度と思はれましたが、其中に人々は多〳〵の病者や不具者や惡魔に魅かれた者等を方々から此所に連れて來ました。

(次郎)靈父樣、惡魔に魅かれると何んなになるのですか。

(靈父)惡魔が人の体の中に入るのですから、之に魅れた人は非常に苦められるのです。

(太郎)スルと惡魔の奴隷になつた大惡人でせう。

(靈父)否ね、惡魔は其人の肉体の中に入つても、靈魂までも侵すといふ事に極まつて居りませんから、惡魔に魅かれたといふ丈では、大惡人といふ事が出來ませぬ。又時々天主樣は特に或人に功績を樹てさせる爲め、惡魔に其人の肉身を使ふ事を御許になることがあります。然し此時でも惡魔は其靈魂までも害するといふ事

がありませぬ。畢竟此日本では悪魔に魅かれたと言はず、之を狐付とか何とか申して居ますが、然し唯神經や病氣や迷信の爲でも狐付といふ言葉を用ひて居るやうですから能く此區別を爲ねばなりませぬ。

(俊子)今日でも矢張悪魔に憑かれる人があるのですか。

(靈父)左樣今日でも有ますが、昔程數多にありませぬ。

聖オクセンシオは此悪魔に憑かれた者や、病者を醫す爲に特恩を蒙けて居られました。其時に聖人の古い友達であつた士官が、聖人の德高く奇蹟を行はれる風評を聞いて、是非一度面會たいと思ひ、自分の友人に其事を話しました、所が此人は高い位の人でしたが無宗教者でありましたので、其れを聞いて一私は神か其麼能力を人々に與へるといふ事を信じませぬ。多分其人は名譽を得る爲に非人乞丐等に金錢を與つて、悪魔に魅かれた者の眞似をさせ、後で聖人に話して貰ふと言觸らさすのでせう」と嘲りました。

(太郎)それは甚い邪推ですなあ、却て世間の名譽を棄てる爲に、世を逝れた御方ですから、其麼ことはありませんのに。

(靈父)全く然です。ろれ故士官は之を辯護して其言葉を誡め、兎に角一度聖オクセンシオの許を訪ねませう」と二人伴で行きました。

聖人は默示によつて早くも一人の悪い心を曉つて居られましたから、其人には何にも語らず唯友人の士官と暫く談話したばかりで、其日は別に何の不思議な事もなく別れました。ろれで無宗教者は聖人の所爲は愈々自分の察へた通りであると思ひ、非常に喜んで歸る途々士官に向つて頻に聖人を悪く云ふて居ました。スルと其人の下僕は顏色を變へ、呼吸も急しく「旦那樣唯今お嬢樣は悪魔に魅かれました」と報知に來ました。無宗教者は大に驚いて急ぎ歸つて見ますと、實際娘は悪魔に魅かれて可哀相に痛く苦んで居ます。乃で其人は奇妙に思ひ是は全く自ら招いた天罰であらうと、良心の刺戟に感じて大ひに嘆きました。側に居つた士官は友人の樣子を見て「貴下は天主樣を信仰しなさい、而して此娘をオクセンシオ聖人の許に連て行つて治して貰ひなさい」と勸めました。無宗教者は此時天主樣の聖寵に照らされて、信仰心が起りましたから、士官の勸誘に從ふて娘を聖人の許に連行きますと、聖人は直に十字架の符をして悪魔を逐出して、其父親に向はれて「如何ですか、貴下の娘を連て來た爲に私から金錢をお取りになりましたか……、此娘の不幸は全く天主樣が貴下の罪悪を罰する爲であつたのですから、早く心を悔めて娘が全快した事を深く感謝し、全能なる天主樣を信仰して熱心に擧事なさい」と厚く說き諭されましたので、無宗教者も翻然改心し、後遂に立派な信者となりました。

聖オクセンシオは斯して身を修め德を積み、人々の靈魂肉身をも助けて、十年の間此處に住居せられましたが、丁度其時異端の誤謬の說を禁める爲に、教皇陛下は多勢の司教樣方をカルセドニアと云ふ町にお集めになつて、會議を開かれました。(此はカルセドニアの公會議と云ふて有名い會議であります)。時の皇帝マルシアノ陛下は前に申しました通り、熱心な信者で御座いましたから、特に此會議に御臨幸になりました。而して皇帝は以前近衛の士官であつた。オクセンシオの德行高き名聲を聞いて居られましたから、使者を遣られて聖人を御召になりました。然し聖人は謙遜して、私は役に立たぬ者、賤しい者でありますから」と再三御辭退せられましたが、終に使者は戸を壞して中に入り、强て聖人を馬車に乘せて皇帝の許につれ歸りました。道すがら多くの人々は聖人の赴かれるのを見て、再びお目にかゝる事が出來ぬと思ひ、非常に愁ひ悲んで居ました。聖人はカルセドニア町に着かれましたが、此時には最早會議が終んで居ました。

皇帝は聖人が永く苦業をせられ、年齡を重ねられて

蒲〜弱つて居られるにも關らず、消く愉快な精神があり〳〵と顏にまでも現はれ、崇高く柔しい姿を見て、大に感心せられ慎みと敬ひとを以て、叮嚀に歓待されました。而して會議の決議を示せて「聖人は天主樣に愛せられる方であるから、此決議は眞の信仰に協ふか否か、意見を陳て與れるやう」にと仰せられましたので、聖人は謙遜して「陛下よ、私のやうな卑賤い者が如何して意見などを申し述る事が出來ませうか、無論是は教會の司教樣方が集つて決められた事でありますから、決して間違はありませぬ、私は謹んで此決議に服從ひませう」と答へられました。それで皇帝も聖人に會れた事を深く喜ばれ、信仰上に就ていろ〳〵の說明を求められて居られましたが、聖人が永く此所に止まつて居るのを厭がられますので、强て引留る事も出來ませんから「尙も此國の爲に祈禱をして下さい」と願ふてお訣別になりました。

（聖オクセンシオの祈禱）

聖オクセンシオは宮殿を出られて、以前の山に歸らず、別の險しい山をお撰びになつて、其所で相變らず祈禱と苦業をして熱心に天主樣に奉侍て居られましたが、間も無く復人々が之を知つて以前よりも一層多く集つて來ました。それで聖人も詮術なく皆夫々に慰を與へ、良き勸告を爲られましたので、改心した者は數多ありました。聖人の死期が近づいた時、一月十一日にお話した杜上の聖シメオンは聖人に御出現になつて、自分と共に天國に昇るから天主樣に感謝せられよ、といふ報告を致されました。聖オクセンシオは此聖シメオンとは全く時代の御方でありましたが、遠く距れて居るにも關はらず、聖シメオンの死なられた事を知られました。それで立派な覺悟をして、多くの功績を以て聖シメオンの跡を慕ふて遂に天國の幸榮を享げる特恩を得られました。

（次郎）靈父樣、私は此聖人の奇蹟を行はれるのを嘲つた前の無宗教者の事を思ふて、此から靈父樣の仰しやる事を何んでも誹ちぬやうにしますから、私に惡魔が魅くやうな事がありませんでせう。

（靈父）ろうですとも、其麼心配は要ませぬ。ろれで皆さんは此お話によつて、例令此樣に惡魔に命令する程の權能を受けて居られる優れた聖人でさへも、教會の決議によく服從はれて、吾等に良き模範を與へて下さつたのでありますから、吾等は教理に就ていつも謙遜、柔順、質撲を以て心の底から之に服從ふ信仰の恩寵を願はねばなりませぬ。

二月十五日（降生後百二十二年死）

應神天皇時代

聖フォスチノ司祭
聖ジョビタ助祭　兄弟致命

（靈父）皆樣の御承知の通り、往古聖主が御死去になられてから後、永く恐ろしい迫害が續きましたが、此時多くの聖人聖女等は、吾々に今日の如く天主教を自由に、公けに信仰する事を得させる爲に、非常な難義と蒲苦とを嘗められたといふことを、毎時忘てはなりませぬ。

ろれで今日お話致しますのは、降生後百年餘り後の事で、聖フォスチノと聖ジョビタと云ふ、御兄弟が相共に致命せられた有名いお話であります。

兩聖人は伊太利國の北の方に在る、プリタシアといふて數多の致命人が出られた町にお生れになりました。高き家柄でありましたが、兩聖人は幼い時から信仰が厚く、德も亦優れて居られました。ろれで終に兄

の聖フオスチノは司祭となられ、弟の聖ジョビタは助祭となられました。而して兩聖人は共に力を協せて天主樣の爲に熱心に道を說き、多くの人々を感化して居られましたから、信仰の恩寵を蒙る人が多數出來ました。

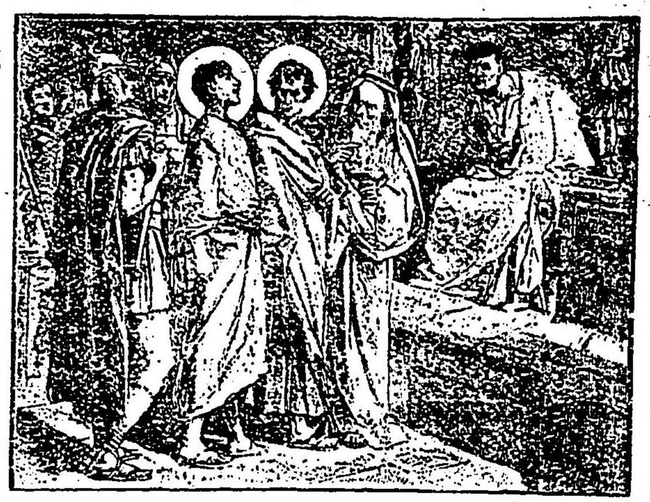
ところが豫て天主敎を厭がり嫌ふて居つた此町の知事は兩聖人を敬ひ慕ふ人々の日々に殖ゑるのを見聞して、如何かして之を妨げやうと思ふて居る矢先、皇帝のアドリアノと云ふ方が羅馬に歸られる途中、此町にお立寄になりました。乃で知事は早速皇帝に其由を詳し〳〵告げて御指圖を願ひますと、皇帝は「如何しても天主敎の進步を禁めねばならぬから、直樣其兄弟を捕へ、公けに責めて是非敎を棄てさせよ。然すれば彼等兄弟に從ふ他の者等も、恐怖を懷いて自然に敎を棄るやうになるから」と命ぜられましたので、終に兩聖人は捕へられて、知事の訊問を受けられる事になりました。

知事は平素の憤慨を晴らすは此時であると大ひに歡び、又皇帝の命令であるから、兄弟も造作なく敎を棄てるに相違ないと思ふて、訊問に懸りました、が兩聖人の道理ある言葉と堅き信仰に打克つ事が出來ず、訊ねる言葉も出ないやうになつたので、知事は大に閉口して、終に兩人を偶像の祀つてある神社につれて行きました。此時皇帝も是非兩人に敎を棄てさせやうと思ひ、俱に神社に來られたのです。それで一同が此社に着きますと、知事は太陽の神の偶像を示して兩人に向ひ、「是は眞の神であるから、汝等は此神の外他の者を信じ拜んではならぬ。早く此前に平伏して拜禮せよ」と命じました。聖ジョビタ助祭は此偶像に向ひ「憐れなる偶像よ、汝を拜禮する人々の恥辱となる爲に、汝の姿が如何なものか示現して見せよ」と申されました。スルと奇妙にも今迄光り輝いて居つた其偶像が、急に煤煙にでも被はれたやうに眞黑くなり、頭の金箔も鼠色に變りましたから、皇帝も大に驚き、「是は如何した

のぢや」と思はず叫ばれました。それで神主が近づき其像を拭ひ清めやうとして布を當てますと、忽ち灰燼となつて了ふたのです。其時皇帝知事を始め見物の人々も唯其不思議に驚いて、少頃の間は一言も出ず、水を打つたやうに靜かになりましたから、兄の聖フオスチノ司祭は、皇帝と人々を見廻して「陛下よ御覽なさい、陛下を始め人民の拜んで居られた大切な神は、斯いふやうに哀れな姿となつて了ひました」と申されました。

（次郎）皇帝も知事も閉口したでせう。其時何と思つたでせうか。

（父）皇帝は此兩人の者が、國の神を穢したと大層怒つて直にも嚴しく罰しやうとせられましたが、多方此者等は魔法遣であらうと思返し、「兩人を演技場に入れて、猛獸の餌食に爲よ」と命じられました。人民は早くも此事を聞知つて、其日は夜の明ぬ中から多數の人々は町の演技場に押寄せて來りました。神主や知事も亦夫々準備をして、其中央の高い所に偶像を祭り、兩聖人を其所に連れて來ました。而して皇帝や群衆環視の前で聖人等を殺させやうと、二頭の飢ゑて居る大きな獅子を中央に逐ひ放ちました。獅子は忽ち狂ひ叫びましたか、兩聖人の側に行きますと、急に力が拔けた如に靜に其邊を嗅いで後、頭を下げて柔しく兩聖人の足許に伏して少しも害を加へやうと爲ませぬ。皇帝は之を見てもどかしく思はれ、更に



聖フオスチノ司祭、聖ジョビタ助祭の御兄弟が
（偶像の前に訊問を受け給ふ）

豹と能を放せ」と命じられました。ろれで知事は早速命令通にしましたが、全く熊も豹も兩聖人の傍に行くと、何か近よる事を禁められた如に、其周圍を徐々巡つて却て兩聖人を守護るやうにして居りますので、見物の人々も其奇妙な樣子に驚いて、少頃鳴を靜め皆一齊に神主と知事の方に目を注けました。

（太郎）其時神主の顏は如何な風でしたでせうか。

（靈父）神主も如何かして國の神の耻辱を寃ぎたいと思ひ、大に當惑して居りましたが、衝と起つて皇帝の許に行き、「御覽の通り國の神樣は、彼の兄弟の狂氣を憫んで生命を救けて下さるのでありますから、私は此國の神樣の權能を人々に示る爲に、兩人を助けに行かうと思ひますから、何卒中に入る事を許して下さい」と願ふて許可を得ました。乃で神主は知事を先頭に立て、他の小さな偶像を恭しく捧げつゝ演技場の中央を指して出ました、所が案外にも今迄眠つて居つた如な四頭の猛獸は、突然起上り眼を光らし、牙を鳴らして驚く知事と神主に飛附きました。スルと群衆は皆手に汗を握つて、「國の神よ、汝の使を助けよ」と叫びました、が何の甲斐も無く神主と知事は哀にも瞬間に猛獸に引裂れて其餌食となりました。而して其騷ぎに祭つてあつた偶像は、神主等の血の流れる所に落ちて、猛獸に踏み潰されたのです。其時知事の妻アフラーと云ふ者が、夫の悲慘な最後を見て、氣も狂はん計に悲み、「皇帝よ此國の神は如何したのでせうか、自分も穢され潰され、拜ひ者までも殺させました。私の夫を蘇生らす力があるでせうか……」と、泣き叫びました。群衆の中には此アフラーの言葉を聞いて、手を拍いた者もありまして、多くの人々は此光景を見て、今迄憎み嫌ふて居つた天主教こそ眞の宗教であらうといふ觀念が起りました。

皇帝アドリアノは此儘にして置くと、益々自分の耻辱になるから、早く之を中止させやうといふ考で、兩聖人に對して、「若し汝等の神が眞の神であるならば、之を證す爲に汝等は此猛獸に命令して、思ふまゝに從はせるやうに爲せ」と云はれました。聖フオスチノ司祭は「さらば吾等の拜ひ神は眞正の神であり、又全能の御方であると云ふ事を見せませう」と云ひ畢り、少時祈られて後、猛獸に向はれて「天主の聖名に由て、他に害を與へず此處を去れよ」と申されました。スルと流石の猛獸も此言葉を聞分けたか、羊のやうに靜に打揃ふて、場外に出て山の方を指して遁行きました。

（俊子）是は全く奇蹟でしたなあ、皆感心したでせう。

（靈父）然です、此奇妙な事柄は町中の大評判となつて、人々は良き感化を與へられましたから、之が爲に眞の神樣を認めて洗禮を望む者が夥しく出來ました。彼の知事の妻アフラーも終に偶像敬を棄てゝ公教信者となりました。

アドリアノ皇帝は近衛の軍隊長カロセロ大將に吩咐て、兩聖人を牢獄に入れさせました。此カロセロといふ大將も此時最早感動を與へられて、信者になる事を望んで居られた方でありましたから、兩聖人を親切に勞りました。後皇帝は兩人を牢獄から曳出して、燠に燃ねて居る火の中に入れて、痛苦めやうとせられましたが、復た奇妙にも兩聖人は少しの害も御蒙けになりませんでした。

於此皇帝は兩聖人に敎を棄てさせる事が出來ぬ計りでなく、却て多くの人々が導かれ歸正るのを見聞して大ひに怒り、曩に再度も三度も奇妙に驚かれた事や、何手段も皆水の泡となつた事等も皆忘れて、威權ならびなき羅馬の大皇帝が此二人の司祭助祭に苦められて、一つも克つ事が出來ないのを殘念に思はれて、又一つの新らしい工風を凝されました。卽ち今度は兩聖人を閉籠てある暗い牢獄から出して、立派な寢臺を供へてある、美しく贅澤な室に入れました。而して御自身が直接に、「汝等は唯一言敎を棄てると答へるならば、此室にて愉快な月日を送る事が出來、又一番高い位も與へ、出來る丈多くの便宜を與へるから、能く考

へて見よ」と、皇帝は耶蘇基督の熱信なる弟子が、貧澤よりも天主樣の爲に苦痛を耐へる方を好ひと云ふ事を知られませぬから、尙も丁寧に歎待して只管敎を棄てさせる事に努められました。然し兩聖人は此立派な室に入れられると全時に心の中に非常の苦痛を覺ゑられましたから「天主樣よ、何卒私等の身體を献げ奉りますから、斯やうな贅澤な生活よりも甚い苦痛を與へて下さい」と祈られました。

(次郎)然し其夜は立派な寢臺の上で寢られたのでせう。

(靈父)否ね、兩聖人共其夜は一睡も爲られず、床の上に跪いて信者の信仰の爲と、未信者の歸依の爲めに熱心な心に祈禱をして居られました。それで兩聖人の熱心な此祈禱は聽容られまして墨のカロセロ大將は此夜部下の士官や多くの兵士と共に此町の司敎樣アポロニオと云ふ方が隱れて居られた山の中に訪ねて行き、詳しく敎理の話を聞いて洗禮を受けましたが、間もなく皇帝は此事を知つて狂氣の如に怒られ、直樣大將を始め兵士を殘らず捕へました。而してカロセロ大將を一層苦める積りで故と殘し、他の士官と兵士を演技場の中に入れて、所有慘酷しい方法を以て虐殺に致しました。

後皇帝は一日も早く不愉快な此町を去つて、羅馬に歸還らんと準備せられ、兩聖人とカロセロ大將の三人を鐵鎖で珠數繋ぎとなし、途々見懲の爲め御自身の後から曳行かせました。頓てミランと云ふ市に着くと、三人の方々は非常に疲れました。皇帝は之を見て大ひに歡び今勇氣が失くなつたから、敎を棄てさせる爲に好き機會であらうと思ひ、名譽や位を與へる約束をしていろ〳〵と宥め賺して歡められました、が熱心な信者は毎も自分の力丈に依賴ひのではなく、基督の力に依靠るのでありますから、假令肉體は痛く衰へ弱つても、堅き精神は少しも變らず、三人共口を揃へて皇帝に「私等を敎を棄て爲せやうと力を盡される事を中止て下さい、此は駄目で御座います。私等は死ぬ迄耶蘇基督の敎に從ひ仕へる積りですから、決して敎を棄てませぬ」と申されました。皇帝も此上術の施しやうが無くなつたので、皇帝の尊嚴をも打忘れて大ひに震怒られ、直に役人に向つて「此三人を仰向けに樹に縛り付けて倒し、動かぬやう四隅を抗で地に打附け、そして口中に漏斗を嵌め、鉛を鎔して入れよ」と嚴しく命令せられました。

乃で役人等は早速命令通り三人を樹に縛つて倒し、各自の口に鎔かした鉛を入れやうとしますと、奇妙にも鉛は漏斗から上に沸き出て却て役人等は手にも顏にも大火傷をしました。それで皇帝は益々怒り狂ふて、三人を拷問の器械の上に寢かせ、眞紅に燒いた鐵板を各自の胸の上に當ました。スルと此時まで何にも言はず辛抱して居られたカロセロ大將は苦痛に耐へ兼ねて「御兄弟達よ、私は非常に苦いから何卒私の爲に耐へる力を祈つて下さい」と願はれましたので、聖フオスチノ司祭は「今暫く耐へ忍びなさい、主の御使が吾々を助けて下さるから」と應へ慰められましたが、奇妙にも大將は其時から大ひに力を得て、何にも苦痛を感せぬやうに見ゑました。其中に役人等は再び鐵板を燒かうとしましたが、急に火が消ゑて二度と火を起す事が出來ないやうになつたので、此所に集つて居つた、大勢の人々は面のあたり此奇蹟を見て大ひに感じ「天主敎信者の神が眞に全能の神である」と、皆叫びました。

それで皇帝は復も失敗に終りましたので、此ミラン市に居る事を欲まないやうになりましたから、前と全し人々の前で恥かしめやうといふ考で、三人を鐵鎖につないだまゝ羅馬を指して出發せられました。然し此見懲も亦反對に天主樣の御光榮を現はす良き手段となつて、行過ぎる途々の人々は此三人の方々は信仰の爲に、數多の苦痛を嘗められたにも關らず、斯く沈着いて忍耐と勇氣とを備へて居られるのを見、又傳へ聞いて一方ならぬ全情と尊敬の念を起し、ひい、て眞の敎に歸依る人が多數出來ました。

後羅馬に着きますと、時の教皇聖エバリスト陛下は秘かに三人に面會れて、祝福を與へられ、多大の慰藉を爲されました皇帝は迚も彼等に敬を棄てさせる事が出來ないと斷念めて、直にカロセロ大將を首刎ね、兩人の御兄弟を其故郷のブリクシア市に送り還して、其町の人々の前で首を斬るやうに命じられました。それでブリクシア市の信者は聖人等の歸られる事を聞いて大いに歡び、皆迎へに出て兩聖人の施祝を受けました。間もなく永く千辛萬苦の艱難を受けられた聖フオスチノ司祭と聖ジョビタ助祭の御兄弟は、多くの人々に改心の恩寵を與へなさつた事を、厚く天主樣に感謝せられながら、遂に芽出度致命の榮譽を得られました。

(太郎)靈父樣、天主樣は今迄度々奇蹟を行はれて聖人等をお助けなさつたのに、今一度奇蹟を行ふて助ける事が出來なかつたのですか。

(靈父)然し耶蘇基督も此世に居られた間に、度々御自分が神であるといふ証據を示される爲に、多數の奇蹟を行はれましたが、それにも關らず時期が來ますと、甘んじて吾等の爲に十字架の上で御死去なされたのではありませんか。丁度此御兄弟も同じ事で、天主樣は未信者を改心させる爲に、種々の奇蹟を行はれましたが、時期が來たので御兄弟の立派な犧牲を御受取になつたのであります。それで天主教信者なる皆樣は、毎時此犧牲、即ち天主樣の爲に苦む必要があるといふ大事な事を忘れぬやうに爲ねばなりませぬ。此靈魂上の事は肉身上の事と全然で反對でありまして、人知れず天主樣の爲につらい事をすると、之が恩寵の素なるよき犧牲となつて、天主樣は必ず之に報ゆる爲に、靈魂上の恩寵を與へて下さるのであります。

(次郎)然し靈父樣、私等は如何樣な犧牲を獻げたらよろしいでせうか。

(太郎)私は一つの良い犧牲を知つて居ります。例へば朝寢床の中で、起きたくないと思ふた時に此兩聖人の事を想へて、直に起るやうにして此辛い事を天主樣に獻げたなら、天主樣も喜ばれるでせう、靈父さま。

(靈父)之は却々結構な犧牲であります。何卒さういふ犧牲を獻げるやうに努めなさい。天主樣は全善の御方でありますから、些細な犧牲でも御氣に召す目的で爲た犧牲は、必ず嘉して下さるのです。而して又天主樣は此犧牲を以て、哀な靈魂を救ける爲に御使用なさるのであります。

(俊子)信者を責める者は多く非業の最後を遂げると云ふ事を毎度承ますが、此皇帝は如何なりましたか。

(靈父)アドリアノ皇帝は後、此世の快樂を極めやうとせられましたが、思ふ半分も滿足する事が出來ませぬので、遂に失望して或夜懺悔の時に自殺せられました。其靈魂は今何處に居るでせうか！。

又此聖フオスチノ司祭と聖ジョビタ助祭の御兄弟は此市の保護の聖人として、尊び崇められて居られます。而して其聖遺物は今日にも遺つて居るさうでして、今は立派な聖堂までも建てられてあります。

二月十六日(降生後三百十年頃死)

聖女ジュリアナ童貞致命

應神天皇時代

(靈父)羅馬に於て第十回目の大迫害がありました時分に、亞細亞のニコメディアと云ふ町に、聖女ジュリアナといふ童貞が居られました。

父親は外教人で、非常に天主教を嫌ふて居ました。母親も亦世間的の婦人で、信者の行爲を感心して居りながら、臆病のために改心する事も出來ず、唯世間の樂しばかりに、耽つて居りました。聖女ジュリアナは容貌麗はしく、性質柔しき方でありましたが、斯いふ家に生れなさつたから信仰は至つて危なかつたのです。然し幸ひにも天主樣の恩寵によつて、早くから偶像教を嫌ふて、信者と交際せられ、漸々教理を覺るやうになられまして、終に父親に秘密で洗禮を領けられました。

(太郎)靈父樣、お父さんに默つて洗禮を領けても擠は

んのですか。

(靈父)無論親の許可を得る事が出來るならば何よりも結構な事でありますが、若し不幸にして親御に願つても許されぬと云ふ事であれば、實際親は眞理の教を信じ守る事を禁める權利がありませぬから、場合によつては、無斷で洗禮を領けても差支がないばかりでなく、却て功績になる事もあります。然し此事は一概に斯々と云ふことが出來ませぬから、左樣いふ場合には、詳しく其事情を司祭に陳て、萬事司祭の意見に從ふやうに爲ねばなりませぬ。

聖女ジュリアナは父親が頑固で、非常に天主教を嫌ふて居るから、迚も許可を得る事が出來ぬばかりでなく、却て反對に責められるといふ事を、熟知つて居られましたから、寧ろ自分は洗禮を領けて後、一層行狀を慎み、善德に進むやうに努めたならば、何時か又父親をも歸依らすことが出來るであらうと覺悟せられたのであります。ろれで聖女は日增に德を積み、特に淸淨潔白を重じて居られましたから、自から尊敬の念を起させる程立派な方となられましたが、父親はまた娘が天主教信者になつたといふ事は夢にも知りませぬから、娘の行爲を見て大ひに感心し、最早妙齡になるから何家か立派な家の者と結婚を爲せやうと、彼れか此れかと物色して居る中、丁度エピラシオと云ふ貴族の息子が、聖女を嫁に貰ひたいと申込みました。乃で父親は此エピラシオの家ならば位も高く、財産も多くあるからと思ひ大ひに歡んで、娘の意見も聞かず獨合點で早速約束を極めました。

(俊子)さうしますと、其父親は聖女を位階や財産と結婚させやうとしたのですなあ。

(靈父)然です、今日でも世間の親達は勿論、時々信者の中にも矢張、我娘の爲に信仰の事や眞の幸福の事をよく慮らず、唯財産とか位階とか殊更誘惑多き世間的の名譽等の事計を望んで結婚を爲せる者があります が、寔に嘆はしい事であります。

間もなく聖女は此事を聞知つて大ひに驚かれ、父親の淺ましい心根を嘆き悲しまれました。つまり聖女は唯未信者と結婚する事を厭がる計りではなく、出來得るならば童貞を守らうといふ決心であつたのです。然し其樣な事を明らさまに告ると父親を怒らせるばかりであるから、何とか口詫を設けて之を謝絕ませう、といろ〳〵思案の後先方に使者を遣つて、「貴下は此町の知事にならねば、私は結婚する事を承知しませぬ」と難題を持出しました。所がエピラシオは之を聞いて少し不思議に思ひましたが、何樣聖女との結婚を深く望んで居るものですから、如何にかして其歡心を得やうと、多額の金錢を賄賂に費ひ、さま〴〵の運動をした結果終に知事の職に就く事が出來ました。

乃でピエラシオは大に喜んで、早速約束通り結婚する事を聖女に迫りました。聖女はよもやと想ふて安心して居られました所へ、エピラシオの使者が來ましたので、大ひに驚き當惑致されました、が最早什麼しても自分は信者であると云ふ事を、言顯はさねばならぬやうになりましたから、其時大齋して祈、天主樣に御助力を願はれました。而して知事に「私は天主教信者でありますから、偶像教に從ふ方とは何しても結婚が出來ませぬ、然し尙も私をお望みならば、どうか偶像教を全く棄て下さい」との回答を爲さいました。丁度此時はマキシミアノ皇帝が大迫害をせられる時でしたから、ジュリアナの信者であるといふ事を知つたエピラシオ知事は、大邊に驚いて、直樣此事を聖女の父に告げました。

それで父親は聖女を呼寄せて、「知事はお前と結婚する事を望んで居るのに、何故お前は之を謝つたのか」と尋ねましたから、聖女は「若し知事が偶像教を棄て、眞の神を拜むならば、私は喜んで結婚を爲ますが、さもなければ私は之に應ずる事が出來ませぬ」と答へられました。父親は聖女の堅き決心を見て大に怒り、「若しお前が我儘を止めて知事と結婚せねば、猛獸の餌

食にするぞ」と嚇しました。然し聖女は「私は天主教信者でありますから、縱令如何な慘酷な苦みに遭はされましても、教に背くやうな事が出來ませぬ」と勇々しくも御自分の眞の信仰を表はされましたから、父親は親たる義務も忘れ、直に下僕を呼んで聖女を酷く鞭つた上、鎖につないで暗室に入れました。而して其間度々「基督教を棄てゝ國の神に仕へよ」と厳しく責めましたが、毎時も「私は聞く事も話する事も出來ぬやうな、偶像を拜む事は如何しても出來ませぬ」と少しも聞入れる樣子がありませぬから、父親も遂に持餘して「此上は閣下の勝手にして下さい」と聖女をエピラシオ知事の許へ送りました。

乃で知事は直に裁判所に呼入れました。知事は、父に酷い苦みに遭はされたにも關らず、自然に具はつて居るジュリアナ聖女の美しい容姿を見て、故と柔しい言葉を使ひ「何故貴孃は私と結婚する事を拒み、又國の神々に仕へず殊更外國の神を拜みますか……若し私と結婚なさるならば、他の宗教を守る事も許しますが……」と勝手な事を述べて、いろ〳〵樣々に說き論し、唯々結婚を承知させる事ばかりに努めました。それで聖女は「もし貴官が實際天主教信者になりなさるならば、私は喜んで結婚しませう」と申されました。所がエピラシオは情なささうな風をして、「私も信者になりたいのは山々ですが、萬一其事が皇帝の耳にでも入ると、直に死刑になりますから、これぱかりは如何しても肯入れる事が出來ませぬ」と答へましたので、聖女は嘲笑ひながら「私は眞の神樣の爲に、死を怖れるやうな人とは迚も同居する事が出來ませぬ。何卒之から後は阿諛の言葉を以て、私を欺し迷はす事が出來ると思ひなさるな」と窘められました。スルと知事は次第に荒い言葉となつて「若し汝が基督教を棄てねば、酷い責苦に遭はすぞ」と脅しました、が聖女は少しも怖れず、「私の信ずる天主樣は、全能の御方でありますから、若し聖慮なれば如何な酷い苦痛をも耐へるだけの力を與へて下さるのです、又貴官の手から救かる事も出來るのです」と應へられました。

之を聞いて知事は自暴氣味となり、兵士に命令げて鞭で聖女を打たせ「之は阿責の初めであるぞ、早く教を棄てぬと次第に厳しくなるぞ」と、復も兵士に打たせました。然し聖女は苦痛を受けながら却て「私は苦みを受けて倒れるよりも先に、貴官が責め疲れる」と云はれましたので、知事は今迄の樣子とは全然一變つて、丁度手負の虎の如に怒り、血相凄く、兵士に命つけて、聖女の髮を執つて宙に釣し、散々に甚く打擲させました。

聖女ジュリアナ童貞惡魔に打克ち給ふ

此無慘なる阿責は一時間餘も續きました、が其間聖女は殆んど夢中となつて、たゞ「天主樣よ、何卒私を助けて此苦みに堪へるやうに……」と計り祈つて居られました。其中に血が浸染み出て、身体が紫色となり、眼の球が飛出て見るに忍びぬ慘い有樣でしたが、終に髮の毛が皆拔けたものですから、地上に落ちて倒れました。スルと知事は尙其上に葉火で傷を燒き、兩掌を燒火箸で刺通し、復も六時間餘り酷い苦痛に遭はせました。此時聖女は知事に向つて「斯やうな痛苦を以て、我に克つ事が出來ると思ふか、憫むべき者よ、我は基督の御力によつて、汝に打克つのである」と叫ばれました。それで知事はまた沸つた油を全身に注ぎかげる事を命じ、一先づ繩に繫いで牢獄に入れさせました。

今迄絕ねず祈禱をして、苦痛を耐へて居られた聖女

ジュリアナは、此時自分の体が、目も當てられぬ程悲惨な姿になつて居るのを見て、涙を流し「全能の天主様よ、私は主を愛し拳る爲に斯やうな苦痛を受けました。どうか御榮光を現はす爲に、此上苦みに耐へる力をお惠み下さい」と、一心に祈つて居られました。スルと奇妙にも此牢獄の中に一道の光が射して、天使の如な姿が現はれましたので、聖女は驚いて目を瞬ると、「神に愛せられたジュリアナよ、知事は尚も一層嚴しい苦痛を與へやうと工風して居る、然し最早汝が充分苦痛を受けて、勇氣を表したから、天主様は滿足に思召されて、汝を再び苦痛に遭す事を望まれず、ろれで明日知事は偶像に供物をさせるために、汝を喚出しに來るから、其時には新しい痛苦を免れる爲に、故と彼の意に從へよ」と云ひつゝ側に寄つて來ました。聖女は不思議な勸めを聞くものかな、と不審に思ひつゝ、心の中に熱心に祈つて後、現はれた者に向ふて、「御身は何誰であるか」と尋ねられますと、「我は汝を死から救ふ爲に、天主様から遣はされた天使である」との答がありました。聖女は益々奇妙に思ふて、良久く默想して居られましたが、頓て此は惡魔の所業で、我を誑す爲に、善き天使の形を藉つて居るのであらう、といふ事を曉られましたから、「天主様よ、今私の身體を御手に托し奉る、何卒惡魔の誘惑に引かれぬやう、助け給へ」と祈り畢ると、忽ち天空から聲がして「安心せよ、我は汝と偕に居る、今汝に惡魔を服從しめる權利を與へん」と耳に響きましたが、此時奇妙にも全身の疵傷が皆治つて、以前の通り立派な身体となり、疼痛までもなくなりました。而して又同時に、今迄天使の姿を假つて居つた彼の惡魔は、今度は人の形となり、奴隸の如に鐵鎖につながれたまゝ、聖女の足許に跪まつて居りますので、聖女は驚愕して「汝は誰か、何を爲に來たのか」と嚴しく訊ねられました。スルと「私は惡魔であります。私は常に惡人を使ふて、善人を誘ひ陷れる事を努めて居まして、今日迄に多くの人を墮落させました。然し此樣に貴女に負けますのは、眞に面目がありませぬ。何卒歸り去る事を許して下さい」と悔れにも泣かん計に願ひました。惡魔は聖女から酷い苦みに遭はされて、終に姿を隱し消え失せました。

翌日知事は再び責苦に遭せる爲に、聖女を牢獄から曳出させました。見ると聖女の身體は以前の如に、美しく又丈夫になつて少しの疵痕もありませぬから、知事の驚き畏れは一方ならず、少時默つて驚き呆れて居ましたが、多方此女は魔法遣であらうと思つて、「此不思議な術を誰に敎はつたのか、一体誰が其樣に治したのか」と不審さうに訊ねました。聖女は言葉正しく「我身を治して下さつたのは、日頃信じ仕へ拳る所の聖主基督である。尙また我は眞の神の權能によつて、汝が從ふて居る惡魔にも克つた、若し汝が心を改めて眞の神に服從はねば、終なき苦罰を免かれる事が出來ない」と優しくも己を責める者に對して、其改心を促し勸められました、が心頑くな知事は、多の奇蹟も心に映らずして大ひに怒り、熾に火を起させて聖女を其中に投入れさせました。然し繋いであつた繩が燃ねたばかりで、聖女は何の害も受けられんので。

此時役人等を始め見物の群衆等は、凡ならぬ數々の奇妙に打驚き、「此聖女の拜まれる神樣は、確に全能の御方である。此より他に眞の神がない」と深く感じましたので、一同が聲を揃へて「知事よ、吾等も天主敎信者なる、此聖女と俱に苦痛に遭せよ」と叫びました。知事も之には殆んど困りましたが、直に兵士を集めて、慘酷にも彼等を捕へて皆首を斬りました。ろれで此時六百人餘の男女が、血の洗禮を領けたのであります。而して知事は尙聖女を苦めんと、今度は大きな釜に鉛を鎔かして、其中に聖女を投入れました。然し奇妙にも復少しも体に害を與へませず、却て數人の役人等が其飛沫を浴びて測らぬ死を遂げました。

乃で知事は切齒しながら、遂に聖女の首を斬る事を命じました。聖女は靜に感謝の新禱をさゝげられ、童

貞と致命の兩つの冠を得られました。御年は纔かに十八でした。信者は秘に其死骸を葬りましたが、今日尚其聖き遺物が保存されてあります。千二百七年即ち九百年經つた後、其死体を改めました際、死体からかほり床しき香ひがしたさうです。又彼のエピヲシオ知事は永く終ぬ中に、船で自分の別莊に行かうとしました途中、難船して哀れな最後を遂げました。

皆さんは此聖女の如に、大抵異教人の間に住居して居られますから、時々心易い未信者から、いろ〳〵と情質や親切や、何かの口詫を以て皆さんの靈魂を害し、教を棄てさせやうと爲ますが、さういふ場合には、何卒此聖女の事を想起され、之は惡魔の誘惑であるからとお考へになつて、直樣此聖女の傳達を以て、之に打克つ惠を天主樣にお願ひなさい。

二月十七日「1」

(降生後千五百五十六年生
同　千六百四十八年死)

後光明天皇時代

福者ヨハンナ未亡人(聖母會創立者)

(俊子)靈父樣、昨日承はつたやうに、お父さんやお母さんが信者でなく、毎も反對に教を嫌はれますと、信者になつた小兒に取つては何よりも一番辛く、又教を守る事も六ケ敷やうになりますなあ。

(靈父)無論之は困難いですが、然し例令如何な苦しい境遇に居ましても、いつも天主樣のお勸にさへ從ふて行けば、立派に教を守る事が出來ます。それでは今日斯いふ場合に良き龜鑑となる、福者ヨハンナ未亡人のお話を致しませう。

丁度十六世紀の中頃佛蘭西にカルビンと云ふ異端者がありまして、抵抗教を弘め盛んに公教會の教理を攻擊して、異端の害毒を流布ました。それで不幸にも之が爲に迷はされて、救靈を失ふ者が數多出來ました。

此時代に福者ヨハンナは、佛蘭西の南部にあるボルドー市にお生れになりました。父親は此市の吏員でありまして、教理に通曉い熱心な信者でありました。それ故いつも此異端者等に對して、天主樣の爲に之を防ぎ排斥る事に力を竭し、ヨハンナの兄を天主教の學校に入れて教育を爲せて居られましたが、如何した理由か母親は秘に此カルビンの謬つた說を信じ、抵抗教の方に引寄せられました。それで母親はヨハンナを手許に置き、出來る丈天主教より引離して、自分の信仰して居る異端の方に誘はうと努めて居ましたが、後萬一父親に氣附かれると大變であると思つて、同じ異端者なる伯母の許に預けました。伯母も亦ヨハンナに異端の書物を讀み聞かせ、說教に連れ行き頻に惡い方に誘ひました。

斯いふ境遇に育てられたヨハンナの信仰は如何でしたか。まことに危い事で、丁度重い石を抱へて深淵に臨む如な有樣でした。然しヨハンナは小兒心にも正直に父親に敎へられた祈禱や、其他信者としての義務をして居られましたから、天主樣は慈愛を以て、母や伯母の誘ひの網の中に落ちぬやう、護つて下さつたのであります。又學校に居る兄も屢々會に來て呉れました。其時分には最早兄も、總て天主教に背くやうな謬つた說は、皆よく反駁る事が出來る程、深く教理を研究て居ましたから、ヨハンナは毎時兄の來られるのを待ち焦れ、教の話を聞くのを何よりも樂みにして居られました。それで「何事も聖寵のすゝめに從ふて行くと、眞の信仰を保つ事が出來る」といふ事をよく曉り、又異端者が非常に厚しめて居る聖母マリア樣を特別に崇め敬ひ、尙又聖ヨハネ使徒のお傳達をも熱心に願ふて居られましたから、幸にも墮落の深淵に沈ます、誘惑の網の中にも落ちず、却て天主樣からいろ〳〵の恩寵を受けるやうになられました。

(太郎)然しお母さんに苦痛められたでせう。

(靈父)左樣です、ヨハンナは十二三歲の頃には大人も

及ばぬ位によく教理の事を知るやうになられました。ろれで母親や伯母はヨハンナが自分等の勸に從はず、熱心に公敎を守らうとするので、非常に憎み嫌ふやうになつて、いろ〳〵と責め折檻をするやうになりました。ヨハンナは毎時此苦を耐へ、何卒して母親を眞の敎に歸正らせやうと、朝夕心中に天主樣に其恩寵を祈り、宗敎を除く外は、何事も母親に從ひ、尊敬と謹愼とを以て孝行の道をつくして居られました。然しろれでも益々忌み嫌はれるやうになりましたので、ヨハンナも大ひに嘆き悲んで、只天主樣に依靠つてわづかに慰藉を得て居られました。

斯して苦しき月日を過して居られる中に、早くも十七歳になられまして、多少世間にも出るやうになられました。素より才能も優れ、縹致も美しい方でありましたから、世間に出ても恥しいやうな事はなく、榮耀榮華も望みのまゝに得る事も出來たのですが、ヨハンナは左樣な虛榮の爲に自分の心を亂すやうな事は微塵もなく、唯信仰大切と益々天主樣に近づいて、亡ばうとして居る靈魂を救ふ爲に、才能も生命までも、獻げやうと努めて居られました。或日熱心に祈禱をして居られると「ヨハンナよ、汝は今の熱心な愛を失はぬやう我に仕へよ」との天主樣の御聲が明かに心の中に響きました。が其頃ヨハンナはまだ充分に天主樣の聖意を曉る事が出來なかつたのです。其中に父親はヨハンナを某男爵の熱心な信者と結婚をさせました。然し不幸にも四人の小兒を遺されて、夫に死別れなさつたのです。

（俊子）丁度聖ポーラ（一月廿六日）によく似て居られますなあ。

（雲父）左樣でした。其後もヨハンナ未亡人は、丁度聖ポーラの如に、小兒の敎育と祈禱と善業に力を盡され秘かに人々を助けて陰德を積んで居られました、後此ボルドー市に恐ろしい傳染病が發生しました、が人々は傳染るのを恐れて病者の介抱を怠りましたものですから、漸次に蔓延り日々多數の死人がありました。ろれでヨハンナは此は好き機會であると思ひ、身を全く天主樣に獻げて、親切に病者を看護し、貧しき者には藥を施し、死に臨んで居る者には秘蹟を領けさすやうに努められましたから、娘も亦母親に從ふて甲斐々しく共に傳染病者の爲に力を盡されました。其中に此事が人々に知れ渡つて、ヨハンナは男爵の位高き夫人でありながら、斯る善業を爲られるといふので、其德高き名聲は次第に弘まりました。

其折此市に平素小兒を敎育して居られた德の高い二人の司祭が居られましたが、異端の甚い誘ひの時分でしたから、家族の中に父や母が異端者になると、其子供等は信仰の爲に迷ふて、未來が危うくなるから、何卒して之を救ひ助けたいと、望んで居られました。それで男兒は自分等は引受けて遣るが、娘等の爲には何しても會を設けて之を敎へ導くやうに爲ねばならぬ、が、扨て此大事業に從事するには、是非其德の優れた才能のある婦人が必要である、といろ〳〵此事業の爲に心配せられ、毎々祈禱をして居られました。或日一人の司祭が此事に就て熱心に祈り、後心を籠めて彌撒を行はれました。スルと彌撒中に聖ペトロと聖ヨハネが、聖堂の中に跪いて祈禱をして居られるヨハンナを指しながら御出現になりました。乃で司祭は豫て噂に聞いて德の高い方であるといふ事を知つて居られましたから、之は疑もなく天主樣に選ばれた御方であると信じました。しかしヨハンナは謙遜深き方ですから、之を謝絕られるかと心配しながら、改めてヨハンナに其事情を詳しく打明けました。所がヨハンナは司祭の話を聞いて驚かれたのです。丁度御自分も其以前天主樣から特別のお示を蒙けて居られました。即ち或時祈禱をして居られますと、恐ろしい地獄の門が開いて、其入口で多勢の娘等が救助を願ふて居ますと、傍から聖母のお姿が見にて、其娘等を自分に托せる如に爲されたのです。ろれでヨハンナは司祭の話を聞くと直に、之

は天主様の聖慮であるからと曉り、快く承諾なされました。乃でヨハンナは早速市の司教様に其事を話されますと、司教様は大層其事業を賛成せられ、自ら教皇陛下に許可を願はれました。陛下も亦喜んで此會を祝せられ、眞の信仰と道德を守らせる目的で、童貞の會を設立るのは、此上もない希望である」と早速許可を與へられました。

ろれで此會を聖母に獻げて、聖母會と命名ました。間もなく不熱心であつた若き娘等は、此立派な教育の事業に從ひたい、と大勢集つて來ました。ヨハンナは毎時彼等に向ふて「貴女方が若しも天主様が一人の靈魂を救ふ爲に、如何程御心配を爲されるかと、いふ事をお分りになれば、皆様は己れの才能も生命までも、此立派な事業の爲には、喜び進んで獻げるやうになりませう、何と實に愉快な事ではありませんか……」と、繰返し〳〵慰め勵まして居られました。

斯して後ヨハンナは終に母親と伯母を異端の迷ひより救ひ、上の兄と姉とを夫々片附けて、季の二人の娘の子を此會に入れ、身を修め、德を積んで、長く此聖母會を統治て居られましたが、九十二歳の長き壽を一期として、最と安らかに此世を去られました。後此聖母會は却々隆盛になつて各國に弘まり、數多の學校が建てられました。

（俊子）靈父様、此ヨハンナは少さい時から、教の爲にいろ〳〵の苦みに遭はれましたのは、信仰を強めさす天主様の御攝理であつたのですなあ。

（靈父）全く左様でした、是は天主様がヨハンナに眞の信仰は如何程大切であるかと、其價値を御示になる爲でありました。ろれで後ヨハンナは天主様に選ばれて自分の少さい時と同じく、異端者なる父や母の許に育てられ、危い信仰の途に彷徨ふて居る、多〳〵の娘等を救ける事が出來たのであります。

何卒皆さんは此福者ヨハンナの立派な行爲に倣ふて、いつも眞の信仰を保つて、教會を離れぬ恩惠を願ひ、又迷の路に入り危ない場合に臨んで居る人々を救ふ爲に、祈るやう心願ねばなりませぬ。

二月十七日「2」

（降生後三百四十六年死）
仁德天皇時代

聖女コンスタンシア皇女

（俊子）靈父様、今日私のお母さんの魂名の祝日ですから、何卒コンスタンシア皇女のお話をして下さいませんか。

（靈父）左様ですか、ろれでは其聖女のお話を致しませう。聖アグネス（一月廿一日）のお話をした時に、一寸申上げました通り、此聖女コンスタンシアは、羅馬の名高いコンスタンチノ皇帝の皇女でありました。性質至つて賢明な御方でありましたが、御病氣の爲に、頭から足の先までも腫物だらけで、絶えず苦んで居られました。或時聖女アグネスが御兩親に御出現になつた、と云ふ評判を聞かれて、痛く感じられました。其時分は未信者でありましたが、早速聖女アグネスの御墓に參詣せられ、其墓の前に跪いて、何卒病氣を治して戴くやう、天主様に御傳達を願ひますと、一心に願ふて居られました。

スルと其祈禱の最中、非常に睡氣を催しましたので、トロ〳〵と幻ひうち、聖女アグネスが出現れて、「コンスタンシアよ、汝は眞の神を認めて基督の教訓を信せよ、さすれば病氣は治り、再び其患に艱むことが無くなる……、コンスタンシアよ、今の病氣の痛苦を忘るな、而して主の恩寵を感謝せよ」と仰せられました。

皇女は眼が覺めて、四方を眺められましたが、別に何も變つた事がありませんのに、奇妙にも御自分の病氣は治り、腫物の痕跡までも消ねて、別人の如に美しくなつて居ますから、大ひに驚き、且喜ばれ、早速聖女のお諭に從ひ、良き覺悟を以て洗禮を受けられました。

尙また天主樣に感謝する爲め、人知れず童貞の誓を立てゝ、熟心に仕へて居られました。後アグネス聖女の爲に、立派な聖堂を建立になり、聖女の聖き遺物を納められました。

其時羅馬にガリカノと云ふ勇將が居られました。異教人でしたが、コンスタンシア皇女を後妻に貰はうと、皇帝に願ひ出ました。此ガリカノ大將は皇帝の爲め、國の爲に餘程力をつくされた方でしたから、皇帝も斷り兼ねて、皇女に其事情をお話になりました。スルと賢明な皇女は何か思召がありますか、旦速承知せられ、父君に答へられるには、「丁度現今遠國と戰爭中ですから、唯約束だけにして置いて、大將が芽出度凱旋する迄、結婚を延しませう、而して大將の留守中は二人の娘を宮殿に預り、又私は約束を違へぬ爲に、人質として二人の家臣を大將に連れて行くやうに願ひませう」と意味あり氣な返事をせられました。皇帝は其事由を大將に告げられますと、ガリカノ大將は大ひに喜ばれ、直樣二人を連れて遠征の途に就きました。

(太郎)皇女は如何いふ意味で、其麼事を爲られたのでせうか、私には分りませぬ。

(靈父)コンスタンシア皇女は寔に立派なお考慮を抱かれたのでありますが、後其目的は成就せられました。即ち大將が出發せられると同時に、二人の娘を宮殿に引取つて、信仰に導く爲に非常に力をつくされました。ろれで二人の娘等も皇女の熟心な勸誘と、優れた德行に感化されて、終に信者となりました。又大將に隨て行つた二人の家臣は後に致命せられた程の熟心な信者でありましたから、皇女に言ひ含められた事を能く守つて、唯々大將を改心させんと、朝暮敎の道を說いて居られました。ろれで間も無く皇女の望み通り終に大將をも信者に導く事が出來ました。

後大將は大勝利を得て、羅馬に凱旋しました。ろれで早速皇女と結婚を爲やうと思ふて居る所へ、コンスタンシア皇女は自分の二人の娘を、連れて來て、信者になつた事を告げた上、皇女は早くから童貞の誓を立てゝ居る事、ろれで到底結婚する事が出來ぬから、大將を信者にした上此事をお話爲やう、と深く謀つた事等を詳しく述べられました。此時ガリカノ大將は最早立派な信者となつて居られましたから、皇女の話を聞いて却つて喜ばれ、自分も亦之からの一生を天主樣に獻げませう、といろ〳〵慈善や其他の善德を積んで居られました、が後致命の冠を得られるやうになられました。(六月廿五日)

聖女コンスタンシアは、此世界に於て最も高い位に居られながら、果敢なき榮華を避けられて、斯樣に只天主樣の御氣に召すやうな事ばかりに努めて居られましたから、其報いとして未來に於ても聖女の譽ある御位を得られるやうになられたのであります。

二月十八日「1」

(降生後千八百六十二年死)
孝明天皇時代

福者ヨハネ、ペトロ、ネエル宣教師致命
福者マルチノ、ウ傳道士致命
福者ヨハネ、チエン傳道士致命
福者ヨハネ、チヤング致命
福者ルシア、イ傳道婦致命

(靈父)二月二日にテオフアノ、ベナルド宣教師のお話を致しましたが、此方と全じく昨年福者の位に登られた三十三致命者の中、福者ヨハネ、ペトロ、ネエル宣教師を始め支那人四名の致命せられた、お話を致しませう。

福者ヨハネ、ペトロ、ネエル司祭は、千八百三十二年(七十八年前)に佛蘭西のリヨンといふ市の近くにある村にお生れになりまして、兄妹十人の中三番目の方でありました。父親は堅い信仰を持つて居られる方で

(那支南安)著命致聖三十三しれら國に位の著聞日二月五年二十四治明

母親の里方の先祖は、佛蘭西の大革命の時に、度々危ふい境を侵して、司祭等を隠し救はれたさうですが、此革命の時に司祭等を隠まふた家は、後に天主様に祝せられ恩寵を得た例は、幾許もあります。

ネエル司祭は小學校時代に、却々勉强家でありましたが、記憶の惡い性で毎時沈默を守つて居られました。初聖體の時に司祭になりたいといふ希望が起りましたので、其決心を教會の司祭に打明け、その時から善德を積む傍ら羅甸語の研究を爲されました。

(太郎)靈父様になる爲に是非羅甸語を知らねばならんのですか。

(靈父)然です、是非共學ばねなりませぬ。此羅甸語は初代の教會の時から續いて居る古い言語で、獨り學問の爲に必要なばかりで無く、公教會の通用語となつて居つて、彌撒聖祭は勿論、すべての祭式や秘蹟、祈禱までも皆羅甸語を用ふのであります。それで今日世界各國にある二十萬人餘の司祭達は、如何程遠く國が異つて居りましても、羅甸語によつて、能く通ずる事が出來るのであります。

ネエル司祭は十八才の時神學校に入られましたが、此時から特別に聖母マリアに對して、厚き信心を懷かれ、柔和愛德を守つて居られました。二十三才の時巴里市外國傳道會の神學大學校に入られました。其間度々兄妹等に向つていろ〳〵の良き勸奬をなさつて居られましたが、特に「我儘を制へ己の慾に打克つのは何よりも立派な勝利であるから、何卒毎時此事を心懸けて下さい、さすれば他の困難い事は何事でも容易く成遂げる事が出來ますし」と、己に克つ事を諭して居られました。

二十六歳の時神學大學校を卒業せられ、望みの通り芽出度司祭の位に登られました。間もなく支那に派遣せられる事となりました。それで國を出發せられる時に、御兩親に長い手紙を送つて、「私は人々の靈魂を救ふ爲に宣教師となりまして、今度支那に行く事となり

ました。何卒何事も辛い悲しい事を天主樣のために辛抱して下さい。此世のつらい事はホンの一時で、苦業も大齋も犧牲も直に過ぎ去つて、只永遠の報だけ殘るのであります。天主樣は僅に一言を以てお造りになつた人々の靈魂も、之を救ける爲には多くの苦難を嘗められたのであります。ろれで此一人の靈魂を救ふたならば、天主樣の尊前に於て、此世界にある總ての金銀財寶よりも價値があるのです。然し多くの人々は此事について注意しませぬ、が私は彼等の改心の爲ならば喜んで生命までも天主樣に献げる積であります云々」と慰められました。而して天主樣に向つて「私のやうな愚な弱い者も選ばれて、天主樣の代理者なる司祭の優れた位を授かる事が出來ました。深く感謝致します。何卒此上私が此重い任務を果す事が出來ますやう、偏にお助け下さい」と祈のられ又聖母に對しても「慈愛深き母、聖マリアよ、何卒喜んで私を天主樣に献げました。老年の父を祝し、私の爲に悲んで居る母を慰めて下さい。又何卒常に我等を誰つて、特に危險い場合を救ふて下さい。そして家族一同が此世界に於ても聖母に奉仕へ、復再び天國に於ても御許に來るやうに、致して下さい」と熱心に祈られて後、九月に佛蘭西を出發せられました。

翌年の四月に無事支那の香港に着かれました。それから廣東を經て貴陽府といふ都會に行かれました。此時支那に騷動があつた時でしたから、途中暴漢の爲にいろ〳〵危險な目に遭はれました、が悪なく貴陽の教會に到着ました。乃で早速支那人の服裝をせられ、支那語の研究を爲されました。其時分の支那の騒ぎは大變で、諸所を治めて居る役人等が勝手氣儘の振舞をし、遂に信者を苦め迫害をするやうになりました。ネエル司祭は言語も能く通ずるやうになられましたので、最早安閑として居る場合でないと、布教を始められました。此教會の管轄内には二十ケ所餘の巡回所といふ、受持の説教場もあり、益々迫害が厳しくなつて來ました

たので、マルチノ、ウといふ支那人の傳道士と共に、朝暮熱心に教を弘め、人々の救靈の爲に働いて居られました、が三十歳の春二月、迫害の爲に身を忍ばせて居られた某信者の家で、遂に兵士等の爲に、次の三名の方と共に捕へられました。

福者マルチノ、ウ傳道士

父親は信者で、百姓を業として居られました。お祖父さんも傳道士であつたさうです。二十才の時結婚せられました。妻は未信者でしたから、何かして信者に導かう、といろ〳〵力を盡されましたが、少しも其甲斐がなく、永く經ぬ中に、主人の質撲な生活を厭がつて終に里方へ歸りました。それでマルチノは其後、身を全く天主樣に献げて傳道士となり、晝は臨終に迫つて居る小兒を探し訪ね、夜は洗禮志願者や、未信者に教の話を説き聽かせ、ネエル司祭を輔けて、專ら布教の爲に力を盡して居られました。ろれで他の傳道士等も其熱心に感じ、又柔和親切であつて、堅い信仰をもつて居られるのを賞めて居つたさうです。

或時宿屋に泊まつた事がありました。ろの際いつも肌身に附けて居られた小さい十字架を壁に懸けて、祈禱をして居られました。ところが宿屋の主人が之を見て、此人は天主教の信者であると、驚いて官に知らせました。ろれが爲に僅か一日牢獄に入れられて赦されました、が其際獄卒は牢獄に祭つてあつた偶像を、故と拜ませやうとしましたので、マルチノは笑ひ乍ら、「汝は私を大悪人のやうにでも思つて居るであらうが、此偶像が犯した罪よりも、私の罪の方が餘程輕い。何故なれば私は一日丈牢獄に入られたのであるが、此偶像は是から後も長く牢獄に留め置かれるからである」と云はれた事もあつたさうです。次は

福者ヨハネ、チエン傳道士

で、親は未信者でありました。離れた田舎の人で、此貴陽に來られたのは三十才の時でした。至つて正直な柔和な方で、信者にも交際があつた所から、段々と

教の話を聽かれ、大ひに感じて終に偶像教を棄てゝ洗禮を受けられました。後暫く教會の中に住居して、ネエル司祭の炊事をして居られましたが、間も無く司祭を輔けて布教の爲に力を竭されるやうになられました。今一人は

福者ヨハネ、チヤング

と云ふ方で、大工の業をして居られましたが、又時々小さな商業も營んで居られました。始め十五人の小兒がありましたが、三人を殘して皆死亡なりましたので、チヤングは大ひに嘆き悲み、終に坊主にならうといふ決心をせられました。それで村端に小さな家を建て、釋迦を祭つて共に住居し、潔齋して善行をつとめて居りました。之を見ると正直な人であつて、己の慾に打克つ精神に富んで居つたから、天主樣は特にお選びになり、永く未信者の迷の路に捨置かれず、眞の信仰の恩惠を與へられ、其心を照して下さつたのであります。

或日チヤングは用向があつて市に出ました。スルと某傳道士に逢ひまして、同じく其人から天主教の話を聽いて大に感じました。それで偶像教を棄てゝ、眞の教に歸依する氣が起りました。

(次郎)靈父樣、未信者は皆此チヤングの如に、教を聽くとすぐ信者になれば好いのに……。

(靈父)天主樣は吾々と違ふて、其人の心を御覽になるのでありますから、謙遜で正直な者は早晩眞の信仰の方に導いて下さるのであります。然し全く恩惠を受けても或者は行を慎み掟を守り、聖寵のすゝめに服從ふて行きますが、或者は又之と反對によき決心をしても、行狀が之に伴はず、終に聖寵迄も失ふ樣になるのです。

チヤングは良き決心と共に、直に實行しました。家に歸ると早速祭り飾つてあつた偶像を取外して、皆焚棄てました。それで妻は驚いて之を咎めましたから、チヤングは靜に其事情を話ました、が妻は少しも聞入れず大ひに怒つたのです。それでチヤングは機に觸れ事に當つて、懇にい万〳〵と教理の話を聞かせて居ましたので、妻も亦終に之を信ずるやうになりました。後チヤングは商賣の暇があると、直に偶像を祭つてあつた部屋に入つて、教の書物を熱心に研究し、小供と妻に祈禱や教の話を聽かせて居ました。又外に出ると少し離れて居る町に行つて、毎時説教を聽き一日も早く洗禮を領けたいと望んで居られました。そして友達や親類にも道を説いて共々洗禮を領けるつもりで、熱心に導いて居られました。其中に自分は洗禮志願者の中に加へられましたから、大ひに喜ばれ、人々の嘲弄も怖れず、恥辱も顧みず、益々布教の爲に力を竭し、若し教の方に傾く人があれば、自分は進んで其家の偶像を取片附けて了ふといふ、風に努められた結果、五十人の洗禮志願者を得ました。それで二月の十六日にネエル司祭から洗禮を授かりました、が僅か二日の後致命の榮冠を領けられる樣になられたのであります。

＊　＊　＊　＊　＊

役人等は此四人の方を捕へて戸外に曳出し、鐵鎖を以て杭に繋いで置いて、其家の家財を皆盗み取ました。そして後四人を引つれて裁判所に行きました。其時チヤングの親類や友達が大勢伴いて來て、「迫害が止んだならば復天主樣に奉仕へる事も出來るから、此際唯一言、教を棄てる、と云ふて下さい」と、右左から切に教を棄てさせやうと努めました。然しチヤングは、「靈父樣が致命になる、それで私も天主樣の爲に喜んで生命を棄てます」と言葉短かに其勸誘を退けられました。友人等は復チヤングは數ケ月前に生れた女兒を、非常に可愛がつて居つた事を能く知つて、親子の愛情を以て之を引止めやうと、わざと「あゝ可哀さうに、汝の末の女兒が孤兒になる」と嘆息しましたが、チヤングは「たゞ何事も天主樣の聖慮にお托せする」といつて、其儘口を緘みました。

やがて四人は裁判官の前に引出されました。役人は先づネエル司祭に對して、いろ〳〵責め訊ねた上、例

の通り教を棄てる事を命じました、が無論ろの堅き信仰を動かす事が出來ませぬ。ろれで今度は他の三名に向つて、「さらば汝等は早く公教を棄てよ」と命じました、が皆仝じく「決して信仰を變ぬ」と答へましたので、裁判官も詮術なく、遂に死刑に處すと言渡しました。

乃で四人の方は復々後ろ手に縛られ、死刑の執行場指して連れ行かれました。其時またもチャングの親類縁者が跟いて來て、或は怒り、或は泣き、さま〳〵の手段をして、教を棄てさせやうとしました。乃でチャングは、設令此上どんなに脅され勸められましても、私等は最早充分覺悟をして居ますから、決して殺される事を怖れませぬ、何卒再び無益の勸誘を致さないやうして下さい」と謝りました。スルとネエル司祭は之を聞かれて、「チャング氏よ、何卒最後まで私に倣ふて下さい。今暫くせば必ず私と倶に天國の嚴樂を享けられますから」と勵まされました。其時チャングは謙遜して、「靈父樣、何卒私のためにお祈下さい。私は罪の多い者ですが、致命によつてお赦を蒙る事が出來ませうか。今は唯萬事を天主樣の聖慮にまかせます」と應へられました。それで一同が祈りつゝ歩まれました。沿道の人々は今死に行く人の、此健氣な態度を見て、皆痛く感動しました。

途中或橋の畔で、ルシアと云ふ傳道婦が、仝じく迫害の爲に捕はれて來るのに出會ひました。が一言も交す事が出來ず、其まゝ行過ひました。やがて執行場に着きますと、日が暮れましたので、役人等は直に準備に取かゝりました。

此時は殊に寒い夜で、今迄冴わたつて居つた蒼空も、次第に黑雲に蔽はれて、一寸先も見ぬ眞の闇となりました。ろれで大きな篝火をところ〴〵に焚いて、四人を縛のまゝ蓆の上に座らせました。惡魔の叫かと思はれるやうな夜嵐が、一しきり吹き去つた後は、天地萬籟寂として少の聲もなく、其中に司祭を始め三人の勇士は、今一歩で天國に昇る幸榮を得られると、心窃かに歡んで居られますから、篝火に照された顔容は、何れも崇高く神々しく、見る人はおのづと敬虔の念が起るやうでした。やがて惡魔の奴隷となつた役人の一人は、刀を執つて起上り、ネール司祭が跪いて祈つて居られる後に廻つて、ヤッと云ふ間に首を刎ねました。そして續いてウとチェンの首を斬りました。ろれで血は迸つて四邊を染め、腥き夜風は身に泌んで物凄く、人々は皆怖氣がして歸り去らうとしましたが、今一人殘つて居るチャングも、此場合には必ず教を棄てるであらうと思つて、「汝は同じ市の者であるから、どうも殺すに忍びぬ。唯一言教を棄てると云ふて呉れ。さすれば土地も家屋も與へて望の通りにして遣るから」と、皆口々に勸めました。然しチャングは、「私はたゞ其の天主樣が約束せられた永遠の幸福ばかりを望んで居ますから、此世の物は少しも要ませぬ」と應へられましたので遂に三名の後を追ふて仝じく致命の冠を得られました。

（俊子）傳道婦は如何なりましたのですか。

（靈父）ルシア、イといふ傳道婦は此翌日致命せられたのですが、四人の方と仝じ時に捕はれましたのですから、今から其お話を致しませう。

福者ルシア、イ傳道婦

父親は早く死なられまして、兄のポーロ、イといふ方が、萬事の世話をして居られました。皆信者でしたから、ルシアは生れると直に洗禮を領けられ、兄妹四人の中で一番末の方でしたから、皆から可愛がられて居られました。十五歳の時に兄が結婚を爲せやうとせられましたが、ルシアが童貞の誓を立てゝ居る事を知つたから、其儘に中止ました。ルシアは其頃からいつも言葉を慎んで、新禱や教理の研究を爲られ、又毎朝早く起きて永き默想をせられて、家人を起して共に朝の祈をして夜は遲くまで起きて手仕事をするなど、信者の爲に良き手本となるやうな習慣を作つて居られま

した。

二十歳の頃には教理によほど通曉くなりましたので、傳道婦となつて婦人に教を傳へる事となりました。幸ひ兄のポーロは醫者で、財産がありましたから、其支給を受け、尚僅少な手仕事をして生活の途を補ひ、全く無給で、熱心に布教の爲に働いて居られました。又琺瑯の聖女ルシア童貞（十二月十三日）が若い身を以て、教の爲に身命を献げられたのを深く感じて、自分も亦秘に致命の特恩を祈つて居られました。重い病氣に罹つたとき「天主樣よ、何卒此病氣のために死なぬやうにして下さい。私は罪深き者ゆゑ、償の爲に致命に遭ふ特恩を與へて下さい」と祈られた位でありました。又此方は平素謙遜で謹慎ぶかく、至つて質素な服裝をせられ、世間的の事に意を傾けず、あまり他人の事故に關係せず、うして常に聖躰を拜領し、涙を流して十字架の道行を勤めて居られました。

ルシアは斯してネエル司祭の許で、熱心に教の爲に力を盡して居られました、が後遂に司祭達と仝じく捕縛られました。乃で役人はルシアに向つて、「教を棄てゝ、結婚せよ」と嚴しく命じました。然しルシアは、「今日まで身体も精神も、天主樣に献げた私が、今になつて教を棄て誓を破る事が出來ませう？」と答へられましたので、役人は尚も種々責め賺して、教を棄てさせやうとしましたが、「此上は如何樣にも御勝手にして下さい」と頑として少しも肯んぜぬ。「うれでは明朝までよく思案して、考直せ」と役人は其夜某婦人に預けて、變心させやうとしました、がルシアは私等天主教信者は、其麽に心の變り易い者ではありませぬ。私等は死ぬまで信仰を保つのであります」と云ふて、終夜致命の苦痛に酬へる力を祈つて居られました。

翌朝早く友人が見舞に來まして、いろ〳〵と話の末其友人が、「迫害者はいろ〳〵私と母と妹とを捕へて、池の中に投入る積りにして居るさうです」といひました。ルシアは「萬一池の中に入れられ、樣の々痛苦に遭はせられても、天國に行く近道であると思ふて、少しも怖れず、祈をして天主樣に依賴りなさい」と強め勵まして後、兄に遺物として自分の祈禱書と念珠を托し、尚ほ「私は望んで居つた致命の特恩を得る事となりました。天主樣は必ず私の犧牲を憐んで受取つて下さるでせう。天國に於て家族の爲にお祈禱を致します」といふ言傳をせられました。十時頃に役人が呼出に來たので、ルシアは心の中に「あゝ私は少さい時から致命の特恩を願ふて居つたが、遂に私の願を聽容れて下さつた、昨日司祭さまが致命せられたから、私もついて行かねばならぬ」と感謝しつゝ、役人の前に出られました。役人は「昨夜はよく考へたか、如何いふ決心になつたか、定めし教を棄てるであらうな」と、さも呑込んで居るやうな調子で訊ねましたから、ルシアは言葉正しく、「否ね、私は教を棄てる事が出來ませぬ。今一歩で天主樣の尊前に出られるのに、何して後戻をする事が出來ませうか」といひ畢らぬ中、知事は「昨日司祭等が殺されたのを知つて居るか、汝も命令に從はぬと殺すぞ」、「何卒殺して下さい。私は司祭と仝じ最後を遂げる事を望んで居ります」と憚からず應へられましたので、直に執行場に連れ行かれました。而して非道の劔をうけられましたが、最初は誤つて腮を斬落され、三度目に漸く首を落され、其潔く勇ましい靈魂を天主樣の御手に御返になりました。

最早ネエル司祭等の首級が曝露されてありましたから、此ルシアの首級も仝じ所に曝露されました。信者は夜の間に此血塗の五つの首を、窃に取つて司教樣の許に持行きました。其時には何れも生きて居られるやうな容貌であつたさうです。今日其遺物は皆大切に保存されてあります。

ルシアの兄は妹の被つて居られた覆布をも遺物として保存して居られました。或時我子の嫁が重い病氣に罹つて、いろ〳〵と療養に力を盡しましたが、二週間程少しも眠りませず、漸々弱つて、もう迚も助かる見

込がないと覺悟しました。其際兄は不圖想出して、ルシアの遺物の覆布を取出し、病人の頭に被せて、「是は伯母さんの覆布であるから、之を被つて主禱文と天使祝祠を五回づゝ唱へて、伯母さんの傳達を願ひなさい」と申しましたゝれで祈が終んで覆布を除りました。スルと病人は直に眠り始めましたが、二時間ばかり經つと、病人は眼を開け頭を擡げて、不思議さうに四邊を眺めますので、母親は隣の室から來て、「何を探して居るのか」と問ねますと、「今私の側で誰か大きな聲で祈禱をする者があります。それで誰かと思つて見廻しましたが、別に誰も居られませぬ」と奇妙さうに答へつゝ、復も眠に就きましたが、二度も全じやうな事をしました。三度目に復枕許で、大きな聲がして、「吾等を悪より救ひ給へ」といふ主禱文の終の句が聞へた時、眼が醒めました。ろしてそれと全時に、臭い血を吐きましたが、其後すぐに起きて食事をして二三日經たぬ中に全快しました。それで皆ルシアの傳達によつて奇妙にも全快したといふ事を疑ふ者は一人もありませんでした。

(後子)靈父様、此四人の方々は皆平素靈父様の仰をよく聽き、傳道の爲に熱心に動かれましたから、致命の特恩を得られたのでせう。

(靈父)全く然でした。彼等は皆此世で教の爲に、司祭と共に酷く苦められましたが、今天國に於て愉快に樂んで居られます。其歡喜は果して如何程でせう?。

聖シメオン司教致命

垂仁天皇時代

(靈父)使徒等の時代が終る時に、只一人生殘つて居られた。聖シメオン司教のお話を致しませう。此方は聖主基督を眼前に見られた人の中で、一番終に死なられた聖人であります。

(太郎)スルと、二月二日に承つた聖シメオンとは、異うのですなあ。

(靈父)全く同名異人です。此聖シメオンは聖主基督と親族の關係がある方で、此一族は皆立派に天主様に選ばれました。即ち父親はアルフェオといふて聖ヨゼフの弟御でありました。母親はマリアといふ名で、カルワリヨ山で十字架の下に、聖母と共に居られた方であります。ろしてヤコボ、タデオ、シメオン、ヨゼフと四人兄弟がありました。兄のヤコボとタデオは全じく使徒に選ばれ、弟御のヨゼフはニコデモと共に聖主の御死骸を葬られた方であります。

此聖シメオンは降生前九年にお生れになりました。父親や兄弟等と共に早くから、聖主に從ふて聖き道を學んで居られました。ゝれで聖主の十字架上の御死去や、御復活御昇天までも、皆親しく眼前で拜されました。また聖靈降臨の日、聖母マリア使徒等と共にエルザレムに居られまして、聖靈の賚を領けられました。後使徒聖ヤコボがエルザレムの最初の司教となられて、熱心に道を說いて、多くの人々を感化して居られましたので、聖シメオンもエルザレムに住居して兄の事業を輔けて、布教に努めて居られました。降生後六十二年に兄の使徒聖ヤコボ(五月一日)が九十六歳で致命昇天せられました。其時聖シメオンは猶太人の殘酷な事を嚴しく責められたのであります。其年大勢の信徒は皆一致して聖人を聖ヤコボの後繼に推して、司教と戴きました。時に七十一歳でありました。

時にエルザレムは羅馬の屬國になつて居ましたが、

降生後六十六年に土人が羅馬に反いて獨立を企圖ました。ろれで羅馬は大軍を起して攻めて來ました。是より前聖人は、「聖主が豫言せられたエルザレムの滅亡が近づいたから、汝等は早く此地を避けよ」といふ天主樣の默示を蒙けられましたので、信者等と共に都を出發ち、ヨルダン河の近くにある小さな町に難を避けられました。

（太郎）靈父樣、エルザレムの滅亡は如何な風でしたか、一寸話して下さいませんか。

（靈父）ろれでは概略お話しませう。

此猶太國の都なるエルザレムは、聖主御受難の地で、早かれ遲かれ必ず罰を招くのでありました。ろして聖主が御死去になる以前、橄欖山に登られて都を顧み、

聖シメオン司教猶太人の殘酷を責め給ふ

「呼嗚此市はやがて敵の爲に攻め滅ぼされて、人々は皆殺にされ、聖殿は礎も殘らぬやうになる」と豫言せられました、が果して其通りユデヤ人が反旗を飜しましたから、羅馬の大兵が攻めて來て、市を取圍みました、そして食物や飲水の路を絶ちましたから、市中百二十萬の人民は飲食する事も出來ぬやうになりましたので、人々互に相爭ひ、果は小供を殺して其血を啜り其肉を喰ふやうになりました。其中に又惡疫が發生り、及に倒れる者、病に伏す者が數十萬にも及びましたが、數月の後終に羅馬兵が城を破つて亂入り、男女老幼を問はず、之を皆殺に爲ましたので、血は河のやうに流れ、屍は山のやうに積まれ、其上火燼に罹つて一軒の家も殘らぬやうになりました。ろして生殘つた十萬の人民も、皆奴隷として、外國に賣られました。

往古の名高い都エルザレムが、斯樣な哀れな末路になりましたのは全く天主樣が其全能を以て、聖子基督を殺した猶太人の罪を罰せられたのであります。

却說聖主の豫言の如く、エルザレムの都が滅亡された後、羅馬の兵隊が國に還りましたので、其間遁れて居られた彼の聖シメオン司教は、再び信者等と共に此敗殘たる舊都に歸り、家を建て地を耕されましたので、永く經ぬ中に人々は諸方から集つて來ました。ろれで復布教に努められましたから、新らしい信者が次第に殖ねて來ました。後皇帝トラジャンの爲に、度々殘酷な迫害に遭はされましたが、聖人は其都度特別のお攝理によつて、難を遁れて居られました。

聖人は齡を重ねられて百十八歳の時に、遂に迫害の爲に捕へられて、羅馬に護送られ、總督の爲にいろ〳〵と責め苦められました。然し聖人は「天主樣ばかり此天地の大王であつて、又聖子基督は我等の爲にお生れになり、また我等の爲に御死去になつたのです、ろれ故私は如何しても之に背反く事が出來ませぬ」と答へられました。乃で總督は、容易に教を棄てさせる事が出來ぬと思ふて、強く鞭ちました、が聖人は僅に骨と皮ばかりに痩せ衰へ、云ふに言はれぬ程の、甚い苦痛を感ぜられましたが、よく辛抱して居られましたから、總督も見物人も皆其勇氣と信仰とに感じ、心ひそかに尊敬しました。これは天主樣が幼き小兒にも與へられた如に、此老聖人にも全じく苦みを耐へ忍ぶ恩寵をお與へになりましたのです。ろれで翌日聖主の如く、遂に十字架の上に釘つけられて、致命の特恩を蒙けられました。時に降生後百九年でありました。

二月十八日「3」（同　降生後七百十年生　八百十四年死）

嵯峨天皇時代

聖アンジベルト修院長

（靈父）佛蘭西の有名なシャルマン大皇帝の侍從に、アンジベルトといふ方が居られました。特に德行厚く、學識の深いお方でありましたから、皇帝に大層寵愛せられて居られました。

（太郎）シャルマン皇帝は信者であつたのですか。

（靈父）左樣です、此シャルマン皇帝は、熱心な信者でありまして、公敎を弘める爲に大ひに力を致された皇帝であります。降生後七百六十八年に卽位せられました、が當時は未だ佛蘭西は野蠻時代であつて、敎育も普遍らず、學校の設備も完全でありませんでした。乃で皇帝は特別に學藝技術の進步發達を奬め勵まし、又修院や宮殿を修め、就中人民に天主樣の敎を識らせ、眞の道に導かうと力を注がれました。

また皇帝は毎に、「人々の智識は天主樣の賚であるから、倍々硏いて大切に使用ねばならぬ」と仰せられて、宮殿の內に學校を設けられて、先づ貴族の子弟等を敎育せられ、又「怠惰は大ひなる罪惡の源である」と仰せられて、皇女を始め貴族の婦人等に、宮殿內で編物とか、裁縫とか、織物とかの手藝を習得されました。

うして侍從のアンジベルトに、雙方の監督を爲せて御自身も時々、敎授の模樣や、生徒の勉强の有樣等を實地に御覽になつて居られました。（此學校は現今の巴里市大學校の起原であります。）

うてでアンジベルト聖人は、其博き學識と、良き模範とを以て、懇篤に訓へ導いて居られました、が間も無く皇女は其德行の優れた方であるといふ事を、深く感じて聖人と結婚を爲ませうと、父の皇帝に願はれました。皇帝も亦平素聖人の素行に感心して居られましたから、下臣であるにも關らず、直に結婚の事を御聽許になり、聖人に數多の土地をお與へになつて、諸侯の中に加へられました。

後聖人は屈らず重い病氣に罹つて、今日か明日かといふ程になられました。それで其際一生涯の事に就て、深く糺明を爲されました、が別に大罪を以て聖旨に反いた、といふ事がありませんでした。然し又取立てゝ天主樣の聖前に、之といふ程の功績を樹てた事もない、といふ事を曉られましたから、大ひに嘆かれて、「天主樣よ、何卒私に今數年の生命を與へて下さい、さすれば私は其間に今までよりは、一層熱心に、主の爲に力を盡しますから」と一心に祈られました。スルと奇妙にも病氣が漸次快くなりました。全快と全時に一つの災難が此佛蘭西に起つて來ました。卽ちダヌワ人が侵入てつ來たのです。

（太郎）聖エドワールド王（一月五日）の時に英國を攻めた人々ですか。

（靈父）左樣です、丁度あの時から三百年程以前の事です。此時ダヌワ人は既に佛蘭西の北部に襲ひ來て町々を取圍み、又別に船でセーヌ河を溯り、諸所を侵略しつゝ、次第に巴里市に攻め入らうとして居る時でしたから、巴里市の人民は驚き怖れて甚く騷ぎました。乃で皇帝は之を防ぎ滅ぼさうと、直にアンジベルトを軍隊の長として、多くの兵士を遣はされました。聖人は忠義な兵士の力を藉ると共に、また天主樣の御助力を繫けやうと、數人の士官を伴れて、近邊の某修院に參詣せられました。此院には聖リキエの御墓があり、まして、ろの御傳達によつて種々の奇蹟が行はれたので名高い修院となりました。それでアンジベルト聖人も其院に行かれて、長く跪き「何卒勝利を得させて下さい」と熱心に祈られて後、戰場に向はれました。

然して聖人は軍隊を指揮して、屢々ダヌワ人と戰はれましたが、其度毎に奇功を奏して提利を得られ、最後の大戰爭の時には奇妙にも急に暴風が起り、敵が降つた爲に、敵は大混雜大狼狽して、終に武器を棄て船に乘つて、遠く逃げて了ひました。

聖人は芽出度巴里市に凱旋せられましたが、其立派

な提利も皆天主様の御庇護であると、直様前の修院に行き、厚く感謝せられました。其時聖人は「此世界の國王に奉仕て後は、此修院に入つて天主様の爲に、一身を献げねばならぬ」と云ふ事を心の中に痛く感じられましたから、家に歸られて夫人に其事を打明けられました。スルと夫人も亦其折女の修院に入りたいといふ希望を持つて居られましたから、ともく皇帝に謁見て、此から後は世俗を離れて專ら天主様の爲に力を盡したい、と病氣の時からの話をせられて、其聽許を願はれました。素より皇帝も信仰の厚い方で、豫て修院め行者等の祈禱は國家の爲にも餘程功驗があるといふ事を御存知でしたから、今此聖人は假令修院に入つても、軍隊の長であつた時よりも、一層國家の爲に力を竭すであらう、と思召され、二人の芳志をお賞めになつて、快よく承知せられました。

乃で聖アンジベルトは修院に入つて、普通の修道者となられました、而して粗末な食物を取られ、荒き床板の上に寢て、祈禱と苦行を以て身を修められました。後修院長が死なられましたので、其後繼に選ばれました。又皇帝は特に此修院に天主堂を建立になりましたので、聖人は他の修道者や、御自分が教育して居られる小兒等と倶に、晝も夜も聖歌を唱へて、天主様を讃美して居られました。

(俊子)聖人は矢張修道院に居られても、小兒の教育をして居られましたのですか。

(靈父)然です、聖人は修院に入られまして後、特に皇帝の依囑によつて、此國の重なる人々の小兒の教育をして居られました。つまり前に申しました通り皇帝は、教育といふ事に付て、却々熟心な方で、位の高い低いに關らず、信仰と勉強に努める小兒を愛せられ、「汝等は家柄とか財産とかに由つて、懶惰に流れるならば、一の恩典も與へぬ」と、常に懶惰る小兒を誡めて居られた位でありました。又聖人は時々皇帝の命に依つて、羅馬の教皇陛下の許に使節として往來せられました。

アンジベルト聖人は斯して、天主様に奉仕ると共に、續いて皇帝にも忠義を竭して居られましたが、七十四歳の御時、多くの人々に惜まれつゝ、最と安らかに此世を去られました。またシャルマン大皇帝も此二十二日前に崩御せられたのであります。

(太郎)靈父様、私は此お話をなされてから、誰かを誡めるお考へがあるといふ事を知つて居ります。

(靈父)「誰を誡めるのでせうか」……と笑を含まれて問はれると。

(太郎)次郎さんをでせう、平常怠惰て居りますから。

(靈父)左様でした。然しあなたも時々良き小兒でありさへすれば、學問なぞは無くとも好いとか勉强せんでも好い」とか云ふて居られますが、全く違ひであつたといふ事が、お分りになりましたでせう。無論人の道うを全ふして行くは、何しても眞の信仰が無ければなりませんが、然し決して學問は無用である等といふやなことは言へないのです。即ち天主様の御氣に召さうと思へば、此の皇帝の仰せられた通り、何してもよく學問を勉强して、天主様から與へられた智慧をば、幼ない時からよく研いて、何時か之を自分の務の爲に善く用ふるやうに爲ねばなりませぬ。又怠惰程おろろしく惡い實を結ぶものはありませぬから、之もよく氣を注けて學問でも職業でも何でも、蔭日向なく精出して働き、此怠惰の心が起らないやうに防がねばなりませぬ。ろれでは今から此聖人の御傳達を以て、怠惰の心を去り、學問もよく勉强する恩寵をお願ひなさい。

二月十八日「4」

（降生後千二百三十七年生
同　千三百十年死）

後二條天皇時代

聖女クリスチアナ、オリンガ召使

（靈父）今からお話しますのは、聖女クリスチアナ、オリンガと云ふ方の事で、此方は輙もすれば人々から輕蔑せられる、下女の卑い身分でしたが、後に聖女として人々から仰がれるやうになられ、又世に在る間も基督教信者の良き摸範であるとまで尊敬せられて、クリスチアナ（基督教女）と命名られた御方であります。

（次郎）スルと私方のマツのやうに下女であつたのですか。

（靈父）左樣です。

（俊子）私方のマツなんかは、毎時教の話を聽かせて遣りますと、「私等の如な下婢風情の者は、もう天主樣から見離されて居るのですから」と、時々吃く事があるのですが、矢張聖人に成られるのですなあ。

（靈父）左樣ですとも、下女に限らず、已を得ず賤い務をする人々の中には其樣に、他の者よりも天主樣に愛せられぬ、と思ふて居る方が澤山あるのです。而して又多くの人々は、婢僕の身分であるからとか、また貧しい生活をして居るから、天主樣に事へ難いと云ふて居ります。然し此は孰らも大變な謬見で、却て其反對であります。總て富める者よりも貧しき者、高き位の人よりも低き位の人、使ふ人よりも使はれる人の方が、却て救靈を得易いのであります。富裕の人は流行に隨た立派な衣服を着て、多くの人々を從へて朝に夕に、御馳走を爲たり、遊樂に耽つたりする事は造作もない事ですが、僕婢は如何でせうか、迚も斯いふ贅澤は、眞似も出來ぬ計でなく、何時も木綿の荒い衣服を着、粗末な物を食べて、僅少な報酬で朝から晩まで働かねばならぬのでありませう。今此富める人と、僕婢とが此虛しき世を去つて共に天主樣の尊前に出た時には如何でせうか。必ず其報いは永遠に反對の結果になるでありませう。シテ見ると僕婢の方は却て、誘惑も少なく善德も積み易いのですから、決して御攝理を吃き、失望する樣な事をせず、毎時主人や長上の人を天主樣の代理者と心得て、何事も從順を守り、苦しき事も耐へるならば、ソレが自然に功績を樹てる事になり、立派に救靈を得られるのであります。

（俊子）あゝ左樣ですなあ、今日家に歸つて、此お話をして遣りませう。

（靈父）聖女オリンガは伊太利國のフロレンスといふ市の附近で御生れになりました。親御はいとも貧しい方でありましたから、聖女は早くから人々に雇はれて、牛や羊の番を爲て居られましたが、幼ない時から深く天主樣を愛し敬ひ、絶えず天主樣の事ばかりを想ふて、心の中に非常の愉快を感じ、多くの慰藉を受けて居られました。されていつも靜な所で唯一人、羊などの番をしながら、丁度天使の如に清く樂しく、天主樣と物語でもするやうに、燃ゆるばかりの愛を献げて、日を送つて居られました。

また至つて淸淨潔白を尊ばれ、萬一少でも不潔な言葉を聞くと、すぐに不愉快な心地がせられるので、市に行かねばならぬ時には、いつも眼を地に向けて、心を汚し亂すやうなものを、見ぬやうに努めて居られました。又顏容も麗はしき御方でありましたが、普通の娘等の如に、いつも身を飾り、顏を粧ふなどの事を爲られず、反つてわざと見苦しくなるやうに努めて居られました。

（俊子）靈父樣、然しますと身を飾つたり、白粉等を塗けたりする事は惡いのですか。

（靈父）皆さんはたゞ身分相應に質素な服裝をし、顏なども天主樣から與へられた通り、自然に任すやうに爲られるのは、一番良き爲方であります。殊に婦人の方は、人々に美しく見せるやうに、故に身を飾る習慣がありますが、場合によつては其が爲に他人に邪惡の心を起させると罪惡ともなり、自分も亦罪を犯す便とも

なりますから、信者は此點につき大ひに慎み、注意をせねばなりませぬ。人々に賞められる爲に身を飾るよりも、德を積み心を飾つて、天主樣の聖慮に適ふやうに努めなさい。さすれば其美しき心が自然に、顏にまでも現はれるやうになります。

聖女オリンガは、潔白を保つ決心をして居られましたから、誘を防ぎまた人々を惑はさぬやうにせられたのであります、が尙其上言葉も行爲をも慎んで居られましたから、假令墮落した者でも、聖女に會ふと、何となく崇高い感にうたれて、眞面目の心が起り、ひいて敬の念が起るやうになりました。

聖女は早くから親御にお別れになりましたので、兄等の世話になつて居られました。其中に妙齡になりたれば、兄等は何家かへ嫁入をさせやうと、いろ〳〵に勸めましたが、素より聖女は肉身の慾を避けて、身を天主樣に獻げませうといふ決心でありましたから、結婚を御斷になりました。然し兄等は聖女の決心を知りながら、尙もいろ〳〵に誘ひ、强て結婚を爲せやうと痛く責め苦めますので、聖女は此上は假令何地に倒れ死を爲やうとも、之を避けやうと逃る決心をして天主樣に祈つて、窃に家を出られました。而して何地と目的もなく、長く歩き廻られましたが、日の暮れる頃に途を迷ふて、唯有る大きな牧場の中に入つて、詮術なく其場に一夜を明かされました。

ほの〴〵と明けゆく蒼空は、次第に彩られ、やがて太陽の光がてか〳〵と、廣い〳〵牧場を照しました。見るところの邊一面に、美しい草花が咲きみだれて、床しい香が滿て居ります。ろれで住ひべき家もなく、誰たよる人もない哀れな聖女も、此淸く麗はしい花園のやうな牧場の中で、何事も忘れて暫し恍惚として、少も世の塵も交へぬ此朝景色を眺めつゝ、「あゝ美しい花！芳しい香！私の靈魂もこんなに美しく芳き香がするやうに爲たい」と獨語して、天主樣の事、樂園の事などを、夫からろれへと默想して、時の經つのも知りませぬでした。スルと何處からともなく一頭の大きな兎がすぐ前面を通り過ぎましたので、不圖自分は途に迷ふて居るといふ事を想出し、急ぎ起上つて知らず識らず、其兎の跡を追ふて歩まれましたが、やがて本道に出て、其町に着く事が出來まして、此町の或德行のすぐれた人の家に、拳公をするやうになりました、が月給を貰はず、只粗末な食事と、粗末な衣服と、而して自由に天主樣に事へる許可を願ふて、主家の爲に骨打を惜まず、よく立働き、尙ほ秘に食事を制へて、種々の苦行をして居られました。又聖女は貧しき家に育てられましたので、不幸にも讀む事も書く事も出來ませぬでした、が聖靈の賞によつて、其心が照されて居られましたから、時々宗敎上の困難しい問題に就て、何か問ねる時にも、優た學者も及ばぬやうな確答をなさる事がありました。ろれで主人を始め町の人々も、互に聖女の立派な行狀に感じ、大なる感化を受けました。

其中に惡魔は、聖女が人々を善に導かうとするのを妬んで、之を誘惑ふために、度々傲慢の心を起させやうとしました、が聖女は直樣其誘を曉つて、聖ミカエルの傳達を願ひ、之に打克つやうに努められましたので、毎時奇妙な力を以て其誘に克つて居られました。ろれで聖女はお禮の爲に、聖ミカエルの聖堂に詣り度と望みましたが、此聖堂は大分離れて居るので、數人の友達と共に出發せられました、が途中ある寂しい所で、惡漢等に出會ひ、道を迷はされて、侮辱を受けやうとしましたから、聖女は其場に平伏して、熱心に聖ミカエルの傳達を願ふと奇妙にも聖ミカエルが御出現になり、今迄亂暴して居つた惡漢等も、大ひに驚き怖れ這々の体で逃去りました。ろれで一同は危ふき所を免かれましたので、大ひに喜んで聖堂に參詣し、厚く感謝いたしました、が之から後聖女の德の優れた噂さが一層弘まりまして、人々から尊敬を受けるやうになられました。謙遜深き聖女は萬一、之が爲に傲慢の心が起ると大變であると思ふて、之を避けやうと其旨を

主人に願ひ、暇を貰ふて、羅馬に赴かれました。が羅馬に往かれて後も亦、某信仰厚き寡婦に雇はれる事になりました。此主人は富裕な人でありましたから、聖女の古い衣服を脱せて、替に立派な着物を與へられました、が聖女は數日の後、女乞食の哀れな姿を見て、其新しい衣物を施されました。

(次郎)其麼ことをして叱られませぬでしたか。

(靈父)否ね、主人の寡婦は最早聖女の德の優れて居る事を知つて、非常に愛して居りましたから、叱らなかつた許でなく、其美しい心を見て益々感心し、下婢でありながら親しい朋友の如に優遇すやうになりました。

聖女は或日聖堂の中で祈禱をして居られますと、「故郷に歸つて童貞會を設立よ」、といふ天主樣の特別の默示を蒙けられました。ろれで主人の寡婦に其事を打明けて許可を得、其事業に取懸られました。然し種々樣々の難義苦勞を嘗められました、が何事でも立派な事業程、其始に當つて多くの障碍があります。其を耐へますと、早晩天主樣の恩寵を蒙るやうになると思されて、凡ての艱みも苦みも、よく耐へ忍ばれましたので、遂に立派な修道院を設立る事が出來ました。

間もなく其院に、心も体も全く献げて、熱心に天主樣に事へやうと望んで、多數の娘達が集つて來ました。ろこで聖女は修道長の椅子を他人に讓つて、一番卑賤い職務をしながら、御自分の昔を偲び、特別に貧しさ人々に同情を寄せ、之を憫んで居られました。或饑饉の時にも施與の爲にとて、修院の畑に悉皆野菜を作らせました。ろれで土地の人々も亦、皆聖女のすぐれた德行と、慈善の深い事に感じて、其修院の人々が必要な物を持つて行つて居りました。

後聖女は奇蹟を行ひ、預言をする特恩を傾け、多くの人々を救ふて居られました、が御年七十歳の時中風症に罹られ、三年の間右の半身が不隨となりました。然し日頃聖躰の中に在ます耶蘇基督を特に愛敬して居られましたから、病中も毎日聖躰を拜領する爲に、他人の肩に縋つて聖堂に詣つて居られましたが、御死去の以前に急に顏容は光りかゞやき、丁度長く母親に別れて居つた幼兒が、再び其母親に會ふた時のやうに、限りなき歡樂の色を呈し間もなく永き眠に就かれました。

平素聖人の如に敬ひ慕ふて居つた多くの人々は、間斷なく其遺骸を敬ひに來ますので、十日餘も葬る事が出來ませぬでした。後聖女の御傳達によつて、種々の奇蹟が現れた。又二百年餘り經つて、即ち千五百十四年に其御墓を開けましたが、美しい御体は少しも腐敗せず其まゝでありました。つまり此は天主樣が聖女のすぐれた、清き德行を嘉納して下さつた證でありませう。

此聖女は、貧しく卑しい職務をせられましたが、いつも心を潔白にして、吾々に他人の婢僕たる境遇に居つても天主樣の御恩寵を蒙けるといふ、良き手本を示されたのでありますから、何卒皆樣も此聖女の御取次を以て、天主樣に奉仕ると同時に、又他人にも仕へて、よく職務を竭す事が出來ますやう、天主樣に祈なさい。

二月十八日「5」

(降生後千七百四十八年生　同千八百二十年死)

光格天皇時代

聖フランシスコ、レジス、クレト宣教師致命

(靈父)今一つ十年前に福者の位に登されました、フランシスコ、レジス、クレトと云ふ宣教師が、今より八十年前に、支那で致命せられた御話を致しませう。

此クレト司祭は佛蘭西のお方で、兄妹十五人の中第十番目の方でした。叔父の中には司祭となられた方もありました。又一人の兄は修道者となられ、一人の姉は修道女となられました。クレト司祭はお生れになつた翌日洗禮を受けられました。小學校を卒業後、司祭となる目的で、聖ピンセンシオ、ア、ポーロ(四月十九日)が設立になつた、ヲザリスト會の神學校に入り二十五歳の時に卒業なされました。性質至つて聰明、學問も才能も共に優れて居られましたから、一時神學校の教授となられました。三十五歳の時父親に死なれ

後母親にもお別になりました。四十三歳の時急に布教の爲に、支那に派遣せられる事になりまして、六ケ月の後支那の澳門に着かれ、やがてキャンシーといふ所の教會に赴かれました。

福著クレト司祭
天主に生命を献げ給ふ

豫て少時から、「教の爲に血を流し生命を献げることが出來たならば、如何程幸福であらうか」と不斷望んで居られましたが、愈々此迫害の多い支那に來る事が出來ましたので、言語には通ぜず、布教の困難なるにもかゝはらず、大に喜ばれて、專ら聖教を傳へ、信者を導くために力をつくされました。斯して殆んど三十年も長い間、此支那に於て天主様の御榮光を顯はして居られました、が其間一回も酷い迫害に遭はれました。

然しクレト司祭はまだ致命の特恩を繋る時機が來ませんか、其度毎に難を免がれて居られました。

七十一歳の春に當り、第三回目の大迫害があり、遂に捕縛られました。此時も天主様の默示に因て、六ケ月ばかり迫害者の手を逃れて居られましたが、墮落した某信者から密告せられました。而かも司祭は從來此信者を改心させる爲に餘程力をつくされたのでありましたから、彼が司祭を敵の手に渡さんと、多數の兵士を導いて司祭の隱れ家に來ました時に、司祭は彼を見て嘆息せられて唯「汝は何の爲に此處に來たか、汝は實に哀な者である」と仰せられた計でありました。

此年七月十六日に捕へられましたのですが、翌年の二月十八日まで二百日餘り、實に言ふに云はれぬ慘酷な責苦に遭されました。度々裁判所に曳出されて、苛責を受けて居られました。或日も役人に訊べられて後、六時間も後手に縛られたまゝ地上に跪づかされ、いろ〳〵の痛苦侮辱に遭はされた上、三十回餘も強く鞭うたれました。其時クレト司祭は苦しさ息をつかれて、「汝は今我を審判き苦めて居るが、後には必ず我が拜む救主から嚴しく審判かれるであらう」と、申されました。スルと役人は冷笑ひ「何！救主が我を罰すると申すのか、宜し其麼に權能がある者なれば、汝の苦痛を救けるであらう、試に今一度苦めて遣らう」と云ひ乍ら、此度は革鞭を以て顏を強く打ち、疵と血との爲に二目と見られぬやうな慘らしい目に遭はせて、其まゝ牢獄に投込みました。

クレト司祭は、今は痛と苦とで半死半生となり、起居は愚か自由に起臥する事も出來ぬ程、慘酷な目に遭はされましたが、牢獄の中で絶わず祈禱をして、天主様に依頼り、何卒終まで此迫害に耐へる力を與へて下さい」と願ふて居られました。然し非道の役人等は少しの情用捨もなく、斯様に七十歳餘の老司祭を苦めた揚句、尙も責め苛まんと、牢獄から曳出して高手小手に縛つたまゝ、旅から旅へと二十七ケ所の牢獄を引廻しました。これで哀にもクレト司祭は苦の爲に勞れ、齡の爲に哀へたる身體を、酷き役人等の責苦の鞭に支へて、出發せられました。或時には百四十里もある途程を歩まされ、或時は六十日も長い間續いて、炎天に曝され、雨に打たれ、草の枕、石の褥と其苦痛は迚も言葉に言ひ盡す事が出來ませぬ程でありました。

斯様に所有艱難を嘗められましたが、遂に二月の十八日に死刑の宣告を言渡されました。而して十字架に縛られて、三度強く首絞められました。が、終りに多數の血を吐いて遂に致命の冠を得られ、天國の限りなき幸を享けられました。後に身体までも切り刻まれて、川中に投棄てられました。然し司祭の衣服や鎖は大切な遺物として、尙今日までも保存されてあります。

後司祭を審判いた役人は、或不敬の罪に依て死刑に處せられ、其他此司祭を敵に渡した者と司祭を苦しめた人々は皆非業の最後を遂げましたので、人々は「天主教信者に對して慘酷な事をすると、奇妙にも之を苦めた者が、怖ろしい災禍に罹る」と言傳へましたので、之が爲に漸次に迫害が薄らぐやうになりました。

二月十九日

聖コンラ痛悔者
（降生後千三百五十一年死）
後村上天皇時代

（靈父）今日は例の時刻よりも大分遲かつたですが、何か變つた事でもあつたのですか。

（俊子）唯、今日學校で窓硝子を破つた生徒があつたので、生徒は皆訊べられたと云ふて、太郎さんも次郎さんも遲く歸つて來たものですから。

（靈父）あゝ左樣でしたか、そして誰か破つた者が分つたのですか。

（太郎）誰が爲たのか、始めは皆知らぬ〳〵と云ふて居りましたので、先生は如何しても其生徒が分る迄は、皆家に遣さぬといはれました、が終に田中といふ毎時惡い事ばかりして居る生徒に疑がかゝつて、他の者は皆放遣されたのです。

（靈父）然し其田中さんとか云ふ小兒は、爲たといふ證

據でもあつたのですか。

（太郎）否ね、別に證據はありませんでしたが、毎時生徒から憎まれて居る兒ですから、皆が田中ぢや〳〵と云ふたのです。

（靈父）確かな證據もないのに、濫に邪推を以て他人に罪を被せる等といふ事は善くないことですから、之から後は能く注意せねばなりません。これでは今日聖コンラと云ふ方のお話を致しませう。

丁度今から六百年程前に、伊多利國のプレザンスと云ふ町に、コンラと云ふ一人の若い紳士がありました。素より富裕でありましたから、別に是といふ職務もなく、唯毎日山や森を駈廻つて、狩獵を爲るのを樂みとして居られました。

或日例の通り下僕をつれて狩獵に赴かれました、所が獸らず、一頭の野狐を見つけられましたので、大に喜んで直樣之を打たうとする中に、野狐は叢の中に匿れて了ひました。これでコンラは如何にかして之を逐出さうと、いろ〳〵の工夫を爲られましたが、如何しても思ふ通りに行きませぬ。下僕に吩咐けて其草に火を放けさせられました。所が折惡く西風が烈しく起りまして、火は見る〳〵中に廣い麥畑に燃え移つて大火事となりました。コンラは今は野狐どころの騒ぎではなく、大變に慌ててて、急ぎ遁げ歸られました。

こうして下僕には此事情を誰にも云ふなと堅く口禁して、心配しながら默つて居られました。

政府の役人等は此大火事が誰の所爲であらうかと、嚴しく取調にかゝりました。所が不幸にも貧しい一人の百姓が、丁度其火事の折に傍に居つたといふので、嫌疑がかゝつて捕へられた上、牢舍の中に入れられました、そして朝に夕に嚴しく責められますが、原より露程も覺のない事ですから、自分は決して火を放けた者でないと、言張つて居りました。然し役人等は此貧しき百姓を深く疑ふて居りましたから、多分罰を怖れて白狀せぬのであらうと、一層酷く責め拷問にかけま

した。今迄飽迄も知らぬ存ぜぬといふて居つた百姓も終に其苦痛に辛抱が出來なくなつて、止むを得ず「私が火を放けました」と申しました。ろれで可哀さうに此百姓は、無實の罪の爲に大罪人となつて、絞首の重き刑に處せられる事になつたのです。

(俊子)其百姓は可哀さうですな、コンラは其事を知つたら何んな感が起るでせうか。

(太郎)靈父樣、次郎さんは最前から蒼白い顏をして、何か苦んで居るらしいです。

(靈父)次郎さん、何所かお悪いのですか。

(次郎)否ね、と云ひながら靈父に近づき、低い聲で「靈父樣、學校の窓硝子を破つたのは田中ぢやないのです……と口籠る。

(靈父)ろれでは誰ですか。

(次郎)私が過つて破つたのです、が此前にも一度ろれで叱られたものですから、今度は默つて居つたのです、田中が可哀さうですから……靈父樣何卒私と一所に行て先生に謝つて下さい、もう是から氣を附けますから。

(靈父)靈父は左樣な事が出來ませぬ。何してもあなたが直接先生の許に行つて、其事情を詳しく述べて謝りなさい、ろしてあなたの爲に困つて居る田中さんを救はねばなりませぬ。もう今日は晩いですから、明朝早く其事を先生に白狀しなさい。誰でも過つて悪い事をしたり、他人に迷惑を懸けた時には、すぐに其罪を償ふ樣に努めねなりませぬ。

コンラは今迄窃に成行をうかゞふて居られましたが、人々の噂によつて百姓の受けた宣告のことを知られました。スルと良心の刺戟が激しくなつて、最早其儘に罪を匿して居る事が出來ないやうになりました。つまり百姓を救けなかつたならば、自分の手で殺すのも全然であると大に心配せられたのです、が復飜へつて考へると、自分は自首すると全時に麥畑の損害を皆償はねばならず、さすれば此資産も無一物となつて、必然生活にも困り、又悪い評判もたてられるに相違ないと、彼を思ひ此を煩ひ良久くの間、心の中に義と不義との戰が起りました、が什麼しても自分の落度の爲に他人に難義をかける事が出來ない、假令身は貧乏となり、人々から嘲けられても、ろれが爲に人を殺し、後世に於て地獄の火に燒かれる事は尙更出來ぬ、と立派に改悛の決心がつきましたので直樣裁判所へ駈け行かれました。

而して卿自分の犯した罪を包まず白狀して、何卒罪なき百姓を救して下さいと願ひ尙償ふ爲に自分の財産を悉皆出しますと申されました。役人等は一時其意外な事に驚きましたが、種々取調べの後彼の哀れな百姓を放免しました。ろしてコンラは重き刑に處せられるのですが、其罪を自首し且悪意でなかつた事が分り、其上作物や地主の損害を皆償はれましたものですから、特別に罰を赦されました。

乃で聖コンラは今迄の心配はカラリと晴れて美しき心となられましたから、喜び勇んで家に歸り、夫人に一伍一什の事情を話されました、が夫人も事の意外に驚き呆れ、暫らく茫然と唯涙に暮れて居る計でありましたが、信仰の堅い方でありましたから、夫が一時の過誤の爲に、正しき道を踏まれるやうになられたのを喜ばれ、天主樣に厚く感謝せられました。ろして償の爲に喜んで衣服や首飾に至るまでも賣拂はれ、共々に跡始末をなされました。

後コンラは只これのみでは迚も罪を償ふに足らぬと

聖コンラ苦行の首途
其夫人も亦修道院に入らる

思はれ、此後は人里離れた所に往つて、難行苦業をして天主様に仕へんと、夫人と相談の上此地を立去る事となり、夫人は此町の修道會に入られて身を終るまで其會に止まられました。聖コンラは先づフランシスコ會の行者に倣ふて、貧窮謙遜克己の諸德を修めるために、麁末な衣を着け、施與を願ひながら、住馴れた故郷を後にして、羅馬に行かれ、後シシリヤ國に行かれました。而して暫く其所で看病人となられ、特別に人々の嫌厭がるやうな病者を親切に看護して居られましたが、後人里離れた所に往かれて、日夜祈禱や默想をし、尚昔榮華の夢に耽つた事や、過失の爲に人々に災をかけ苦みを與へた事などを想起されて野草を食ひ、土の上に寢て、酷い苦行をなされました。或日もひどく悪魔の誘惑を心に覺ねられましたから、急ぎ衣を脱いで、茨荊の中に轉び〳〵て其苦痛を耐へて居られました。やがて身体中血と疵だらけとなり疲れましたので、衣を着け靜に跪いて天主様に祈禱られました。

斯して誘惑に遭ふ度にいろ〳〵の苦業と、祈禱とを以て之を防いで居られましたから　後には悪魔の誘惑もなくなりました。

斯して四十年の永い年月の間、全く世間を離れて德を修め、只管天主様に事へて居られましたので、特に奇蹟を行ふ特恩までも受けられました。而して人々から聖人の如に尊び敬はれて居られました、が後病氣に罹られまして、御自身も數日の中には此世を去るといふ事をお曉りになりました。ろれで毎金曜日には町の聖堂に赴かれて、十字架の前に平伏して永く祈つて居られましたから、其時も聖堂の十字架の下で、涙を流して最後の告解をなされました。ろして罪の赦を得られ、聖躰を領けられた上、目を閉ぢ跪いて永く祈禱をして居られました。此時靈父を始め十數人の人々が傍に居られましたが、奇妙にも忽ち光が輝き、聖人の周圍を取かこんで消ねました。良久しても聖人は跪いたまゝ、少しも動かれませんので、人々は怪しみ靜に近づいて見ますと、聖人の靈魂は早や軀を離れて天に昇られた後でありました。御死去になつて後も尚ほ跪き掌を合せて祈禱の狀をして居られたのであります。又此時他の聖堂の大きな鐘が、丁度人でも撞いたやうに、自ら鳴り響きました。人々は駭いて其所に馳せ集りましたが、別に何の異つた事もありませぬでした。然し其鐘が鳴つた時刻は、丁度聖コンラが逝かれた時刻でありました。即ち天主様が聖人の靈魂をお受取になつた事を、一般に御知らせになつたのであります。

人々は聖人の德行を敬ふて、其死骸を恭しく聖堂の中に殯葬り、此ノトといふ町の守護の聖人と仰ぐやうになりました。後此聖人の御傳達によつて數多の奇蹟が行はれました。

ろれで皆さんは此聖人のお傳達を以て、天主様に向ひ何卒過失を償ふ事と、正直に白狀する勇氣とを與へ下さいとお願ひなさい。假令如何な人でも靜に省みると、必然多いか少ないか他人に害を與へて居るに相違ありませぬ。ヨシ害を蒙けて居る人が夫れを忘れて居るにしましても、全知なる天主様の審判を免かれる事が出來ませぬから、若し左様いふ事があれば貴と行とにかゝはらず、一刻も早く償をせねばなりませぬ。

二月廿日（降生後四百五十六年生　同五百三十一年死）

機體天皇時代

聖エルテリオ司教

（靈父）今日は聖エルテリオ司教様のお話を致しませう。

此聖人は五世紀の中頃、佛蘭西の北東にある白耳義と云ふ國のツルネーと云ふ町にお生れになりました。家は豊裕なばかりではなく、先祖の中には公教の爲に致命された御方もありました。此町の最初の天主教信者の家といふので、名高う御座いました。聖エルテリオは性質聰明、勁ない時から好んで書物を讀み、善德を守り、現世の榮譽を貪らず、たゞ天主様を愛し、專ら聖教を守る事に勵んで居られました。ろれで聖人の御友達の聖メダール（六月八日）と云ふ德行の優れたお方は預言して「エルテリオは何時か必ず此町の司教になる」と仰せられましたが、果して其預言の通り、聖人御年三十歳の時選ばれて、此ツルネー町の司教の座に陞られました。

（俊子）其時分此町に信者が多數ありましたのですか。

（靈父）左様です、信者の數も大分にありましたが、丁度此時分白耳義は佛蘭西の屬國でありました。而して此町にはフランと云ふ野蠻人の首長が居りまして、信者に對して亂暴を働いて居りました。加之多くの異端者や、偶像教徒が頻に誤謬の說を弘めますので、信者の中にはりれが爲に迷はされて、漸々信仰が衰へるやうになりました。乃でエルテリオ司教様は、斯いふ烈しい反對の場合、迚も信者に公けに教を守らせる事が出來ぬと、お考へになつて、信者と俱にツルネー町を去つて、一里計り離れて居る村へ行かれました。然し司教様は斯く困難な場合なるにも拘らず、絕ねず信者の信仰を保護し、或時は演說を以て、或時は書物を著して、異端の誤謬を說き、眞の道を弘めて居られました。其上時々窃に町に赴かれて、心の直しき者を尋ねて聖教を傳へて居られました。ろれで彼是九年の間身を修め祈禱をして、晝も夜も布教に努めて居られましたから、其德行の高き評判は、次第に四方に弘まる様になりました。

此時未信者なるツルネー町の知事に一人の娘がありました。此娘は圖らずエルテリオ司教様の智慧の優れ、德行の高い事を知りました。心窃に司教様を戀慕ふ様になりました。或日司教様が村の聖堂の中で祈禱をして居られますと、其所へ娘が入つて來て、司教様に心の中を打明けました。其時司教様は直に起つて「哀れなる者よ、天主の聖名によつて汝は此處を去り、再び我に近づくな」と、嚴しくお咎めになりました。スルと奇妙にも其娘は恰ど雷にでも感れたやうになつて、其場に倒れて死にました。知事は委細の事情を聞いて、泣く〳〵之を葬りましたが、然しエルテリオ司教の拜まれる神様の、お能力を曉りましたので、是は天罰であらう。何卒して今一度娘を蘇生らせて下さるならば、自分は勿論一家一族までも、皆信者になりませうと決心して、司教様に其事を願ひ出ました。

司教様は、「死人を復活らす等といふ事は、天主様の御力に依る事であつて、予は左様な權能を持つて居ませぬ。然し心を盡して熱心に天主様に御祈禱するならば、或は聽容て下さるでせう」と應へられ、其れから後兩三日の間といふものは、晝も夜も續いて大齋をせられ、「何卒天主様、外教人の改心の爲に、此聖き奇蹟を顯し下さい」と熱心に祈られまして、娘の死骸を葬つてある所に行かれましたが、此時多の人々は附隨ひました。司教様は其墓に着かれますと、土を除け墓を開かせて、三度聲を揚げ、「天主の聖子耶蘇基督の聖名によつて、爾に復活を命ず」と仰せらました。スルと三度目に其娘が息を吹返し、靜に眼を開き、手足を動かし、終に身を起して墓から出ました。ろして司教様の足許に跪き、涙を流して感謝致しました。後此娘は洗禮を領け、償をして立派な信者となりました。

（淺子）知事も約束通り、喜んで信者になつたでせう。

（靈父）否ね、其場に群集つて居ました多數の人々は皆其奇蹟に驚きました。而して中には天主教に歸依つた者も多數ありました。知事も亦一人の娘が蘇生ましたものですから、大ひに喜んで百久の間は何事も言ふ事も出來ず。唯々嬉し涙に咽んで居りましたが、如何した理由か、矢張以前の通りで、天主教の信者となりませぬでした。

（太郎）スルと知事は司教樣を欺したのですな、何か罰がありませぬでしたか。

（靈父）左樣です、罰がありました、即ち知事は此大きな奇蹟によつて娘が救けられたにもかゝはらず、他の未信者を憚り怖れて、司教樣との約束を反古にしましたから、此ツルネー町に天罰として、恐ろしく傳染病が發生て、日々死者が殖ねて來ました、所が外敎

聖エルテリオ司教
知事の娘を蘇生らせ給ふ

人等は大ひに驚いて、此は必ずエルテリオ司教が、人を活したり殺したりする魔法を遣ふて、此傳染病を流行せたに相違ないと、大變な誤つた考を抱き、果は司教樣を殺さうとまでしたのです。ろれである夜暗に乘じて司教樣を捉へ、知事の許に連行きました。知事も仕方なく司教樣を鞭たせて牢舍の中に入れました。

（太郎）眞實に恩知らずの知事ですな、司教樣は知事を恨まれたでせう。

（靈父）否ね、司教樣に選ばれるやうな方は勿論、凡て天主教の信者は、他人を救け施與をしても、皆天主樣の爲にするのでありますから、其恩返しを望むなどゝいふ事は微塵もありませぬ。ろれ故此司教樣も知事に何んな事を爲られましても、怨むとか憎むとかいふやうな考は、毫頭起されぬばかりではなく、却て此知事の改心の爲に牢舍の中で熱心に祈られたのです。所が其夜天使がお出現になつて、いろ〳〵慰められた上、其鎖を解放し門を開けて、司教樣に出る事を命ぜられました。乃で司教樣は夢ではないかと、驚かれながらも命に從ふて、牢舍を出で導かれるまゝに、町を通つて村へ歸られました。

翌朝になると一人の者が知事の許に駈けつけて、昨夜エルテリオ司教の町を通るのを見ました、と報せに來ました。ろれで知事は大ひに驚いて早速牢舍に行きましたが、門が堅く閉つて居ますから、何かの間違であらうと云ひ乍ら、念の爲め戸を開けて視ますと、奇妙にも司教樣の姿は消ねて影も形もありませぬでした。人々は此奇妙な事を言傳へて、愈々魔法遣に相違ないと、今は司教樣に害を加へる事を爲ないやうになりました。乃で司教樣は毫も畏れず、以前のやうに町に往來して、布教に努められました。

數年過ぎて後此地方に種々の騷動が起りました。此時に司教樣の苦業とお祈によつて知事の心が聖龍に照されて居ましたので、其折知事は司教樣に「何うか此ツルネー町に住居をして下さい」と願ひました。ろれで司教樣は喜んで信者等と共に町に歸られました。五六日して後即ち降生後四百九十六年の十二月廿六日、御聖誕の祝日の翌日、知事は家族を始め一萬四千餘人の人々と共々に、立派な覺悟を以て、いと嚴かに洗禮の秘蹟を領け、天主教に歸依りました。又此日盲目の者は眼が開き、跛は杖を捨てゝ起つ事が出來るなど、いろ〳〵の奇蹟が行はれました。ろれで此ツルネー町では此日を、人々が天主教に歸依つた紀念の祝日としましたが、今日に至るまで毎年引續いて、盛んに此日を祝して居ります。

又一月四日聖女グノワのお話をした中に、一寸申上げた佛蘭西の皇帝ノロピース陛下も、此年佛蘭西に於て洗禮をお領けになられましたのですが、後陛下は今

迄の捷戰を感謝せられるために、此ツルネー町の聖堂に參詣せられました。此皇帝は信者となられて後は、いろ〳〵種々と教の爲に力を致されましたが、復永い間の惡い習慣と、高貴の身分で在らせられるために、いろ〳〵の罪惡も犯されました。此時エルテリオ司教樣は皇帝に面會つて、「陛下よ、此度は如何いふ御用で此地に御越になりましたか、私はよく存じて居ます」と申上げられました。スルと皇帝は「別に用があつて來たのではない」と何氣なく仰せられましたから、司教樣は「陛下は多くの罪惡を犯されました、然し天主樣の尊前に白狀するのを、憚かつておいでになるのでせう」と重ねて申上げられますと、皇帝は直樣良心の刺戟が起つて、今迄犯した罪を深く悔まれ、涙を流して悉皆司教樣に告解せられました。而して罪の赦免を得られて後、司教樣に彌撒を願はれ、恭しく聖躰をお領けになり、天主樣に厚く感謝せられ、此聖堂に多額の寄附を爲されました。

聖エルテリオ司教樣は斯して後も、なほ三十五年の間布教に努められ、異端者等に向つて頻に眞の道を說き明し、熱心に之を導いて居られましたが、或日說教が終つて聖堂を出られる途端に、異端者の爲に捕へられて、痛く打擲されました。所がそれが爲に重い傷を受けられ、兩三日の後遂に果敢なき現世を去られました。時に御年七十五歲でありました。生前仲好い友達の聖メダールは、此時他所の司教樣になつて居られましたが、此事を聞かれて、早速此町に來られ、愚父や人々と共に此町の聖堂の中に、厚く其死骸を葬られました。其遺物は今日も尙ほその聖堂の中に保存されてあります。

何卒皆樣も此聖人の御傳達によつて、誘惑を防ぐ力を願ひ、尙また人々を公教に歸依らす爲に熱心になるやう、御願ひなさい

二月廿一日

降生後千八百二年生
同千八百四十年死
孝明天皇時代

福者ヨハネ、ガブリエル、ペルブアール
宣教師致命

(愚父)此月の十八日に福者フランシスコ、レジス、クレト宣教師致命のお話を致しましたが、今日は其お方と同じ會から出身られた、矢張支那に於て致命せられた福者ヨハネ、ガブリエル、ペルブアール宣教師のお話を爲ませう。

父親は佛蘭西國の南の方にある、小さい村の百姓でありまして、至つて質撲な信仰の堅い人で、先祖から讓られた僅少な土地を耕して、細き煙を立てゝ居りました。而して八人の子供に、何卒して善き教育を施して、立派な信者に爲度いといふ望みで、それを樂しみに切々と働いて居りました。

福者ペルブアール宣教師は、其八人の子供の總領でありました。幼ない時から身体が弱く、また氣短の性質でありましたが、両親のよき育て方によつて、漸次に其惡い性質が薄らいで來ました。小學校に通學れるやうになつてからは、勉强を爲る事が好で、毎時優等の成績でありました。それで教師も大層寵愛がつて、時々用事の折などには自分の代理に他の生徒を監督させて居りました。ペルブアール師はいつも謙遜して居られましたから、さういふ時にでも生徒等から、嫉みや憎みを受ける事もなく、却つて益々皆の者に愛されて居られました。殊に自分の缺點である、短氣に注意して之を矯正す事に努められましたから、時々生徒から故と惡戲はれ、苛められるやうな事がありましても、其人々等に對しては一層親切を竭し、少しも憤怒や復讐の念などを起すやうな事がありませんでした。

(太郎)此いふ事は却々出來難い事ですな。

(愚父)さうです、然し己れの惡い習癖を矯正すには、何しても此丈の覺悟がないと、其缺點に打克つ事が出來ませぬ。ペルブアール師は其上怠惰の害を防ぐ爲に

學校から歸られると直に父親の仕事を手傳ひ、夜になると弟妹達に公教要理の稽古をさせて居られました。而して少し閑暇があると教理の研究をせられ、好んで聖人傳を讀んで居られましたが、其の中でもピンセンシオ、ア、ポーロ聖人(七月十九日)を特別に尊敬して居られました。つまり此聖人は愛德の深い御方でありましたから、ペルブアール師も其德に倣はんと爲られたのであります。又聖堂などに行かれた時には、特に敬ひと愼みとを以て、祈禱や默想をせられ、決して他見をしたり、厭ふやうな事がありませんでしたから、人々も「此小兒は身体の上を踏まれても動かぬ位に、熱心に祈禱をして居る」と其信仰の厚い事を互ひに感じて居りました。

(太郎)次郎さん、今のお話をよく覺えて置きなさい……。

(墨父)次郎さんばかりでなく、太郎さんも彌撒の拳侍や祈禱をせられる間に、時々笑ふたり談話をしたり、又欠伸などを爲て居りますが、之から後は此福者に倣ふて、さういふ不敬の事を止めるやうにせねばなりませぬ。

ペルブアール師は十五歳の時、弟と共に神學校の豫備校に入られました、が間も無く此校でも教師を始め生徒等は、ペルブアール師の善き成績と、謙遜の德に感心して誰一人之を賞めぬ者がない位になりました。或時も教師がペルブアールの手帳を見ますと、半分書きかけてある文字が多數ありますので、不審に思ふて居りましたが、やがて「是は要事で呼ばれた時には、一字を書く瞬時の間も猶豫せず、すぐに柔順の德を守つたのであるといふ事が解つて、大ひに感心しました。またペルブアール師は常に聖主基督の御受難の事を、深く默想する習慣がありまして、此學校を卒業する時の論文にも「十字架は最上の寶」と云ふ題を以て、十字架の事に就て詳しく說明し、最後に「信者の少數い國に於て、使徒等や宣教師等の、紅の血に染まつた十字架は、何んなに美しく光りかゞやくであらう?」と記されましたのです。ろれで日頃十字架の符號を爲られる時には、いつも恭しく如何にも鄭重に爲て居られましたから、人々は其一事を見ても、感動して居つた位でありました。

後此學校を卒業せられましたが、豫て望んで居られました通り、身を全く天主樣に獻げて外國に往き、布敎傳道の爲に一生を送らう、といふ決心を爲されて、其旨を御兩親に打明けられました。御兩親は、ペルブアールは總領の息子でありますから、自分の手許に置いて、相續者にしようと思ふて、樂しんで居つたのですが、然し孰らも信仰の堅い御方でありましたから、天主樣の聖慮に從ふて快く、其事をお許容になりました。ろしてペルブアール師は大ひに喜ばれ、ピンセンシオ、ア、ポーロ聖人の設立られた、ラザリスト會にお入りになりました、が此會でも亦矢張、人々に良き模範を與へて居られました、即ち柔順の德を發ふために此會の規律をよく守り、信仰を發ふ爲に默想と祈禱をなし、己に克つ爲に如何なる食物も口にし、又斷じず健康に注意せられ、短氣の惡癖を矯め、ろしていつも天主樣の尊前に居るといふ思念を以て、罪を防ぎ誘を避けて居られました。

數年の後品級の秘蹟をお領けになつて、司祭となられました。ペルブアール師は直にも外國に行きたいといふ、お望みでありましたが、身体のお弱い爲に急に許されませんでした。乃で暫く佛蘭西國に止まつて、小兒の敎育に力を注いで居られました。ろして信仰の眼を以て考へて見ると、世に痛苦ほど貴重なものはなく、之を求める爲に世界の極へ、探しに往つてもろれ丈の價値がある」と、天主樣の爲に苦痛を受ける事を望まれ、毎時「布敎の爲に一日も早く、外國に往く事が出來ますやう、お恩惠を與へて下さい」と祈つて居られました、が三十三歳の時になつて、支那に赴かれる事となり、他の七人の宣敎師と共に佛蘭西を出發せら

れました。

漸く六ケ月餘りもかゝつて、翌年支那の澳門と云ふ所に着かれました。後コナンと云ふ地に赴かれ、其地で以前から居られる宣教師に隨ふて、支那語の勉強を爲られました。

此時支那では餘程以前から、法律を以て基督教を禁じて居りました。ろれ故之を信ずる者があると、誰でも皆死刑に處せられたのであります。然し其法律を執行せられるにも、或時には嚴しく又或時には緩かでありましたから、次第に信者が殖ねて來ました。ろれで公けに天主堂を建てるなどゝいふ事が出來ませんでしたから、信者の多い地に説教所とか巡回所とか云ふて、普通の家に祭壇を設け、宣教師が斷ねず、其説教所を彼方此方と順々に巡つて、信者の爲に彌撒を行はれ、告解聖體等の秘蹟を授け、未信者には小冊子を配布り、説教等をして居られましたから、迫害の時であるにも拘らず間斷なく、天主樣の御稜威が輝いて居りました。

ペルブアール師は素より壯健なお方でありませんでしたが、受持の説教所を巡回られるには、近い所でも十里許もあり、遠い所では數日もかゝる程長き旅を爲ねばなりませんでした。ろれで馴れぬ山路を辿り、疲れを休める場所もなく、其上食事の困難といひ、迫害の危險といひ、餘程の辛苦を嘗めながら、三年の間夏の暑い日も、冬の寒い夜も弛まず厭せず、只管來和親切をつくして、信者の信仰を溫め、未信者の歸依の爲に活動いて居られましたが、終に教の爲に御自分の生命を棄てねばならぬ時機が來ました。

ある日曜日の朝、ペルブアール師は説教所で彌撒が終りました時に、人々の密告によつて數多の役人が此村に來たといふ事が分りました。ろれで司祭は信者等と共に、窃に附近の森の中に遁れました。此時役人等は早くも跡を追ふて森に來ました、が忽ち司祭達の姿を見失ひましたので、逃げ後れた一人の信者を捕へて嚴しく責め、衞金銀を與へると誘ふて、司祭達が何處に隱匿て居るかと訊ねました。スルと其信者は臆病にも金銀の爲に信仰の眼が暗んで、終に其在所を告げ、往古のユダスのやうに、司祭を敵の手に渡したのであります。

ペルブアール師は直に捕へられまして、いろ〳〵酷く責められた上、翌日遠く距れて居る町の裁判所に連れ行かれました。途中司祭は饑餓に迫り、苛責に疲れ歩行く元氣もありませんでした、が役人等は情なくも一層ひどく打擲しました。其折一人の未信者が此慘酷な取扱ひを見て、大ひに同情を寄せ、自ら進んで役人に請ふた上司祭を扶けて、駕籠に乘せ無料で町に送り屆けました。ろれで司祭は此未信者の情ある所爲に厚く感謝して、其人の爲に恩寵の下らん事を、熱心に祈つて居られました。

裁判所に着きますと、官吏から長い訊問を受けて、次のやうな問答をせられました。

官吏「汝は何の爲に此支那に來たのか」司祭「私は唯此國の人々に眞の天主樣の御教訓を傳へて、人々を善道に導き、死後終りなき幸福を得させる目的のみで渡來のであります」官吏「汝等の拜ひ神は、何故汝を此苦痛の中より救はぬのか」司祭「そは必ず我等に、此世界の一時の短い苦痛に遭はせ下さつて後、永遠の福樂を與へて下さる爲であります」官吏「汝其宗教を棄てねば、此國の法律によつて死刑に處せられるぞ」司祭「私は眞正の宗教を信ずるが爲に殺されるのは、何よりも望む所で、また無上の光榮であります」と、斯やうな問答を幾回も繰返しましたが、司祭の決心が少しも變りませぬのを見て、官吏は兵卒に吩咐けて嚴しく責めさせました。乃で司祭は復も兵卒に革紐を以て顏や手足の嶽ひなく、散々に强く打ち擲かれ、全身紫色に變りましたが、まだその上顏に唾棄せられ、腮を碎かれ手を折られ、實に痛々しい痛苦に遭はされました。ろして後見懲の爲に牢獄から牢獄へと、諸所を曳廻されました。然し此時司祭は苦難の中にも、人

〻に交つて道の兩側に出迎ふて居る信者達に、秘かに罪の赦免を與へる事が出來ましたので、何よりも大ひなる慰藉を得られたのであります。

ペリブアール師は斯して一年餘も、樣々の責苦に遭はされまして後、いよ〳〵絞首の刑を言渡されました。然し此死刑の執行には、皇帝の批准を受けねばなりませんので、其間數ケ月あまり牢獄に入れられて、他の罪人と起臥を俱にして居られました。其時他の罪人等はペリブアール師の忍耐と柔和の德に感化され、また聖敎の話を聽いて非常に感動して居りました。司祭はまた其間天主樣に致命の特恩を受けるやうになられた事を感謝せられ、己を責める役人等の罪の赦を願ふして、係の官吏より買受け、最も丁重に信者等の墓地に葬りました。經へて千八百八十九年に榮譽ある福者の位に登られました。

福者ペルブアール絞首
十字架に上らめられて
ふ給へる

て居られました。其中に愈々死刑の當日が來ましたので、執行場に曳出されて十字架に縛られ、繩を以て首絞られ遂に三十八歳を一期として、此塵の世を逝られたのであります。丁度此時は金曜日の午後三時頃でありましたが、司祭の呼吸が絶えると同時に、空に高く紅い十字架が現はれましたので、之を視た多くの人々の中には、此不思議に感じて、信者に歸依つた者もありました。御死骸は熱心な信者等が醵金

寔に此福者は平素努めて、聖主の御苦難の事を偲んで居られましたが、奇妙にも其終末に當つて聖主に似通ふた事が多くありました。即ち其主なる事は、主の如く滿三年の間布敎に從事せられ、主の如く信者の爲に敵に賣られ、主がシレネのシモンに助力を受けられた如く、未信者の支那人に救けられ、主の如く顏に唾棄せられ、主の如く敵の爲に祈り、主が苦膽を飲まされし如く、犬を刺して其血を飲まされ、主と同じく金曜日の而かも時まで同うして死なられ、又主を苦めた人々はろれ〳〵哀れな最後を遂げし如く、此司祭を苦めた或者は殺され、或者は位を剝がれ、或者は失望して首縊り、又或者は流刑に處されたのであります。

(太郎)此司祭の御弟妹は如何なりましたか。

(靈父)御弟妹は皆御兩親の良き敎育と、此兄上の良き模範とによつて、各自立派な信仰を表はされました。即ち第一の弟も矢張宣敎師となられましたが、不幸にも支那に往かれる途中、船の中で病死せられ、次の弟も司祭となられて、淸き一生を天主樣に献げられました。又三人の妹も、それ〴〵童貞會に入られ、生涯身を修めて天主樣に事へられました。尙ほ司祭を助けた感心な未信者は、ペルブアール司祭が御昇天の後、彼に御出現になりましたので、其人は大ひに感じて公敎を深く勉强し、家族一同と共に洗禮を授かりました。

そして後いろ〳〵の恩寵を受けて、いとも安らかに此世を去りました。

そこで皆樣は、萬一不熱心な信者や未信者が、靈父等に對して配慮をかけるやうな事を爲た時には、何卒自ら進んで彼を防ぎ之を慰めるやうに努め、そしていつも靈父等の良き奬めに從ふて、益々熱心な信仰を保つやうに爲なさい。又常に己れの欠點を矯正す事に注意し、此司祭の御傳達を願ふて、日々些少づゝでも、爲にくい事を爲し、其苦痛を天主樣に献げて、恩惠をお願ひなさい。さすれば必ず良き結果を得られるでありませう。

二月廿二日「1」

（降生後千五百七十八年生
同千六百二十四年死）

明正天皇時代

福者ヂダコ、カルワリヨ宣教師

（附）日本殉教者

（靈父）本月五日に日本二十六聖人のお話を致しましたが、皆さんは定召深く感じられた事と察します。日本の殉教者にたゞ此二十六聖人のみでもなく、一々數へる事が出來ない位數多ありまして、既に千八百六十七年にも二百五人の方々が福者の位に登られました。これで此名譽ある皆さんの先祖が、勇ましい殉教を爲された事を、逐次お話致しますが、今日は今から三百年前即ち寛永元年に、奥州仙臺で殉教せられた葡萄牙人の福者ヂダコ、カルワリヨ宣教師と、其時共に致命せられた日本人で、二百五人の福者の中に交つて居られる方々のお話を申上げませう。

福者ヂダコ、カルワリヨ司祭は葡萄牙國の御方で、十七歳の時有名なコインブラといふ都の、耶蘇會修院に入られました。二十二歳の眞支那の澳門に行かれ、其他の傳道學校に入り、神學哲學を修めて、司祭と爲られました。

千六百九年我慶長十三年（二十六聖人昇天後十三年）に初めて日本に來られて、滿二ケ年の間肥後の天草に滯在せられ、其後京都、大阪へも行かれましたが、千六百十四年（元和元年）に、日本に居られた宣教師は、徳川家康公の嚴しい命令によつて、殘らず本國に還される事となりました。これでヂダコ司祭は止を得ず、一時安南國に渡られましたが、此地でも亦迫害に遭はれましたので、澳門に赴かれました。然し今一度日本に於て傳道したいといふ望が絶えませんので、終に元和二年に再び日本に渡來れて、肥前の大村といふ地で窃に布教せられ、翌年奥州に移られました。其頃奥州には天使のエロニモ（十二月四日）といふ靈父が熱心に布教して居られましたから、聖師と共に力を協せて多數の人々を聖教に導かれました。四年の後エロニモ師に別れて獨り津輕を指して旅立たれましたが、途中樣々の苦難に遭はれ、終に鑛夫の妻となつて一先づ蝦夷（今の北海道）に航つて福音を傳へられました。此時分蝦夷に金山を發見したので、大勢の鑛夫が諸國から集り來て働いて居りました。其中に信者も交つて居るので、彼等に秘蹟を授けて慰め、また新に洗禮を傾けた者も多くありました。

後便を求めて津輕の城下高岡といふ地に赴かれました。此地は徳川家康公から流竄された貴族の信者が多勢居られる所であります。ヂダコ師は此等の人々に秘蹟を授けて厚く慰められました。後南部、秋田の各地を巡つて、數多の外教人に洗禮を授けられ、稻江といふ金山に行かれました。師が此數月の間に嘗られた艱難といふものは實に言葉にも盡せぬ程で、或時は船諸共に覆らんとし、或時は金山の坑穴に陷らんとし、危く生命を失はんとせられた事は屢々ありました。然し其都度天主樣の奇妙な御守護によつて生命を全ふせられ、氣候風土の異なつて居る此日本の地に於て、一意專心聖教を傳へられました。ろして元和八年にも再び各地を廻られました。

翌年また各地を巡回せられ、續いて蝦夷に渡り金山の信者の信仰を溫められました、が後仙臺に住居を定めて、土地の信者は勿論、其附近を巡回して、熱心に眞の道を傳へて居られました。時に仙臺の領主伊達政宗は將軍の命令を受けて、領内の基督教徒を調べる事になりました。

茲にヨハネ後藤といふ、身分の高い信者が居られました。大勢の家來と共に信仰固くして能く信者の義務を盡して居られました。挙行の一人茂庭修理は、領主の命令を受けて信者を調べて居る中に、後藤の主なる信者である事を聽りましたから、之を殺さうと準備をして、他の挙行下田大膳に相談しました。所が此下田は平生後藤と親しい間柄でありましたから、大に熱い

て此旨を後藤に告せ、疾く教を棄てられよと勸めましたが、後藤は少しも心を動かさず、領主に「拙者は不肖ながら忠の一字を忘れず、君の爲に一命を獻げる事も辭みませんが、眞の教を棄てよとの命令には從ふ事が出來ませぬ云々」との書面を贈つて、窮に殉教の覺悟を爲し、天主樣の聖寵を蒙る爲め度々秘蹟を授かつて居られました。領主政宗は此書面を見て大に怒りましたが、平素二心なき忠義な臣でありますから、何とかして教を棄させ生命を助けてやり度いものと、百方工夫をして居りました。

時にヂダコ師は、此後藤の邸に居られましたが、此事を聞かれて御自分の爲に後藤が罰せられてはならぬと思はれ、遠く離れて居るオロコ谷といふ山奥に隱れ、時折市中に出て、信者を慰めて居られました。其中後藤は南部といふ所に流され、伊達の領内は信者の取調が餘程嚴しくなりましたから、數多の信者は各自遁れて、ヂダコ師の居られる傍に長屋を建て、其所に約ろ六十名ばかり移り住みました。

後取調の役人等は彼方此方と嚴しく信者を穿鑿しましたが、一向其影も見ませんので、不審に思ふて居る中に、圖らず雪の上にある足跡を辿つて此オロコ谷に來て見ますと、大勢の信者が此谷に隱れて居る事を知りましたので、早迎捕へて衣服を剝ぎ長屋を倒し潰して了いました。時にヂダコ師は役人の前に進み「我は外國の宣教師であるから疾く捕へられよ」と告げながら、今まで身を隱す爲に着て居られた。武士の服裝を脫ぎ脇差を捨て、司祭の法衣に改めて繩を受けられました。ろして其日一同は三分と云ふ所へ引れ、其儘終日拳行屋敷の門前に立たされましたから、雪と寒さの爲に痛く苦されました。

やがて司祭は拳行の前に呼出され、生國姓名及び日本に來られた理由等を訊ねられましたから、師は詳しく其訊問に御答へになつて後「我は聖主基督の爲に血を流す事を望むと申されました。スルとマチヤス伊兵衛といふ方が進み出て拳行に向い「我は師の家主である」と云はれる中に、ポーロ金助といふ方も亦進み出て、「我は師の門弟である」と申されますと、續いて數多の信者も皆口を揃へて、「我々は基督教徒である」と申しました。乃で拳行は役人に命じて一同を附近の小舍に入れましたので、此夜ヂダコ師は微夜信者に告解の秘蹟を授ける事が出來ました。

翌日一同は手を縛られ、各自背に基督教人と記した紙幟を負されて、朝早く此三分を出發し、二日間の旅をして、水澤といふ地に行く事となりました。所が此日は二月九日で格別寒さ此地方は、朝よりの大雪で一層の苦痛を覺ね、皆足の運びも進み兼て居られました。中にもアレキシス幸右衛門と、ドミニコ道齋といふ兩人の老人は倒れ勝となりましので、無情の役人等は此二人を首刎ね、見懲の爲に尙も細かく斬刻み、眼も當られぬ程慘酷なことを致しました。其夜ヂダコ師は宿場の役人に預けられ、彼等の請によつて使徒信經の講義を爲されました。

翌日になりますと領主の家老岡備後、橋本豐後の兩人が出張して、ヂダコ師を苛く責めましたが、我は唯眞の宗教を傳へる爲に來た者で外に何の望も企もない、若し之を罪なりとせば思ふ存分に苦めよ、我は此教を信じ此を傳へるが爲に痛苦を受るのは却て望む所である」と申されて、聖悟の体を示されました。兩人の家老は詮術なる更にマテオ孫兵衛の妻を引出して師に向ひ、「汝は教を棄る事を承諾せねば、切て此婦人に教を棄させよ、婦人は心の弱き者なれば復汝の云ふ儘にならん」と云ひました、所が師は顏色をかへて、「今日迄眞の教を信じて守れよと勵ました者が、如何して其樣な事を申す事が出來ませうか」と嚴しく斷はられました。乃で兩人の家老も手の着けやうがなくなりましたが、然し此儘にして置きますと、他の信者は師の信仰を摸範として、益々信仰堅固になる恐れがありますから、一先づ師を牢獄に入れました。

ろして信者にも教を棄てよと、樣々に說き諭しましたが、誰一人之に應ずる者がありませぬ。ろれで家老は信者の中からポーロ金助、レオ權右衛門、マチヤス喜藏の三人を側近く寄せて、「汝等將軍の命令に順ふて速に心を改め改宗すべし、然もなくば酷く責殺さん」と嚴しく申しました。然し三人は少しも恐るゝ色もなく、「吾々は天から賦與られた自由によつて、救靈の爲に天主教を信じ守るので、設令將軍の命令でありましても、眞の道を棄てゝ天主樣に反く事は出來ませぬ、宜し此上は如何樣に責められるとも決して此教を棄てませぬ」と、言葉正しく其決心を示しましたから、家老は獄卒に命つけて、此三人の足を木に挾み、骨も碎けよとばかり締付さしました、が三人は健氣にも眼を閉ぢ口を緘ぢて、其苦痛を耐へられました。ろれで家老も其堅き決心を動かす事が出來ないのを見て、責苦を中止し、チダコ師を初め教多の信者を、仙臺の奉行茂庭周防の許へ送りました。

此日は二月十日でありまして、師は馬に乘られ信者は徒步で進まれましたが、膚も裂かれる如く寒冷の上に、綿のやうに降り積む雪の中をも事とせず、途すがら師は馬上から信者達を慰め勵まし、一同も亦勇んで進まれました。中にもレオ權右衛門は前夜强く傷められた足を曳づり乍ら、いとも愉快な面目をして眞先に進み行かれました。途中ある松原を通る際に、突然一人の信者が顯はれて、護送の役人に向ひ「私も基督敎人でありますから、何卒此方々と同じ刑に處して下さい」と述べました。乃で役人は直に縛つて一行の中に加へました。此人はジユリアノ喜右衛門といふ方であります。頓て一同は茂庭奉行の許に着かれましたが、此處では已に九名の信者を捕へて詮議中でありました。チダコ師は直接國王伊達政宗に面謁し度しと願はれましたが、近侍の者は今師を國主に會すと、國主は必ず師の道理ある言葉に屈服される、斯ては他の臣民に對して威權を墮される事になると思料つて師の願を却けました。

又此頃仙臺に於て別の信者が多數殉敎せられました。即ち二月一日には奥州の大村出身の熱心な信者である、マルコ嘉兵衛と其妻マリアの兩人は裸體で市中を曳回された上火刑に處せられました。又同日此市の醫師で嘗てチダコ師を其家に留ました。ヨハネ淺井といふ七十餘の老人と、其妻アンナの兩人は、役人に捕へられて氷の中に三時間も永く入れられ、其後夫妻とも裸体のまゝ馬に乘せられて市中を引廻され、辻々で冷水を注ぎかけられましたので、終に水責で致命せられました。尙又二月五日にはアンデレア掃部と其子ポーロ佐五郎の兩人は火刑に處せられ、ポーロ新藏と云ふ人は全身試し斬にせられ、十二日にはアンデレア市右衛門と其僕ルドビコ喜助の兩人も首を刎られました。此日奥州城山に於ても亦シモン彦右衛門と其妻のモニカ并に御小兒一人が、首を斬られ、臼木野と云ふ地でもガスパル市右衛門と云ふ方が首を斬られました。皆孰れも羅者の位に登され、奥州の聖人と稱して、世界萬國に迄も其名が轟いて居ります。

扨說チダコ、カルワリヨ靈父を始め、數多の信者は獄中で此殉敎者方の事を聞き、一時も早く其樣な幸福を得んものと、心は頻に急燥ちましたが三日四日と過ぎて、二月十八日となりました。此日午後の二時頃に役人が來て、一同を引連れて川岸に行き、其所に深さ四尺廣さ四丈餘の穴を堀つて川水が流入るやうに爲し、其中に杭を打つて信者を一人宛裸体のまゝろの杭に縛付けました。スルと漸次に寒冽き河水は此穴に流れ入つて凍氷ましたから、體は針を以て刺す如で、ろの痛み苦みは却々云ひ盡す事が出來難い程でしたが、一同は只管に耶蘇樣マリア樣の聖名を唱へて、其苦痛を忍んで居られました。チダコ師も亦靜かに眼を閉ぢて默想せられ、良久して一同に說敎して絕ねず勇氣を振はせて居られました。其中に多の未信者が集り來て、疾く敎を棄てよと勸める者もあり、また彼是と惡口雜

言して汚辱める者もありました、が一人も心を迷はす者が有ませんでした。

斯して三時間餘り經ますと、奉行は役人に命つけて聖徒を穴の中より出させ、今度は凍つて居る砂の上に轉々して酷く責めました。一同は少しの血の氣もなく、疲れ果て居られるうへに、尚寒風に曝されましたので、身體は氷の如に堅く凍ゐて手足の自由も利かなくなりましたから、唯天主樣の攝理に托して一心に祈禱と默想とをして居られました。デダコ師の家主マチヤス伊兵衛と、ヨユリアノ治右衛門の兩人は、良久砂の上に倒れ伏したまゝ、祈つて居られましたが、不意に跪いて何か奇妙な物でも視て居るやうに、天を仰いで「オ、天主樣……」と叫びながら、兩人共同時に呼吸が絶ねました。

暫時して奉行は役人に命つけて、此兩人の死體を數段々に斬刻ませて後、河中に投込ませ、他の人々を皆一先づ牢獄に連歸りました。ろして直に奉行はデダコ師に向つて、敎を棄てるやうにと勸めました。奉行は斯く再三司祭に向つて敎を棄てる事を勸めますのは、何卒して其堅き決心を翻へさろう。萬一成功せば非常の名譽であると考へたものですから、今は奉行の威權も身分も打忘れて、たゞ敎を棄させる事計に腐心して居つたのであります。然し司祭は「人間の作つた法律も、天主樣の掟に背くやうな場合には、吾等は如何しても之に從ふ事が出來ぬ」と應へられ、尚今後其麼無益な事を繰返さぬやうにと申されました。

二月廿二日（舊曆の寛永元年正月四日）復も一同を牢獄から出して、悉く裸体にしたうへ以前の穴の所に連行き、杭に縛つたまゝ氷に浸して捨置ました。夕方になりますと氷は厚き氷となつて五體を刺すやうになり、寒い風は颯々と吹いて面を斬られるやうになりました。時にまた奉行が司祭の傍に寄つて懇に其苦痛に同情して早く敎を棄てよと勸めました。然し司祭は之に耳も藉さず一同の樣子を見られますと、此時聖徒は死期の近づいて來たのを悟り、互くに別を告げ、早く天主樣の尊前に行つた者が、跡に殘る兄弟達の爲に祈つて、苦痛を辛抱する聖寵を請ひ奉らんと約束して居られますから、司祭も言葉を勵まして聖徒に向ひ「痛苦も今暫くなれば能く忍ばれよ」と諭されました、が程なくレオ權右衛門が、耶蘇マリアの聖名を唱へて眠られ、次にアントニオ佐左衛門、マチヤス忠彌の兩人も死なられました。此マチヤス忠彌の最後を遂げられた後、司祭は少しも其事を知られませず、未だ生て居れると思ふて其名を呼れました所が、死骸が聲を揚て、「マチヤスは最早息絶ました」と答たさうであります。續いて誰彼と數十名の聖徒が死なられ、アンデレア仁右衛門、アテオ孫兵衛の兩人が息絶て後、マチヤス藤右衛門が將に此世を逝らんとする時、聖師に向ひ、「嬰父樣左樣ならお先へ」と申されました。其時デダコ師は「幸なる者よ、祝せられた者よ」と仰せられましたが、最早親愛なる信者は皆自分より先に天國に昇られましたので、厚く天主樣に感謝せられ、絶にず祈つて居られましたが、夜半の十二時頃に遂に聖主基督の御名に因て昇天せられました。時に御年四十六でありました。

多くの見物人に交つて居つた信者は、聖師の死なられ迄此所に居ましたが、役人等は此等の死骸を無慘にも細かく斬つて川中に投棄ましたので、辛じて聖師の首と他の四名の首とを拾ふ事が出來ました。

皆さんは何卒此お話を能く記憶られて、日本に渡來れた宣教師が斯く多の艱苦を嘗めつゝ、身を棄てゝ聖敎を傳へ弘められた恩を謝し、また此勇氣ある日本殉敎者の功績によつて、皆さんは幸にも今日公に自由に信仰する事が出來得るやうになつたのですから、此等先祖に對しても敎訓を厭ひ、誡律を破るといふやうな事をせず、一層熱心に天主樣に奉事ねばなりませぬ。ろれで今日此等福者の御傳達を以て勇氣を養ふやう、又特に日本未信者が一日も早く歸依することを、天主樣に願ひなさるやう、切にお勸めいたします。

二月廿二日「2」（降生後千二百四十九年生　同千二百九十七年死）

伏見天皇時代

コルトナの聖女マルガリタ痛悔者

（靈父）今から痛悔女、聖マルガリタのお話を致しませう。（此お方は伊多利國のコルトナと云ふ町で罪を悔ひ乍ら餘生を送られ、御墓も其町にありますので、コルトナの聖女マルガリタと申して他のマルガリタ聖女と區別してあります）。

今から約ろ七百年前に、伊多利國にお生れになりました。親御は相當な百姓でありました、が世間によくある通り一人娘のことゝて蝶よ花よと、可愛がり、情愛にのみ溺れて、別に信仰や行爲について、良き教育をさづけませんでした。マルガリタも幸か不幸か標致が良い爲に愛らしい年頃から人々に誘惑はれて、髪を飾り、衣服をつくろひ、たゞ悪い遊びや、浮きたる事なぞするのを、此上もない樂み喜びとして居られました。

兩親も亦可愛い娘の事とて、之を嚴しく咎めもせずたゞ爲すがまゝに放任て置きましたから、マルガリタは益々增長して、年を重ねるに從ふて、次第に不品行となられました。

其中に母親が死なりましたので、父親は後妻を迎へました。此後妻はまた愛憐の心が無い人でありましたから、何角につけてマルガリタを憎み苦めますので、マルガリタも其都度之に逆ひ、毎時口論の絶ゆる間がありませんでしたが、終に氣鬱にも生家を出られました。

何地を目的といふ事もなく家出せられたマルガリタは、是といふ仕事をして生活の道を立てる事も御存でなかつたから、差當り途方に暮れて居られました、が間もなく人々の勸誘によつて、我容顏の美しさに誘り惑れにも人の妾となられました。素より良からぬ習慣がありましたものですから、一層虚榮心が甚くなり、多くの人々から金錢を貪つて、立派な服裝を爲し、寶石で髪を飾り、春は花見、秋は月見と思ふまゝに逸樂に耽り、贅澤な暮をして居られました。

然し村人等はマルガリタの素性をよく知つて居りますから、親を棄てゝ放肆三昧の舉動に、みな爪彈きして誰一人これを嘲弄らぬ者がありませんでした。マルガリタも亦さすがに、女心の、末路の恐ろしも事などが氣に懸り、折々聖堂の側や、寂寥しい所などを通る時には、良心の刺戟が起つて、此處で祈禱を爲たいとか、此處は罪の償ひをするに適當な場所であるとかといふ工合に幾分か我身の賤劣しい行爲を耻ぢ、天主樣の義しき罰を怖れて、善に遷る氣はありましたが、俳しろの美しい萌しも直に矢の如くに過ぎ去つて了うので、良からぬ事と知りつゝ、墮落の淵にふかく沈んで了はれました。然しかゝる中にも唯一つ感心なのはつとめて貧しき者を哀み、金品を施與して居られた事であります。

マルガリタは斯して、榮華の夢も醒めやらず、改心の勇氣もなく、九年の間不品行に身を持くづし、罪を重ねて居られましたが、或日自分の許に來る某若者が大切に飼ふて居る犬が奇妙な啼き聲をして入つて來ました。マルガリタは不審に思ふていろ〳〵と賺しましたが、犬はます〳〵啼き騷ぎ果てはマルガリタの裾を咬へて、何れへか導くやうに爲ますので、怪みながら曳かるゝまゝに家を出られました。スルと犬はいろいそと喜び進んで、やがて森の中に入り、大きな樹の下に連れて行きました。マルガリタは近づいて視ますとコハ如何に今迄自分が特に墮落させて居つた青年の死骸で、此犬の主でありました。顏は傷つき、体は腐れ爛れ、蛆蟲が生いて悪しき臭が鼻を衝くといふ次第で昨日まで美しかつた青年も、實に二度とは見られぬ程、無慘な最後を遂げて居りました。之を見られたマルガリタは身体が慄い戰き、思はずアッと叫んで其場に氣絶せられました。

夜は深々と次第に更けて來ました。やがて樹の間漏

る風の音と、梢を拂ふ露の雫に不圖正氣づかれたマルガリタは、草の上に倒れたまゝ、良久らく茫然として居られましたが、側にある死骸をつく〴〵と眺めて、熱い血のやうな涙をハラ〳〵と流しながら「嗚呼人の一生はまことに果敢ないものである。昨日まで我許に通ふて居つた彼の青年が、今此のやうに醜しく恐ろしい姿と變つた、想へば若いとか美しいなどゝいふ事は、ホンの一時である、自分も早かれ晩かれ、天主樣の尊前に於て嚴しき審判を受け、之よりも恐ろしい地獄の火に投入れられるのである」と憶ひ起すと同時に、今更ながら我身の淺ましい所業に愛想がつきて、腸も斷つばかりの苦痛を感じられました。ろれで今日唯今より全然行爲を改め、今迄の罪惡の償ひを爲ませうと、決心して起上られました。此時仰いで天を眺めますと、廣く際限なき蒼空に、一輪の月が清く美しい、光を放つて居りました。

聖女マルガリタが死を見て改心の業を捨てる

聖女マルガリタは、此の立派な改心の動機を取外しませんでした。即ち急ぎ我住家に歸つて家財や器具を打捨て、早速父の許に馳せ歸られました。ろして父の膝下に泣伏して、今日迄の一伍一什の物語を、落もなく話して、改悛の情を打明け、厚く不孝の罪をお詫せられましたところが父親も陰ながら案じて居つた娘の事ではあり、且は我養育かたの惡かつた爲に、起つた事であるから別に怒る事もならず、其痛悔の樣を見て、喜んで家に入る事を許しました。時に聖女は二十五歳でありました。

（俊子）今度は繼母に嫌はれなかつたのですか。

（靈父）否ゝ後にまた繼母の爲に、ひどい苦痛に遭はされたのです。聖女は家に還つて後は、毎日の如うに犯した罪を悔んで、大ひに嘆き悲しみ、故ら粗末な衣服を着け、粗末な食物を撰び、なほ其時代に國法に背いた重き罪人は、皆頸に繩をかけられて居りましたので聖女も天主樣に對して重き罪人であると想ひ、躬ら其頸に長い荒繩を纏ひ、ろして朝も夕も祈禱と苦行をして、唯々罪科の償ひばかりを努めて居られました。或日も其姿のまゝで聖堂に行き、人々の面前で公けに自分の罪を白狀して、ろの赦しを願はれました。然し人々は其改心を眞とせず、却て今迄の惡い行爲を嘲弄つて、誰も相手に爲ませんでした。繼母も亦聖女の擧動を見て、此は不品行の爲に、心亂れて狂氣になつたのであらう。斯樣な娘か居ると家の名を汚す」と散々惡しざまに言ひ罵り、父に勸めて遂に聖女を放逐しました。

あはれ聖女マルガリタは、折角心を改めて痛悔し、償ひまでも始めましたが、人々からは嘲弄られ、尙は父母にまでも見棄てられるやうになりまして、誰に倚縋る事も出來ず、住むに家なく、口にする食物も得ることが出來ぬやうになりました。乃で再び途方に暮れ一時は「あゝ斯樣に改心して善業を爲やうとしても、同じく人々に誹り罵られるならば、一層の事此美しき容貌を幸ひに、今一度世間に出て前の通り思ふまゝに安樂な生活を爲やうかと、自暴自棄の心も起りました、が否ゝ〳〵人々に賞められるために改心したのではない。全く天主樣に對して濟まぬと思ふたからである。で一時の樂のために地獄に墮される事は、何しても忍ぶ事は出來ぬと、思ひ返されました。併し復しても生活の困難な事を慮へたり、未來の事を想ふたり、兎や角と千々に思ひ亂れて、夜の眼も合はさず苦慮して居

られましたが、終に「是は我身の犯せし罪悪は、あまりに重く多い故であらう、決して人々や親を怨む事が出來ない。宜し此上はコルトナ町に往つて、靈父を訪ね、其御意見に從ひませう」と、途中さま〳〵の苦を嘗めて、漸くコルトナの町に着かれました。ろれで早速フランシスコ會の靈父にお面にかゝつて、我身の犯せし罪悪を逐一告解し「如何かして救ふて下さい」と只管に願ひ、いろ〳〵靈父から意見を承いて、此院を立出でられました。

此時町の貴婦人が二人、相伴ふて散歩して居りますと、途中に黒き衣を纏けた若い婦人が佇立んで居りますので、何心なく覗きますと、世にも稀な美しい容貌でありますが、何か痛く愁んで居る樣子でしたから、直に側によつて「貴女は何うなされましたのですか」と優しく尋ねました。此黒衣の婦人は卽ち聖女マルガリタでありました。其親切な言葉と動作に絆されましたから、身の來歷を詳さに打明けて後「私は斯樣な大罪人であります。ろれで今から靈父のお諭に從ふて、償を爲さんとするのであります」と答へられました。

此二人の貴婦人は熱心な公教信者でありましたから、或は驚き或は喜び、涙を以て其來歷を聽いて居られましたが、此憫れな聖女の改心に力を添へんものと、二人相談の上、自分等の立派な家に住居をさせんとしましたが、聖女は之を斷り其入口の物置のやうな小舍に入り、貧しい生活を爲ながら、新禱と苦行とを始められました。

水も濁つて居る間は、月の影を宿す事が出來ません。聖女も今迄は罪に罪を重ね、良心は穢れ腐つて居りましたから、慈愛ふかき天主樣の聖寵を宿す所もありませんでしたが、今は諸々の邪の念ひを去つて、深く痛悔し、唯々救靈の爲に、餘念なく償の業を勵むやうになられましたから、聖寵を蒙て大ひに慰藉を得られるやうになりました。然し人の心は弱く、稍もすれば傲慢になり易いもので、聖女も折々は、我が顏の美しい爲に、いろ〳〵の誘惑が起る事もありました。ろれで終には此顏の爲に墮落しました。他人を迷はしたのであると思ふて、切石を以て、其麗しき額を引掻き傷つけましたから、忽ち醜き姿に變りました。また此眼も同じく誘ひの便となつたのであると、いつも泣いて居られましたが、後には血の涙を流すやうになられました。斯して誘惑の原を防いだ上、尙も繩の鞭を作つて、自ら我身を打ち悪い念を絶つやうに努められました。

後靈父の勸めに從ふて、深く罪を糺明し改めて告解の秘蹟を受け、赦免を得て聖體を領けられました。此時の聖女の嬉しさ喜ばしさは如何でありましたでせうか、到底筆にも言語にも盡せぬほどでありました。天主樣の愛憐の深い事を痛く感ぜられ、それに報ゆる爲に、益々償ひの必要を感じられました。ろして夫から後は毎日聖体を領けられました、が時々悪魔の妨げによつて「私の如な大罪人が、かく毎日聖體を拜領するのは什麼であらうか、或は聖体を瀆すのではあるまいか、といふやうな思念が起る事がありました。斯いふ考へは悪魔の誘ひであると曉られてから、一層熱心に聖躰を崇め敬ふやうになられました。又聖女は特に罪人の改心の爲めと、煉獄に苦む靈魂の爲に、熱心に新禱をして居られました。（支那の「聖人言行」といふ書には、聖女の生の母親が煉獄に在られましたが、聖女の新の功德によつて、纔か十年にして天國に昇られた、といふ事が記してあります）。

其中に聖女の苦行の風聞が、漸次高くなりました。スルと悪魔は、また之によつて傲慢の心を起させんものと、いろ〳〵に誘ひました。度々言ふ事ですが、公教信者に取つては、殊に此の傲慢といふ事を避けねばなりませぬ。これ程信仰心を害し危ふくするものが無いので、如何なる善人でも一度此悪い萌が起ると、すぐに之を除くやうに注意しませぬと、知らず識らずの間に、信仰を失ふて了うのであります。ろれで聖女マルガリタも、日頃この害を防がうと、努めて居られま

したから、人々から聖女であるとか、善人であるとかいふ、良き評判が耳に入りますと、多少嬉しいやうな感じが起りますが、すぐに之は悪魔の魔であると曉り、急ぎ公けに人々の面前に出て、以前の罪悪を包まず告げ、斯やうに私は多くの人々を欺き、躓かせ、悪い手本を與へた者であつて、此上もない大悪人であります」と陳べ、わざと嘲弄を招いて、傲慢の情に打克つやうに爲られました。尚は又一層ひどい償をする決心でありましたが、萬事靈父の意見に從ふて居られたものですから、假令自分が良いと思ふ事でも、一々靈父の指圖を受けて居られました。

聖女マルガリタは、斯くの如く始めは人々の氣に入らんがために勤めて、あらゆる肉身の慾を恣まゝに爲して居られましたが、一朝人の生命の行末の運命を悟られてからは、全然生れ替つたやうに、二十三年の長い星霜、少しも倦まず怠らず、天主様の聖冒にのみ從ひ、具に難業苦行をして、汚れた靈魂を清める事に力を盡されました。それで後には惡魔の誘惑もなくなり、邪惡の念慮も起らず、次第に聖寵に照らされて、いつも心の中に眞正の平和安心を得、又改心した罪人の爲に無上の勵みともなり、熱心な信者の爲に、よき慰めとなられました。

後天主様の默示を蒙けて、御自分の死期が近づいた事を曉られましたので、心ひろかに其機を待ち望んで居られましたが、間もなく病氣に罹られました。それで聖体の終油の秘蹟を領けられ、遂に多くの功績を積んで天國に昇られました。御年は四十八歳でありました。

聖女が昇天せられて後、いろ〳〵の奇蹟がありました、即ち生前罪を深く悔ひて、人々の誹謗嘲弄をも顧みず、祈禱と苦行とを以て、償ひを爲されましたのを、天主様は深く嘉されたといふ事を吾々にお示しになつたのであります。御死後は絶ねず芳き香がしまして、今日でも此コルトナ町の大天主堂の中に大切に保存されてあります。千六百二十四年に福女の位に登られ、千七百二十八年に聖女の列に加へられました。

（倣子）本當に身を飾る事や、虚榮心などは、墮落に導く原因となりますな、……私等も萬一過つて、罪に陷るやうな事がありましても、失望せず直に謙遜の心を起して、祈禱と苦行を爲し、熱心に罪の償ひを致しますと、また救靈る事も出來るのですな。

（靈父）然ですとも、完全な痛悔は何よりも必要であります、然し一度悔ひ改めて、少し善き事でもすると、早や我は善人になつたとか、人々の良き風聞を望ひといふやうな心が起りますと、折角の善行も之が爲に、天主様の御手を離れるやうになりますから、いつも謙遜の心を以て、人に褒められるよりも、却て人々より嘲笑られる事を望むやうにならねばなりませぬ。それで皆さんは何卒、此聖女のよき心懸に倣ひ、其御傳達を以て、之から後は人々の氣に入るやうに努めるよりも、何事も天主様の聖冒に從ひ、聖主基督を深く愛する恩寵を得るやうにお願ひなさい。

二月廿三日「1」（降生後千七百年生　同千七十二年死）

後三條天皇時代

聖ペトロ、ダミアノ司教博士

（靈父）今日から約り百九年前に、伊多利國のヲベンナと云ふ町に、有名い聖ペトロ、ダミアノといふ司教様が居られました。丁度今日は其祝日に當るのであります。

聖ダミアノは、効ない時は誠に不幸な者でありました。親御はあまり裕かな生活でない所へ、子供が六人もありました。その上また嬰兒が產れるといふので、よし生れても之を養ひ育てる事が出來ぬと、兩親を始め兄姉等までも、此ダミアノの出產れるのを厭がつて居りましたが、七番目の末の子としてダミアノが生れました。不幸にも生れながらに病身でありましたから一層ひどく憎み嫌はれ、早く死ねよがしといふやうな虐き遇ひをせられました。それで性來弱い身体もだん〳〵と痩せ衰へて、今にも生命の危ふいといふ如な時

が度々ありました。母親は天主樣に此立派な賚を與へられた事を感謝せず、却て其全能の攝理を疑ひ呟き、終には失望して、自分を死なして下さいとまで祈る事もあつたのです。

(俊子)實に非道い人でしたな。この罪なき嬰兒のために、自分の死を祈るとは、如何した非道い親でしたでせう。

(靈父)然です、寔に無分別の所業でありました、が或日近邊に住んで居る信者の婦人が訪ねて來て、哀れなる此小兒が母乳も與へられず、半死半生の悲慘き有樣になつて、泣入つて居るのを見て直樣抱き上げ、母親に向つて、「貴女は何故この兒を、斯んなに無慈悲に爲られるのでありますか。禽獸でさへも、其子を愛しむではありませんか、況して天主樣から授けられた此立派な小兒を、かく虐くあしらはれるのは、とりも直さず天主樣の聖旨に背く大なる罪惡ではありませんか、また此兒とても後には家族のために、如何程名譽になる事を爲すかも知れませんのに……と」と、言葉を竭して懇ろに母親を慰め諭しました。ところが今迄失望の爲に心亂れて、死ねよがしに打すてゝ居つた無情の母親も、此道理ある訓に、成程と合點がついて、深く其悪い行爲を愧入り、其時から溫かい情を以て此小兒を養ひ育てるやうになりました。

哀れなるダミアノも、茲に始めて父母の愛情あつき恩惠を受けるやうになりましたが、十歲前後に兩親に死別れ、復も不幸　孤兒となりました。無慈悲な兄の世話を受けねばならぬやうになりました、此兄は相當贅澤に生活して居るにも關らず、何故かダミアノを厄介者の如くに思ふて、粗末な衣服を着せ、粗末な食物を與へ、奴隸の如く酷く追ひ使ふて、日々豚の番をさせて居りました。ろして穢汚しき物置に寢かせ些少の黑パンを投げ與へる丈で、決して他の家族の者等と、寢食を俱にする事を許しませんでした。

(次郎)本當に可哀さうですな。失望して居つたでせう。

(靈父)否ね、ダミアノは時々人知れず其身の不幸を嘆いてひろかに泣いて居りましたが、性來智慧の勝れた方でありますから、いつも天主樣に祈つて、何事も默つて忍んで居られました。

一日ダミアノは、毎時の通り朝早くから、豚をつれて野外に出ました、ところが多くの豚は、嬉しさうに彼方此方に走り行つて、腹の膨るゝまで野草を喰ふて居ります。之を視たダミアノは急に空腹を覺ねてうら悲しくなり、「あゝ獸類でさへあのやうに澤山食物があるのに、私は食物がない……」と獨言いひつゝ泣いて居られました。

(俊子)丁度聖書の中にある、彼の放蕩息子が難義した時に考へたやうな事を、思ひ起したのですな。

(靈父)然うです。併し彼の放蕩息子は、自分の罪の爲に苦んだのでありますが、ダミアノは之と反對に、天主樣から苦痛を耐へる力を、養ふ恩惠を與へて頂いたのであります。此時ダミアノは不計自分の側に、何か

光る物を見出しましたので、不審に思ひ乍らそ之を拾ひ取られますと、今迄あまり手に觸れた事もない、立派な銀貨でなりました。乃で大ひに喜んで、すぐに之を以てパンと些少の獸肉を買ひませうと、空腹を感じて居られた折柄でしたから、まことに無理からぬ望を起されたのですが、直にまた、否々、此は我物ではなく、誰か遺失したに相違ない、早く其主に返しませうと、正直な心になつて、誰彼と多數の人々に一々尋ねられました、が別に誰も遺主であると云ふ者がなく、少額の金故汝のものにせよと、却て笑はれました。られでダミアノも詮方なく、其銀貨を得る事になりましたが、感心にも是で食事をして一時の快樂を貪り、口腹を滿たすよりも、と思ふて、此僅かの金錢を携へて靈父の許に行き、何卒之を以て我が亡き父母の爲に、彌撒を行ふて下さいと願はれました。此時靈父は、兄なる人が財產を讓受けながら、一度も兩親の爲に、斯いふ善き業を爲た事がないのに、効ないダミアノは、

苦しき中から己れの食慾を制へてまでも、父母の爲に祈禱を願ふ、といふ芳き志に深く感動せられました。

彼是する中に、遂に司祭となつて、長く國を離れて居られた一人の兄が、此度此ラベンナ町の教會を受持つやうになりました。それで此町に歸られましたが、彼の可哀さうな弟ダミアノの境遇を聞き、また其感心な行爲などを知つて、大ひに驚き且つ喜ばれ、早速手許に引取つて厚く世話を爲し、充分に教育を爲されました。

今迄種々を難義苦勞を嘗めて、朝に夕にたゞ豚の番をして居られたダミアノは、此茲に優曇華の花咲く春に回りあふて、圖らずも情あつき兄の庇蔭によつて、學校へ通ふ事となりました。此ダミアノは今迄たゞペトロと云ふ名であつたのですが、此兄が親の如に親切に世話して下さるので、之を感謝する爲に、兄のダミアノと云ふ名を附加へてペトロ、ダミアノといふ名を用ゐられる樣になりました。

ダミアノは學校に入られまして後は、素より智慧の勝れた御方であり、又正直に教師の訓誡を守り、他の小兒等よりも一層熱心に勉强せられましたから、學問は申すに及ばず、善德に於てもまことに成績が好く、數年の後には他の生徒等が遠く及ばぬ程になられました、それで教師等も皆ダミアノについては、末頼母敷思ふて居りました。

ダミアノは學校を卒業せられて後も、種々と勉强を爲られましたが、後名高い文章家となられ、また辯士となられました。而して其れによつて多くの財產を作られました。所が人々は其高き噂を聞傳へて、門弟にならんと、續々頼に來ますので、ダミアノは知らず識らず傲慢と贅澤の方に誘はれるやうになられました。それで始の間はつとめて此悪い誘惑を防いで居られましたが、後には悪い事と知りながらも、肉慾の誘惑にかゝつて、專ら其方に心を惹かれるやうになりました。ダミアノは如何にかして之に打克たうと、雪が降つて寒い日に、氷つて居る水の中に入り、身を切るやうな苦痛を忍んで、祈禱をして終に其邪念を防ぐ事が出來ました。それで厚く天主樣に感謝し、其後も悪い思念が起る毎に、斯いふやうに痛く肉身を苦めて居られました。

ある日、祈の後例の如く默想して居られましたが、「何時までも持つ事が出來ない現世の名譽とか財產は、我々に取つて何の利益になるであろうか、たゞ罪悪に導く便となるばかりである」と深く救靈の大切な事を悟られたものですから、此上は一日も早く、我身を全く天主樣に獻げ、永遠限りなき寶を得んと決心せられました。それで折角の財產も悉皆兄姉に配けて、聖ロームアルド(二月七日)の設立られた。カマルドール會の修道院に入り、其院で行者の生活を爲られる事となりました。

(次郎)前に虐く苦められた兄にも、其お金を配けられたのですか。

(靈父)然です、聖人方はいつも恩を以て讐を返す、といふ爲方をせられるのでありますから、其兄にも快よく配けられました。聖ダミアノは世を避けて修道院に入られた後は、唯一心に天主樣に事へ、熱心に祈禱と苦行をして、他の行者等の良き摸範となられました。又斯して身を修め德を積む傍、數年の間聖書の研究をなされました。修院長は聖人の智識と德行に優れて居られる事を見て、折々觀教の爲に他の修院へ遣はし、また自分の後繼者として聖人をお選びになりました。其中にダミアノ聖人の良き風聞は、ます〳〵高く弘まり、遂に國王の耳に達しました。それで國王は聖人を宮中に召抱へんと、其旨申し傳へられましたが、聖人は人知れぬ生活を望んで居られましたから、堅く御辭退をせられました。後教父陛下から司教の座を授けられました。

丁度其頃は信者の風儀はひどく亂れて、殊に高き位階に居る人々の中にも、教靈の大切な事を忘れ、現世

の逸樂に耽り、多の人々に悪い手本を示すやうな者が多數ありました。それで時の教父陛下は度々直接に訓諭になりましたが、一向其効がありませんでした。乃で教父陛下はダミアノ聖人をお選びになりました。彼等の改悛に就て種々御相談がありました。

ダミアノ聖人は其思召を受けて大に感じられましたから、自ら進んで彼等を改心させんと誓ひ、日頃修めた該博き學問と、高き德行を以て、聖き職務に在る人々の、冷た信仰を温めんと、筆に口に力を盡し、或時は嚴しく或時は懇ろに、眞の道を說き明して、終に迷ふて居る者は勿論、墮落の深淵に沈んで居る者までも歸正らすといふやうに、立派な結果を得られました。

又此時獨逸の國王ヘンリー第四世も、信者でありながら皇后を離緣せんとして居られましたから、聖人は教父陛下の御使となつて獨逸國に行かれ、親しく國王に謁見へて、「離緣は公教信者として爲すまじき事である」と熱心に說き諫めて、つひに之を思ひ止まらす事が出來ました。尙又佛蘭西國に於ても、信者の中にいろ〳〵と軋轢がありましたが、聖人は行いて甘く其是非曲直を審かれ、再び紛亂れぬやう其根原を絕たれました。其折皇太后は重き御病氣でしたが、聖人の來られたのを僥倖に、一生涯の罪惡を告白せられて、最も安らかな最後を遂げられました。

斯の如く聖ダミアノは、幼ない時は寔に不幸な境遇に居られましたが、其間の苦難は却て後の試金石となつて、かく公教の爲に力を盡されるやうになられたのであります。うして尙此後も永く〳〵と、教會の爲に活動かれ、多の功績を樹てられましたが、千七十二年御年六十五歲の時に、病氣に罹られ、多の弟子に慰められまして、祈つゝ遂に安樂に此世を逝られました、其多〳〵の書簡や演說の草稿等が、今日も尙大切に保存されてあります。其文章の中には、位階の高い低いに係らず、信者は皆等しく教會に肆屬がはねばならぬ」といふ事を頻に說かれてあります、而して其遺物に據つて、此聖人の教理に精通しく、學識の深い事は慥く計で、遂に教會の博士の中に加へられたのであります。

うれで皆さんは、今日から此聖人の傳達を以て、此世界に於て天主樣の代理者として、吾等の上に凡ての權利を持つて居られる教會の首領に對しては、充分の尊敬と從順を竭し、從令之が爲に多少の苦痛がありましても、能く耐へ忍んで終りまで之を完ふする勇氣を與へられる事を願はねばなりませぬ。

二月廿三日「2」(降生後三百七年死)

聖セレノ粲駝師致命

應神天皇時代

(墨父)降生後二百八十年頃、ギリシヤ國に聖セレノと云ふお方がありました。少壯時に故郷を出て、遠く距たつて居るシルミオンと云ふ町に往かれました。後其町外の閑靜な所の土地を購ふて、草花を植ゑ野菜を作つて、生計を營てゝ居られました。

丁度其頃は何地も、基督教信者に對して大迫害のあつた時でしたから、此セレノは他の人々とは交際もせず、獨童貞を守つて身を愼み、天主樣を讃美して、清く平穩な日を送つて居られました。それで人々は誰も、セレノが熱心な基督教信者であるといふ事を少しも知りませんでした。

太陽が西の端山に入らんする一日の夕暮、セレノは獨花園の中で餘念なく、草花の手入を爲て居られました。ところが其處へ見馴ぬ若く美しい婦人が、唯一人

此庭園に入つて來て、勝手に彼方此方と、ろゝろ歩きをして居ります。セレノが其樣子を視られますと、服裝といひ態度といひ、町中でも餘程立派な家の婦女であるが、今頃何の爲に來たのであらうか、と不審に思はれましたので、來られた理由を尋ねられました。スルと其婦人は嫣然と笑を含んで、「何、別に用事はないのですが、此處へ通りかゝりますと、貴園の花卉がまことに美事に咲いて、芳き薫が放て居りますので、ツイ入つて來ましたのです」と何氣なく答へました。

セレノは、其言葉と動作とによつて、何か曖る所があつたと見ぬきまして、すぐ容を改め言葉を正しくして、「今時分は貴女のやうな立派な身分のお方が、外出なさる時刻ではありますまい、全く散歩といふ口託を以て、私を誘ふ目的で來られたのでありませう、私は決して貴女の望に從ふやうな者ではありませんから、何卒早く此園を出て下さい」と申されました。ろして尙言葉を添へて、「何卒此から後は謹慎を守つて、再び其樣な思念を起さないやうに爲なさい」と誡められました。スルと此婦人は自分の惡い念を覩破られた計でなく、誡めをでも聞かされましたので、直樣此園を出て家に還りました、が小人の常として、自分の惡い念を意思を耻ぢないばかりでなく、却て不滿足の心を起し、覓に復讐を爲やうといふ、怖ろしい念を抱きました。

聖セレノ誘惑に來し婦人を誡め給ふ

此婦人は近衛大將の妻でありまして、良人が皇帝の側に勤めて居つて、永く家に歸りませんから、手紙を認めて、「セレノと云ふ者が、自分に對して罪を犯させやうと爲ました」、と巧く揑造して、言ひ贈りました。何にも知らぬ良人の大將は、妻の手紙を披き見て大ひに驚き且怒りまして、すぐに皇帝に向つて、「臣は父母に別れ、妻に離れ、故郷を後にして唯陛下の爲に、一身を獻げて居ります、然るに惡漢が臣の不在を幸として、臣の妻を辱めやうと致します、洵に家の耻辱ともなりますから、何卒何分の御成敗を願ひます」と奏上げました。乃で皇帝は親ら筆を執られて、シルミオン町の總督に寄て、「嚴しく詮議して、其罪人を法に處せよ」との親書を認められて、之を大將に渡されました。

大將は一ヶ月ばかりの賜暇を請ひ、急いで故郷に歸つて來ました。ろして總督に會ふて、皇帝の親書を示しましたから、總督はすぐさま兵卒を遣して、セレノを捕へ、法庭に入れて審問にかゝりました。

總督「一体汝は何處で何業して、居るのか。

セレノ「私は此町外の者で、花を植る菜を作つて生計を營んで居ります。

總督「汝は何故身分の高き人の夫人に對して、妄りに無禮を加へたか。

セレノ「私は未だ一度も婦女を辱めた覺がありませぬ、貴官は如何して左樣な事を仰せられるのですか。

と、却て反對に總督に尋ねられました。スルと總督は何事も答へず、「彼を强く鞭てよ」と側の役人に命じました。

此時セレノは、總督の言葉の端々について、彼か是かといろ〳〵に考へて居る中に、不圖思ひ浮んだ事がありましたので、總督に向つて、「私は實際今迄他人に過をかけ、他人を辱めた事がありませぬ、が此處に唯一つ思ひ當る事があります。ろは餘の事ではありませぬ、或日の黃昏時に、私が獨り庭で花の手入をして

居ます所へ、貴婦人と思はれるやうな方が、唯一人花園に入つて來て、彼方此方と歩いて居ますので、私は何か用事でもあるのかと、來られた理由を尋ねました。スルと唯散歩に來たのであると答へられましたが、其擧動が何となく良くありませんので、貴女のやうな身分の高い方が、今時分一人で此所に來られるのは良くありませぬ、と申して、其婦人を訓し誡めた事がありました。貴官のお疑は或は此事の誤りではありませんか」と、少しの淀みなく、嚴然と曩日の事實を有のまゝに陳述られました。

ところがセレノを訴へ出た彼の大將は、總督の傍に居つて、最前から疑とセレノの樣子を視て居りましたが、其言葉といひ態度といひ、却々他人に害を加へるやうな人柄でありませんから、是は我が妻の方が惡いのであるといふ事を、直に曉りました。それで此時總督に向つて、「此一件は何かの間違でありませう、此人は決して罪人ではありませぬ、私は訴を取消します」と云ひながら、夫人に欺された事を深く愧ぢ急いで歸りました。

總督も亦セレノの風丰を見、すぐれた德の人であると思ひ、今の世にかくの如く誘惑にあふても、罪惡を犯さぬのみならず、却て其婦人を訓すといふやうな人は却々珍らしい、と痛く感心して居る中に、不圖氣付きましたのは、今迄彼の基督教徒に對しては、酷い處罰をして血を流し生命を取り、隅々までも搜索して苦めたから、今は信者も其跡を絶つて居る筈である、が萬一此セレノは基督教信者ではなからうか、といふ感じが起りました。然しまた否々彼の酷い迫害を逃れて居る事が出來ない、此人は必ず信者でなくして德の高い人である、と心の中に問ひつ答へつ只管セレノの行爲に就て感動して居りました、が稍あつて後

總督は何氣なくセレノに向つて「汝の宗教は何ですか」と丁寧に問ひました、所がセレノは少しも隱さず、「私は基督教信者であります」と沈着いて容へられました。スルと總督は驚いて、「何？基督教信者、今迄余は皇帝の詔勅によつて、信者を迫め苦め、殆んど其跡を絶つたと思ふて居つたが、汝は何處に隱れて居つたか、また加何して國の神々に供物を爲ずに濟む事が出來たか」と、不審の眉を顰めて訊ねました。

此時聖セレノは覺悟の体で、天主樣は今日迄私を殘して下さつたのであります、私は最早殉教の特恩を蒙るに足らぬ者であると思ふて居りました、が幸にも今日御愛憐によつて、大なる特恩を蒙る事となりました、あゝ實に愉快です、此上は諸聖人の列に加へられる爲に、假令如何なる苦痛に遭はされましても、喜んで生命を獻げます」と、其處に跪いて、感謝の祈禱を唱へられました。總督はセレノの決心を見て、其死を惜みましたが、「國法に禁じてある基督教を信仰する以上は、死刑に處す」といふ宣告を下し、役人に命令て其場ですぐに首級を斬落させました。斯の如くにして聖セレノは致命の冠を得られたのであります。時に降

生後三百七年でありました。

多くの人々の中には、惡い誘惑にかつゝた時、すぐに之を防ぐ事に努められますが、やゝもすると誘ふた人に不滿足を與へるとか、或は後難を恐れるとかいふ、些細な事情の爲に遂に罪を犯す人があります、が此は皆臆病者であります。これで皆さんもかゝる場合には、此聖人に倣ふて、縱令一命を拋つても誘惑を避け、罪惡に陷らぬといふ勇氣を御有ちなさい。また此聖人の如く己の信仰を表白はすべき場合には、恐れず憚らず、之を公に顯はす事が出來るやう、其御恩寵を願ひなさい。

二月廿三日「3」

（降生後八百六十年死）
清和天皇時代

聖ラザロ畫家

（靈父）今回は畫家　聖ラザロ修道者のお話を爲ませう。

此聖人は、今から約そ千百年前に、小亞細亞の高加索と云ふ地にお生れになりましたが。後にコンスタンチノーブルといふ都の修道院に入つて、其院で身を修め、德を積み、厚く天主樣に事へて居られました。

丁度此時分は、聖テオドラ皇后（二月十二日）の御時代で、既に御承知の通に、彼のエノクラスと云ふ異端者が、公敎會の聖像や聖影に就て大なる謬の說を起て皇帝テオフィロも亦此謬說を助けて、多數の聖像を壞ち聖影を破り棄てた時でありました。ろれで此修院の行者達は、此異端者の爲に迷はされて居る者の爲め、また破棄された不足を補ひ、信者に對して倍々熱に、聖影聖像を尊敬する念慮を起させる爲に、祈禱苦行の外日課として、特に聖影を畫いて居られました。ろれで聖ラザロも此修院で、祈禱默想の傍ら他の行者達と共に、熱心に繪畫の技を勵まれましたが、後には德行の名聲が高いばかりではなく、其畫かれた聖影も非常に名高くなりました。

其中に皇帝は聖ラザロの名高い畫家であるといふ事を知られましたから、如何にかしてラザロを異端に引入れ、異端者の爲に利益となる畫を描かさうと思され終に聖ラザロを捕へて宮殿に入れました。ろして先づ其信仰を失はさせんと、聖像に向つて唾棄し、之を足にて踏めよと命ぜられました。然し聖人は其無理非道な事を說いて命令に從ひませんでした。ろれで皇帝は自分の目論見が畫餅になりましたので、大層怒つて散々に聖人を鞭うち、蟲の呼吸となるまで酷く苦めた上汚なき溝の中に投込ませました。

所が、此事を聞知つた信者達はひそかに、宮殿の外に行つて、聖人を溝の中より救出し種々と介抱しましたから、間もなく以前の身体となられました。聖人は九死の中に一生を得られたことを、深く天主樣に感謝し、傷痍が治つて後は、一層熱心に聖會の爲に、活動いて居られました。

スルと此事が復皇帝の耳に達しましたので、聖人は再び捕へられました。ろして今回はさま〳〵に苦められた上、筆を執る事が出來ぬやう、燒けて居る眞赤な鐵板を以て、掌の肉を皆焼かれ、ろのまゝ牢獄の中に入られました。然し後に皇后聖テオドラの願に依つて特に放免される事となりましたので、遠く距つて居る洗者聖ヨハネの聖堂に行かれ、其堂に隱れて不具の身となつたにも關らず、洗者聖ヨハネの有名い畫を畫かれました。此畫は今日も尙大切に保存されてあります。

數年の後迫害者であつた、テオフィロ皇帝は崩御なられて、皇太子が位に卽かれました。此新皇帝は信仰厚き皇妃の聖テオドラに從はれて、異端の害を除き、信者を保護せられましたから、聖ラザロも前の修院に復歸る事が出來ました。ろして雙の手が骨ばかりになつて居りながら、尙も筆を棄てず、多くの名畫を畫かれました。

後新皇帝は聖ラザロに對して、前皇帝の迫害を謝せられ、特に皇帝の使節として羅馬の敎皇陛下の許に遣はされました。聖人は多くの土產物を携へて、羅馬に往かれ使命を果して後、無事に國に歸られましたが、後間もなく修院に於て病氣に罹られ、安らかに瞑目なられました。時に降生後八百六十年でありました。後世の人々は聖人を畫家の守護として、特に敬ひ崇んで居ります。

二月廿四日「1」（降生後六十三年死）

垂仁天皇時代

使徒聖マチヤス殉教

（靈父）往昔聖主耶蘇基督が、聖教をお弘めになる時に、十二人の弟子をお選びになつて、之を使徒と名づけられました。孰も此世に於ては左程勢力の有る者でなかつたのですが、聖主基督の勇士となり聖主に從ふて、罪惡と世間と惡魔と戰ひつゝ、聖教を傳へられた方々で、後には皆公教の爲に致命せられたのであります。所が此十二人の中に、イスカリオテのユダスと云ふ者がありまして、御承知の通り使徒の名譽を得ながら、一朝貪慾の爲に惡魔の囚虜となり、僅少の金錢に眼くらんで、聖主を惡人に賣渡しました。されで聖主が十字架に釘つけられ給ふた時に、ユダスは失望して終に自ら縊つて、哀れな最後を遂げたのであります。

（使徒聖マチヤス）

聖主御昇天の後、使徒達を始め凡そ百二十人餘の御弟子が集つて居る時に、教會の首領なる聖ペトロは、他の使徒等に、ユダスの反逆とその最後の有樣を述べて「吾等と共に聖主に從ふて居つた弟子の中から、今一人を選んで使徒に爲ねばならぬ」と告げました。乃で人々は皆いろ〳〵と協議を爲まして、マチヤスと今一人義人と名づけられて居つたヨゼフの二人を選んだ上、一同は地に跪いて「主よ今此二人の中、使徒の勤務の爲に孰を選び給ふかを示し給へ」と、熱心に祈つて天主樣の聖慮を伺ひ、ろして其默示を蒙るために抽籤を爲ました、所がマチヤスが當選しました。

斯やうな次第でマチヤスは使徒の中に加へられ、聖靈降臨の時に他の方々と俱に、聖靈の賚を蒙られました。後使徒等は聖教を弘める爲に、各自各國に行かれましたが、其際この使徒聖マチヤスは猶太國に行く事となりまして、其國で三十三年の長き星霜の間、樣々の苦難を嘗めて、熱心に道を傳へて數多の人々を、眞の信仰に導かれました。後此猶太人の迫害に遭はれ、酷く苦められた上、遂に石にて打殺され、殉教の譽を得られました。時に降生後六十三年でありました。

三百年經つて、聖エレナ（八月十八日）といふ、コンスタンチン大皇帝の皇太后が、此使徒の遺骸を羅馬に移されましたが、今も尙保存されてあります。

二月廿四日「2」（降生後五百六十年生　同六百十六年死）

推古天皇時代

聖エデルベルト王（英國）

（靈父）六世紀の末頃、天主公教が今の英吉利國に於て盛んに弘まつた事を概略申上げませう。

此時代は羅馬は勿論遠く西班牙、佛蘭西の遊までも公教が盛んに弘まつて居りましたが、海を隔てた英吉利ではまだ野蠻人の勢力がある時で、偶像教ばかりでありました。而して此英國は丁度日本の戰國時代の如に、數多の小さい國々に分れて居りました。其中にエデルベルトと云ふ國王が居られました。無論未信者でありましたが、信者である佛蘭西國王の姫君ベルタと云ふ方を皇后に冊立られました。此ベルタ皇后は却々熱心な信者でありましたから、此から後も何事に關らず、公教會の掟に從ふて差支なし」と云ふ條件附で皇后となられました。されで御輿入の時に特に佛蘭西から一人の靈父が附隨ふて行つて、此皇后の爲に彌撒を

行ひ、告解聖体等の秘蹟を授けて居られました。

國王エテルベルトは至つて謙遜質撲で且つ賢明なお方でありましたから、數月も經ぬ中に、皇后の操正しく德行の優れて居られるのは、是必ず公教を信仰する賜でおらう。と深くお曉になり、自然と公教の方に傾くやうになられました。然し國の内外に於て紛擾が烈しい時でありましたから、それが爲に少しの餘暇もなく、充分に教理を研究する事が出來ませんでした。後戰へば勝ち、打てば破るといふ風に漸次勢力が增して終に英國の大半を統治るやうになられました。

是より先、羅馬の某修院にグレゴリオと云ふ修道者がありましたが、或日多の人々が奴隷の賣買をして居る所に通りかゝりました。

(俊子)羅馬人が信者になつてからも、まだ奴隷の賣買があつたのですか。

(靈父)無論教會は奴隷の賣買を嚴しく禁じて居りましたが、永き習慣でありましたから、容易に之を止めさせる事が出來なかつたのです。其時グレゴリオは不圖奴隷の中に、如何にも柔和な愛らしい數人の小兒の一組が居るのを見て不憫に思はれ、側の商人に向つて、「此小兒等は何國の者で、また信者であるか」と尋ねられました。所が商人は「彼等は未信者で、英國から渡つて來た者である」と答へました。グレゴリオは、「あゝ左樣か」といひながら、「萬一信者であるならば天使の如く、心の中までも美しい者であるのに」と思ひ浮びましたので、深く愛憐の念が起り、遂に此小兒等を買受けて修院に連歸られました。

(太郎)修道者は何ういふ譯で、小兒を修院に連歸つたのでせうか、奇怪ですな。

(靈父)是は深い考があつたのです、即ちグレゴリオは此小兒等に、公教の話を聽かせて、洗禮を授けた上、御自身は此小兒等から彼國の言葉を習ひ、やがて其國に渡つて、教を弘める目的でありました。所が間もなく時の教皇陛下が崩御なられましたので、此グレゴリオ修道者が選ばれて教皇陛下となられました。彼の名高いグレゴリオ教皇博士(三月十二日)と云ふ大聖人は、即ち此お方であります。

グレゴリオは教皇陛下になられて後も、矢張英國の空を眺めて、彼地に天主樣の御榮光を輝かさうと望んで居られました、所が圖らず變にお話した、エテルベルト王の名聲を聞かれ、皇后の聖德を知られましたから、まことに好き機であるとお考へになつて、御自分が居られた修院から、聖オグスチノ(五月廿八日)といふ方をお選びになり、他の四人の宣教師と共に英國にお遣しになりました。

頓てオグスチノ聖人等は英國に着かれましたから、十字架を眞先に樹てゝ都へ進まれました。スルと此事を聞かれた國王エテルベルトは大に歡んで、自ら出迎はれ豫て皇后の爲に設けられてある聖堂の如な所を住居に充てられました。それで聖オグスチノは公けに教を弘める事が出來ましたので、國王の爲に天主樣に感謝せられ、熱心に傳道せられました。後間もなく國王は立派な覺悟を以て洗禮を領けられ、續いて文武の百官を始め、多數の人民は爭ふて異教を棄て、公教信者となられました時に降生後五百九十六年でありました。

グレゴリオ教皇陛下は、此良き報知を得て大に喜ばれ、直樣皇后に宛てゝ、「全能なる天主樣は、陛下の御手に依つて英國の人民に眞の信仰の恩寵を與へられたのであります。何卒厚く天主樣に感謝せられん事を。尙陛下は國王と偕に永く現世に存へて、天主樣の爲に立派な功績を積まれん事を」との趣意の祝詞を贈られました。

國王エテルベルト陛下は、洗禮を領けられて後は、戰を罷めて人民の福利を圖り、貧しき者老たる者を救け慰め、また一日も早く總ての人民が皆天主樣を認めて、其規律に從ふやうにと望んで居られました。それで今迄偶像の爲に用ゐて居つた社寺等を皆壞し、改めて天主樣に獻げられました。その時カントベリーと

いふ所に在つた有名な寺も壊されて、大天主堂が建てられたのであります。後聖オグスチノが司教の位に陞られた時、國王は宮殿を司教様にお讓りになつて、御自分は又別に其近邊に宮殿を建てられました。

國王聖エテルベルト陛下は、斯様して二十年餘の間、天主様の爲に良き功績を樹てられ、國家を治め人民を慈しみ、立派に國王の義務をつくされましたから、國民は皆親の如く愛し敬ひ、其德を讃め稱へて居りましたが、在位五十六年にして重き病氣に罹られ、善き終を遂げられました。後其御傳達によつて許多の奇蹟が行はれまして、終に聖人の位に列せられました。

英國は此時から、天主様の恩寵は益々著しく顯はれ、其頃說教の爲に日々數千の人々が信仰の恩寵を得るやうになりましたので、後には數多の宣教師が來られ、また英國よりも羅馬に留學し、卒業の後英國へ歸つて、傳道に從事する者が次第に殖ゑて來るといふやうに盛んになつたのであります。

何卒皆さんは此聖人のお傳達によつて、英國の人々の爲に祈り、一日も早く同國人が擧つて眞の道に歸依するやう、熱心にお願ひなさい。

二月廿五日（降生後千八百九年生　同千八百三十七年死）

仁孝天皇時代

福者カロル、コルネ宣教師殉教

（靈父）此月の二日福者テオフアノベナル師のお話を致しました時に、コルネといふ宣教師の殉教の話を聞いて良き志を起されたといふ事を申上げましたが、今日は其コルネ師の傳をお話致しませう。此方は佛蘭西國の宣教師中、最も初めに佛領支那の東京で殉教せられた方で其祝日は十一月廿四日他の殉教者と共に祝せられたのですが、都合によつて今日お話する事とします。

福者カロル、コルネ師は千八百九年二月廿七日に佛蘭西の北部の方にある、ブアチエといふ市の近邊でお生れになりました。性質柔しく從順で、人々に深く愛されて居られました。然し其他別に是といふ優れた點もありませんでした。また親御は相當の財産を有つて居られましたから、世間に出て名譽富貴を得やうと志す事も度々ありましたが、小學校卒業の後、此からは天主様に身を獻げて司祭となり、一生涯人々の救靈のために働きませう、と決心して神學校に入られました。

（福者コルネ宣教師）

一日外國に行つて居つた一人の宣教師が、此學校に來て、外國には未だ眞の宗教を識らぬ者が多數ある、といろ〳〵例證を擧げて實際の有様を語つた上、いとも熱心に傳道の急務なる事を說かれました。コルネ師は此一場の講話によつて大に心を動かされ、何卒して宣教師となつて、外國に行きたいと、望を起されました。それで、次の夏季休暇に、自分は最早外國に往つて艱難苦勞するものと假に定めて、之に耐へるか否か試練して見やうと、雨風強く、雷鳴の烈しい夜に自家を出られました。ろして外國の不知案内の土地に居られるつもりで、雨風にうたれながら、故と近き山中に迷ひ入つて、さま〴〵の苦痛を嘗め、樹下に雨を避け、荊棘の中に憩み、石の側に寢るといふやうに爲られました。ろして黎明ごろに或山の小さな村落に着かれましたから、其村の人々に公教の話を聞かせて後、自家に歸られた事がありました。

二十一歳の時、巴里市の外國傳道會の神學校に入られ、翌年佛蘭西を出發して、二十三歳の夏支那の澳門に着かれました。

後東京のハノイと云ふ首都に赴かれました。丁度此時東京、安南國などを統治めて居つた總督は、非常に壓制な人で、基督教信者があれば、用捨なく酷く苦めて死刑に處せよ」といふ布告を發したのです。ろれでコルネ師も他の宣教師等も、公に公教を弘める事が出來ませんでしたから、晝間は山奥深く住み、夜になると村々に出てひそかに、病者を見舞ひ、小兒に秘蹟を授け、また信者の信仰を強めて居られました。

コルネ司祭は斯して五年の間、艱難苦勞をしながら密に眞の教を弘める事に力を盡して居られました。所がいつしか悪人等の知る所となつて、其隱れ家を總督に密告した者がありましたから、忽ち千五百人の兵隊と、三百人の捕手とが、此村に外國の宣教師が隱匿れて居るに相違ない」といひながら、業々しく村落を取圍んで、手に手に槍や劔を提げ、家といふ家は勿論石の間や草の根までも、刄の穂先を突入れて、嚴しく司祭の在所を探しました。ろれでコルネ司祭も今は天主樣に生命を献げる機であると覺悟を爲され、人々の面前に出て、恭しく十字架の符號をなされて後「私はコルネと云ふ、公教の宣教師である」と、自ら名乘つて出られました。

ろれで造作もなく捕へられ、すぐに柱枷を懸けられましたから、横になる事も出來ぬやうになりました。ろして二日の後恰度猛獸のやうに、檻の中に入れられたまゝ、遠き裁判所に護送られました。此所に着きますと、毎日〳〵多勢の未信者等が、物珍らしさうに來つて來て、樣々の批評を爲て居りましたが、一日も一人の役人が來て、「何でも望みの品を與へるから、一つ歌を聞かして呉れよ」と戯れに申しますと、コルネ司祭は十字架を私に返して下さるならば歌ひませう、と約束をせられ、空腹を耐へ恥辱を忍んで、天主樣を讃美する聖歌を唱へられましたが、其音聲は却々美妙いので、人々は聞傳へて、潮の如く其檻の傍に押寄せて來ました。ろれでコルネ師は苦痛をも忘れて、人々の大勢集るのを僥倖に、引續いていとも熱心に眞の道を宣べられました。人々は此方が四辟の身でありながら、少しも恐れ憚らず、信仰を表白された事に就て、尠からず感心しました。やがて説教が了ると約束によつて、役人から小さき十字架を與へられましたので、コルネ師は涙を流して喜ばれ、すぐ樣之に接吻して、御檻の中に懸けられました。

後度々裁判所に引出されて、其都度「教を棄てゝ、十字架を踏めよ」と頻に責められました、がコルネ師は少しも之に應じられませんでしたから、捧を以て散々強くうたれた上、檻の中に入れられました。後三ケ月ばかりも繰返し〳〵斯樣にせられましたが、頑として之を肯入れませんでした。或日も例の如く十字架の前に呼出されて、早く教をすて〳〵、之を踏めよと嚴しく責められましたから、コルネ師は謹んで其所に跪き、其十字架に接吻をなされました。スルと役人等は火の如に怒つて甚く鞭ち、三回も捧を取替へて打續けました、がいよ〳〵教を棄てぬと云ふ事が分りましたので、終に死刑の宣告をしました。

ろの時コルネ師は親御に

「父上樣、母上樣、最早私は度々の責苦によつて大分血を流しました。然しまだ死刑を執行せられる迄には、多くの血を流さねばなりますまい。また私の死刑は頭も体も細かに切刻まれる筈になつて居ます。斯樣な事を知られたならば、嘸かし愁傷される事であらうと、其御樣子を察ひまして、私は度々腸も斷つばかり哀み泣きました。然しまた此手紙を御覽になる時には、最早私は天主樣の尊前に於て、御兩親の爲にお祈禱をして居る時でありますから、何卒其事を想ふて歎んで下さい。私も亦ろのお歎の樣を思ふて自ら慰めて居ります。最早私の短い現世の痛

苦は終を告げて、永遠の福樂に入る日が近づいて來ました。何卒私の爲に喜んで天主樣に感謝して下さい。尙申上げます事は山々ありますが、思ふまゝに筆を執る事が出來ませんから、之で筆を擱きます。

……(檻中よりコルネ)と

最後の手紙を贈られました。

其中にいよ〳〵死刑の當日は來ました、時は千八百三十七年の九月廿日で、二十八歳の秋でありました。此日午後一時頃に劒や斧を持つた刑吏が來て、死刑執行の旨を告げ、檻を昇して裁判所を出ましたが、三百人餘の兵卒も亦嚴しく、檻の前後を護固り、二十分許にして刑場に着きました。

(悲慘なる殉教の光景)

乃でコルネ司祭は鎖を外して檻から出され、用意の柱の所に行かれますと、其所には早廣き板が置かれてありますから、御自身がいつもミサの時に使用ふて居られた布を敷き、其上に俯いた儘手足を伸されました。其間に三百人餘の兵卒は見物人を制して、刑場の周圍を取圍み、刑吏は劒を拔き、斧を翳して各自ろの受持の場に控ねました。

空はどんよりと曇つて、一陣醒さき風が過ぎ去ると、準備が全く出來上つたものと見ゐて、刑吏が支那一流の大きな銅羅を鳴して合圖を爲ました。スルとコルネ司祭は最後の祈禱を爲られその機を窺ふて、或者は手、或者は足といづ其首を刎ねますと、續いて或者は刀を閃かして先ふやうに、首と兩手兩足を斬放し、尙殘酷にも殘る胴体を、縱横に斧で打切つて四つに放しました。ろして刑吏は刀の血を拭り、体から腑を取出し、其場で之を配けて喰ひました。

(太郎)實に慘酷な事をしたものですな、また何故血を甜めたり、腑を食ふたりするのでせうか。

(靈父)此は支那人の習慣として、英雄とか傑とかゞ死ぬと、其人の勇氣や智識に肖りたいと、其血を飲み其腑を食するので、いはゞ一種の迷信であります。

刑吏等は死刑の執行が終りますと、其首を制札と共に梟して、兵卒等と共に歸りました。其夜傳道師が密に此所に來て、遺物を拾ひ集めて之を板の上にある布にて包み、其附近の山に隱しました。後信者等がいろ〳〵の工夫を計して、遂に其頭も手に入れる事が出來ました。今日巴里市の外國傳道會に、他の遺物と共に其布が保存されてあります。靈父も之を實見しましたが、眞黑に血の痕が附いてあつて、甚い感じが起りました。千九百年に七十七人福者の位に登されましたが、此コルネ司祭も其中の一人であります。

此から後東京地方の未信者は漸次に天主教の如何なる教旨であるかといふ事もわかり、又多くの宣教師等も續々入つて教を弘めくれましたので、益々信者が殖ねました。また此司祭が死刑に處せられた場所に立派な聖堂が建てられて、その遺物が納められてあります。

何卒皆さんは此福者の御傳達に依て、一日も早く多の人々が眞の宗教に入るやうに努め、また熱心に祈られん事を望みます。

二月廿六日（降生後三百五十三年生　同四百二十年死）

仁德天皇時代

聖ポルヒリオ司教

聖女イレナ童貞

（靈父）四世紀の末頃に聖ポルヒリオと申す司教樣が居られました。此御方はマセドニヤ國のラザロニカといふ港で御生れになりました。親御は德行の優れた信者で、又財産家でありましたから、聖人に幼ない時から良き教育を施されました。されでポルヒリオ聖人は成長なるに從ふて、學問に進み善德に秀でられました。

御年廿五歳の春、感ずる所があつて、名譽も財産も顧みず故郷を離れて遠く埃及國へ赴かれ、其地の修院に入られました。數年の後此修院を去つて、イエルザレムに往かれ、其附近の巖窟を住居として、五ヶ年の間朝夕聖地を巡拜し、熱心に祈禱と苦行を勵んで居られましたが、間もなく病氣に罹つて、起居も不自由な身となられました。然し相變らず毎日カルワリヨ山に登つて、聖主の御受難の跡を偲び、御自分の痛苦を忘れて默想を致して居られました。

一日痛く弱つて居られたにも關らず、平素の通りカルワリヨ山に登られましたが、終に苦痛に耐へず其場に仆れて良久人事不省となられました。スルと少し精神が恍惚となつたかと思ふ中に、聖主が聖十字架を負ふてお出現になり、「汝此十字架を誰れ」との御告がありましたので、聖人は驚いて正氣附かれますと、奇妙にも今迄の苦痛が無くなり却て元氣强くなつて居られました。後間もなくイエルザレムの大司教樣が、ポルヒリオ聖人の信仰厚く德行の優れて居る修道者であるといふ事を識られましたから、此聖き十字架を守護する爲にお選びになつて、聖人に品級の秘蹟をお授けになりました。されで聖人は大に歎ばれ聖き十字架を守護しながら益々熱心に難業苦行をせられ、聖主の御苦難に對する信心を養はれ、此世の事を忘れて消く樂しく天主樣に事へて居られました。されで尙一生涯此地に止まるとの決心を爲されたのであります。

ところが丁度此時代には最早大迫害が無くなり、公教信者は益々盛に殖ゑて居りましたが、パレスチナ國のガザーといふ市では、偶像教の教師等が非常な勢力を持て居りましたので人民を煽動て〻、公教信者を責め苦め、內亂の如なひどい騷動を起しました。時に折惡くもまた市の司教樣が死なられましたので、大司教樣は其後繼者を誰彼と物色された上、終にポルヒリオ聖人を選んで此市の司教樣とせられました。

聖人は一生涯洞穴に住居して、人に知られぬ勤行をしたいといふお望みであつたものですから、司教樣になるのは嫌でありました。然し此も天主樣の深き攝理であらうとお曉になりましたから、御自分の良き希望を抑制て快く承知せられてガザー市に往かれ、此騷ぎのある難治い所の司教樣となられました。スルと市の人々は此高德の人が新に司教になつて來たといふので、一層ひどい反亂を起し、尙樣々の惡い工夫を凝して司教樣が教會を治める事が出來ないやうにしました。されて之を取締る知事も亦未信者でしたから公教信者の迫害せられるのを喜んだのか、或は反亂者の勢に恐れたのか、一向其騷動を靜めやうともしませんでした。

一日暴徒の一團が司教樣の居られる教會を始め、市の教會に亂れ入らうと準備して居るといふ事を知られた司教樣は、一時此暴徒の手を遁れる爲一人の司祭をお伴になつて、窃に教會を出て遠く離れて居る山へ行かれました。

何所と別に目的もなく、唯一散に山を指して進まれましたが、日が暮れてから山路を踏迷ふて、行けども〳〵人里らしい所がありませぬ。されで尙も荊棘を踏み樹の根にすがつて道を探して居られましたが、不圖灯影を認められましたので、其灯を便に疲れた足を曳いて漸く其所に着かれましたが、いとも貧しい茅屋でありました。乃で司祭は戸を叩いて一夜の宿を賴みま

すと、唯と應へて十四五の可愛らしい少女が出て來ましたが、司教樣の姿を見るなり恭しく足許に跪いて慇懃に挨拶を致しました。

（太郎）其娘は信者であつたのですか。

（靈父）否ゐ、此娘は童貞イレナと云ふ聖女でありますが、此時は未だ信者でありませんでした。ろれで司教樣は斯樣な貧しい家に似合はぬ少女の素振を不審に思はれて、其名を尋ね重ねて公教信者であるかと、お尋ねになりました。スルと少女は「私はイレナと申す者で、幼さい時に父母に死別れ今は祖母さんと唯二人暮しで此山奥に住み私は日々働いて細い煙をたてゝ、居ります。ろして基督教の信者ではありませんが、何卒して信者になりたいと思ふて居ります、」と答へました。司教樣は此話を聞かれて痛く感心せられ、「ろれではどうか今夜此家の片隅にでも休ませて下さい。そして誰か尋ねて來ても私等が此處に居るといふ事を告げぬやうに」と願はれました。

少女は委細承知して、いろ〳〵と兩人の方を家に入れ、心ばかりのパンと果物を差出しました。司教樣は此貧しきイレナが親切の歡待に心の底から喜ばれ、また纖弱き身を以て、かゝる山奥で働き一人の祖母を大切に養ふて居るのに深く感動せられましたから、傍の司祭に向ひ、「此國の人民の中にもかく正直にして善德の優れた者が居る。眞に喜ばしい、彼の惡魔が絶ゑず如此善人の靈魂を害せんと企てゝ、毎時斯いふ人の歸依を妨げて居るが、然し永く經ぬ中に此國の人々は必ず皆天主樣を認識て、熱心に事へるやうになる」と語られ、尚イレナに向つて、「和女は必ず熱心な信者となる恩寵を蒙る」と申して祝福せられました。後果して此司教樣の豫言は、兩ながら成就したのであります。

やがて司教樣は食事を了られると、一室しかない家でしたから、司教樣方を此室に宿し、イレナは裏庭に莚を敷いて其上で祖母と二人寢みました。司教樣は斯して難を此處すべき少女の小家に避けられ、短い夏の一夜を過されたのであります。

ポルヒリオ司教樣は翌朝早く此家を出られて、密に市の教會に歸られましたが、此時暴徒等は既に司教樣の下僕を殺したうへ、家財を皆奪取つて引去つた後でありました。

時に此ガザー市附近の地は、暑氣殊に嚴しく、旱魃が甚しかつたので作物が皆枯れ、將に大饑饉が起らうとしました。ろれで人々は皆騒ぎ立ち、此は必ず基督教に對する神々の祟であると思ひ、公に雜多の祭式をして、只管神々の心を慰め雨の降る事を願ひました、が然し一向其祈の功驗がありませんでした。司教樣は是は好き機會であるとお考になり、熱心な信者に旨を含めて、公けに天主樣にお祈をする事に決められました。司教樣は先づ大齋と祈禱を爲られ、定めた日に信者と共に、行列をしてガザー市外にある天主堂へ行かれました。ろして市の入口まで歸つて來られますと大門が閉されてあります。

（次郎）大方未信者がろんな事をしたのでせう。

（靈父）左樣全く未信者の所爲でした。ろの時一同は止を得ず再び門外で二時間餘り、大聲を揚て祈、讃美歌を唱へますと奇妙にも南風が吹き、空が搔曇つてパラ〳〵と大雨が降つて來ました。待ちに待つて居つた市の未信者は公教信者の祈禱によつて、此驟雨がありましたので不思議に思ひながらも大に歡んで、早速門を開け躍り狂ふて信者を歡迎しました。ろして此喜雨は五日間も降續きましたから、人々は皆蘇生つたやうな想ひで、今迄忌み嫌ふて居つた基督教ころ、眞正の神樣の教であると曉つて、大勢の人は先を爭ふて信者となりました。

所が彼の頑固な偶像教の教師等は、自分の信徒が公教會に赴くのを見て、嫉妬と失望の結果益々教會に反對して信者を苦め、「國の神々が基督教を亡ぼさねばならぬと御告がありた」と言觸じて人々を迷はせ、終に信者を捕へて十字架に釘付け、之を供物として偶像の

前に置くといふやうに、實に酷い事を致しました。ろれで司教様は此信者の苦痛を見聞するに忍びず、御自分の身を天主様に犧牲として捧げて之を救はんと願り、直接皇帝に其非道を訴へる決心で、すぐに首都なるコンスタンチノープルに赴き、皇帝アルカリオ陛下に拜謁を願はれました。

此時ウドクシア皇后陛下は御懐胎であらせられましたが、今迄皇女ばかりでしたから皇子をお望みでありました。折柄豫て名聲の高いポルヒリオ司教様が往かれましたので大層に喜ばれ、「何卒して今度は皇子を賜るやう天主様に願ふて下さい」と仰せられました。所が司教様は直様「今回は必ず皇子が御出生になり、皇帝の後を繼がれます」と豫言せられ、後種々とガザー市の有様を陳述て、公教信者に對しての亂暴を制める事を願ふて市へ歸られました。スルと間もなく司教様の豫言の通り、皇子が御出生になりましたので、兩陛下は大に歡喜ばれ早速司教様の願の願出を御聽容になりまして、ガザー市の主要なる人々に勅して、「市の寺や宮を潰して偶像を壊し、尚騒動を起させた首領の者等を悉皆市から放逐せよ」と嚴しく命ぜられました。そして皇后陛下も亦天主様に感謝の意を表して、司教様の許に多額の金錢を贈つて、寺の跡に天主堂を建立るやうにと願はれましたから、司教様を始め信者達は、公に教を守る事が出來るばかりでなく、聖堂までも殖える事となりましたので、喜びの涙を流して天主様に厚く感謝し、一同力を協せて立派な大天主堂を建て、之をウドクシア天主堂と命名ました。

(俊子)後の感心なイレナは如何なりましたか。

(靈父)ポルヒリオ司教様は平素彼のイレナの事を御忘になりませんでした。其後司祭を使者として此市に呼寄になりますと、イレナは喜んで祖母と一所に司教様の許に來られましたので、人を選んで教理の勉强を爲せ、充分に覺悟が出來てから兩人に洗禮をお授けになりました、が間もなく祖母が死なり、イレナ一人となりましたから、司教様は「熱心な信者と結婚をしたならば如何ですか、ろれに入要の費用を與へませう」と結婚をお勧になりました。然しイレナは「最早私は身体も精神も天主様に獻げて、一生涯童貞を守る決心を致しました」と答へられましたので、司教様は、イレナが洗禮後間もないのに斯くまで天主様から特恩を蒙けたのかと、大に感じ喜ばれて某信仰厚き婦人の許に置かれました。

聖女イレナは其後司教様の恩に感じ、天主様の恩寵を感謝して、一層身を修め德を行ひ、同じ年齢の婦人に傳道し、又同じ志の方と慈善に力を盡して、清く熱心に天主様に事へて居られましたが、後遂に多くの冥き靈魂を遺して、立派な最後を遂げられました。ろして今日此イレナ童貞は、女の子の保護の聖女として、萬人に仰がれ慕はれて居られるのであります。

またポルヒリオ司教様も、永く種々と異教人から苦められて居られましたが、皇帝の保護によつて天主様の稜威を輝かし、多くの異教徒を眞の信仰に導き、また身を修め德を示して信者を慰め勵まして、御年六十七歳の秋御病氣に罹られ、此世の苦痛を脱れ、芽出度天に昇られました、時に降生後四百二十年でありました。

皆様は此聖女イレナの傳によつて假令貧くとも心を盡して、天主様の代理者を尊敬したならば、此世に於ても恩寵を蒙る事が出來るといふことを曉り、又此司教様の從順の德に倣ふて、此後靈魂上目上の人の勸告には能く從ふやうに努めねばなりませぬ。ろして今日此兩聖人の御傳達を以て、天主様の聖旨を何よりも大切にし、之に背かない様にお願ひなさい。

二月廿七日（降生後千八百十四年生（同千八百五十六年死））

孝明天皇時代

福者オグスト、サブドレン宣教師殉教

福者ロレンシオ、ペマン（支那人）殉教

福女アグネス、チャオクイ傳道婦殉教

（靈父）今日は一昨廿五日にお話した、カロル、コルネ師と同じく千九百年に福者の位に列せられた七十七人の中で、コルネ師が致命せられてから十九年後、支那の廣西で殉教せられた、福者オグスト、サブドレン宣教師と、支那人の福者ロレンシオ、ペマンと云ふ職人と、今一人福女アグネス、チャオクイ傳道婦の殉教せられた事を申述べませう。

福者サブドレン師は今より丁度九十六年前に佛蘭西の北部に在るクタンス市の附近でお生れになりました。父親は特に慈善心の厚い人でありますので、貧しき者等は毎時此家に集り來るといふ風で、サブドレン師も幼ない時から此善き摸範に感化されて、貧しき人に對して慈愛深き御方でありました。ろして平素同年輩の小兒と遊ぶ事を嫌ひ、自ら小さな香臺を作り十字架を樹て、獨り彌撒の眞似事をせられたり、又獨り靜寂な地で書物を讀み、教理を覺ゑる事を樂として居られましたが、漸々成長なるに從ふて身体が强壯となり四人分の仕事が出來る程の能力がありましたから、家業を助けて畑を耕して居られました。

然しサブドレン師は餘程以前から、俗世を避けて宣教師になりたいといふ希望を懷いて居られましたが、却々よく働く方でしたから、父も兄も之に反對して其望を妨げやうとしました。其中に師は二十歳となられましたが、宣教師にならうといふ望を制へる事が出來なくなつたので、いろ〳〵準備に取懸られました、所が家族親戚の反對もます〳〵烈しくなり、「お前が家を出たならば誰が家族を助けるか」と、切に之を思ひ止らさうと努めました。サブドレン師は此上は天主樣の御攝理に托すより他に途がないと、一心に自分の目的が達しますやうにと祈つて居られました。スルと廿日許の後最も反對して居つた兄が二人共急に病氣で死なりましたので、一時肉身の利益の爲に迷ふて居つた父も親族も、終にサブドレン師の希望通にすることを許

福者オグスト、サブドレン宣教師

しました。

サブドレン師は大に喜ばれ、直樣近くの司祭の許に通ふて羅甸語を學び、後神學校に入られて熱心に勉强せられましたが、六年の後芽出度此校を卒業して司祭となられました。家族の者等は皆自分の近くの村の教會を受持れる事と慮ふて居りましたが、師は「私は眞の神を認識て居る者の爲に司祭となつたのではなく、未だ天主樣の聖寵を蒙ない者の爲に働く積りであります」と應へて、外國へ往く望であることを明示されて只管其機を待つて居られました。然し止を得ず國内に止まらねばならぬやうになりましたから、七年の間柔和親切を以て熱心に信者を導かれました、が千八百五十一年即ち三十七歳の春、漸く巴里市の外國傳道會に入る事が出來ましたので、其會にて一年間準備を爲られ、翌年巴里市を出發して支那の廣東に着かれました。

師は此地で上陸せられ、後河を遡つて遠く廣西と云ふ地に往かねばなりませんでした、が其船中で十數人の强盜に襲はれて、所持品を悉皆奪はれ、縱かに衣のみ着ぬとなられましたので、餘なく廣東に引返されま

した。ろして翌年十一月再び廣西に向はれましたが、此時も亦船長に三百圓あまり强奪され、十二日の後貴陽に着かれました。素より餘裕の金も御持にならぬ司祭は、斯く度々の災難に罹られましたので、冬の寒にも堪て着る衣もなく、人情風俗の異つた土地に來られて言語も通せず、實に嘗へやうもない艱難を嘗められましたが、一先づ此貴陽に滯在て他の宣教師に就て語學を學び、支那の風俗習慣を研究し、然して後に目指す廣西に入らうと決められました。

此廣西は既に迫害の爲に、百年餘も以前から宣教師の往來が途絶ねて居りますので、今は信者の動靜は勿論、一歩足を踏入れると直に其儘殺されるか、其邊の事情も一切分りませぬ。サブドレン師は此はまた人間の能力では及ばぬから、とお悟りになりましたから、此廣西を聖母の保護の下に置き、特別のお祈をして暮朝ろの御助力を願ふて居られました。

所が其中に折よく司祭は、一人の廣西人が此貴陽に於て近頃洗禮を領けた親族の許に來て、圖らず公教の話を聞き之を研究する氣になつて居ると、いふ事を知つて大に喜ばれ、早速其廣西人に會ふて懇切に教旨を說き聽かし、尙公教要理や其他の小冊子を與へて後、廣西の樣子を詳しくお尋ねになりました、ろれで此人も後日を約して廣西に歸り、誰彼に公教の話をして眞正の人道を傳へました。其熱心によつて間もなく親族知己を始め約ろ二百人程の人々は偶像教を棄てゝ、眞の神樣を信仰するやうになりました。ろれで其人が大に喜び、司祭を迎へる爲に急いで貴陽に來ましたから、サブドレン師は委細の樣子を聽いて、此は全く天主樣の深き攝理であろうと、涙を流して喜はれ、直樣一人の傳道師を伴て廣西に行かれました。此日は丁度聖フランシスコ、ザベリヨ(十二月三日)の祝日でありました。ろして廣西に着かれて直に多くの求道者に洗禮を授けて後、聖母無原罪の祝日(十二月八日)に此新しい信者と共に彌撒聖祭を行ふて、厚く聖母に感謝せられました。

兎角する中に或者の密告によつて、時の總督タオーといふ人の命を受けた兵卒が司祭を拘引に來ました。

此タオー總督は未信者でしたが行爲が正しく、深く學問を修めた人で、最早公教の大體を知つて居りましたから、司祭を親切に取扱ひ一應の取調をして後、「貴下が教へ傳へられる宗教は眞に道理に適ひ、救靈の爲に必要であるといふ事を能く識つて居ますから、私は貴下に對して少しも危害を加へる意がないばかりでなく、却て人民の爲に感謝し出來る丈保護をいたしませう、就ては田舍の人は朝夕勞働に逐はれて餘暇がなく、又無教育の者も多くありますから、或は種々に妨害をする者も出て來ませう、ろれ故今から市に行かれて教を弘められる方が得策かと思はれます」と懇ろに慰め勸めました。ろれで司祭は總督の意外な厚意を深く謝して後、矢張今迄の地に止まつて布教したき旨を告げて、教會に歸られましたが、此事があつてから後は司祭も上流社會の人々に交際が出來、布教の成績は却て以前よりも一層よき樣になりました。

然るに惜しい事には數年の後此賢明な總督が交替して、今回は反對に性質の隱險い人が赴任つて來ました。前に失敗した密告者は復此新總督に密告し、口を極めて基督教を罵りろの布教を妨げやうとしました。司祭は夙く此事を知られ、また信者達からも頻に遁れる事を勸めましたが、司祭の爲に信者衆が責められてるのを忍びませんとて、千八百五十六年の二月二十四日にロレンシオ、ペマンといふ信者と共に繩付の身となられましたのであります。

此ペマンといふ方は職人でありまして、貴陽府に生れ、廿歲の時に廣西に來られたのです。素より餘り學問がありませんでしたが、至極正直で柔和な御方でありましたから、早くも公教の眞正なる事を曉つて、重なる信仰箇條と祈禱を覺え、常に司祭を非常に尊敬し

て忠實に仕へて居られました。洗禮を領けて數日も經ぬ中に、ろの白き潔白の衣服を殉教の紅の血を以て染め、福者と仰慕れるやうになられたのであります。始め兵卒が司祭を捕へに來た時、ペマンは司祭の側を離れず、俱に逮捕せられん事を乞ふて縛を受けられました。後裁判所に曳出され種々と嚴しく責められて、教を棄てよと命ぜられましたが、「私は天主樣に離れ背反く事は如何しても出來ませぬ、若しろれが爲に首を斬られるならば却て幸榮と致します」と、答へられましたので、官吏も詮術なく樹皮を以て三百鞭うたせ、二時間も身動の出來ぬやう縛つて置いて、復も公敎を棄てぬかと責めました。然しペマンは「例令私の首ばかりでなく、私の母や妻の首を斬られましても、信仰を棄てる事は出來ませぬ」と斷然刻付けましたから、遂に斬首の刑を宣告され、長き辨髮を前に廻して猿轡として、縛られたまゝ町中を引廻されて、某河岸で首を斬られ、頭も體も河中に棄てられました。此日は二十五日でありました。

却説サブドレン司祭も廿四日捕へられて、裁判官の面前に引出され、いろ〳〵と責め問はれましたが、「此宗敎は眞の道であるから決して之を棄てる事が出來ませぬ、また私は人々に此宗敎によつて善を行ふて、永遠の幸福を享ける道を敎へる外に何の目的もありませぬ」と、宣敎師の何者であるかと云ふことを詳しく說明して、其決心を示されました。官吏も言葉が塞がつたから、竹の鞭を執つて三百笞ち、體が傷だらけとなつて後、正座させて、手も足も動く事が出來ぬやうに縛り、翌朝まで其まゝ裁判所に捨置ました。

翌廿五日の夜、再び强く鞭たれました、が此度は天主樣の御庇護に因つて、奇妙にも何の痛みも苦みも感せなかつたさうです。翌廿六日もまた革の鞭を以て、頰は裂け齒は碎かれるといふ位に强く打擲されましたが、司祭は凝と辛抱して一言も發しませんでしたから、官吏等は舌を卷いて驚き、他の者なれば斯る場合には必ず痛苦み泣き叫ぶ筈であるのにと不審を懷き、或は此外國人は何か禁厭でもするのではなからうかと思ひ、支那の風習として其禁厭を止めさせる爲に、一頭の犬を殺して其生溫しい鮮血を司祭の頭の上から濺ぎました。

(太郎)實に馬鹿氣た事をしたものですな。

(靈父)左樣です、まだろれ計でなく翌廿七日に官吏は一人の信者を呼んで、「若し彼の外國人は我に五百兩(一兩は約一圓四十錢)の金を提供せば早速放免するから、其事を彼に告げよと申しました。其時信者は「否ね司祭は決して金を出す事を爲られますまい、然し司祭の御許があれば私等は代つて百二十兩出しませう」と答へましたので、官吏は丁度商賣人の如く懸引をして、「さらば三百兩出せ」と申しました。信者が其事由を司祭に告げますと、司祭は「官吏が私の體を勝手に計ふが、望通にせよ、私は一錢も出さないからと告げて下さい」と云ひ、尙は其信者に向つて「實際司祭の殉敎は信者の靈魂上に取つて大なる利益となります」と申されました。廿七日午後裁判所に喚出されて遂に死刑の宣告を受けられました、が此死刑は一風變つた爲方で、(挿畫に向つて右の隅に首丈け見ねて居るのは卽ちサブドレン司祭で)、大きな箱の中に入れられ、全身を宙にして僅かに首で全身を支へ、自然に息が絕ねるやうになつて居るのであります。ろして司祭は午後六時頃に其箱に入れられて、箱のまゝ裁判所の入口に釣上げられて、捨置かれましたが、十時過に呼吸が苦しくなり、身が震ひ動くと同時に綱が切れて、箱諸共に地に落ちました。番人は再び元の通り梁に釣上げやうとしましたが、最早司祭の玉の緒が絕ねて居られましたので、其儘止めました。御年が四十二歳でありました。

翌日獄卒は死骸を駕籠に乘せて町外に運んで行つて首を斬落しましたが、其時三度鮮血が迸つたので、未

信者等は之を見て「此外國人の體は他の人々のと違ふて、死んでからも血が流れ出る」と不審がつて居りました。うして頭は路傍の樹の上に梟けましたが、後小兒等は此頭に石を擲げて遊んで居つたさうで、今日何の遺物も殘つて居りませぬ。

また彼のタオー總督は此事を聞いて新總督に手紙を贈り、「若し彼の宣教師が罪人であれば、予は卿に先つて處罰した筈である、然るに卿は罪なき外國人を苛酷にも死刑に處したのは何故か」と嚴しく其非道を責めましたので、此總督も亦其輕舉を深く後悔したさうです、が後に官位を剝がれました。

福者サブドレン、ペマン、アグネス
(三人訊問せらるゝ光景)

また此サブドレン師の許に傳道婦として働いて居られた、福女アグネス、チヤオクイと云ふ方も同じく迫害に遭はれて、三月一日に殉教せられました。此福女は元相當な信者の娘でありましたが、十五歳の折孤兒となりましたので、某慈善心の厚い婦人から救はれて養ひ育てられて公教の學校に入られました。(此學校長はアガタ、リンといふお方で、後に教の爲に致命されました)。チヤオクイ女は此校で書を讀み字を學んで、深く公教の研究を爲されましたが、いつも優れて成績が良かつたので、他の生徒等は嫉妬の心を起して、其貧しき姿を嘲つて居りました。然し福女は其罵詈も耐忍んで一層熱心に勉強せられましたから、終に婦人には稀らしい程智慧のすぐれた方となられました。

十八歳の時、信者の百姓と結婚をせられましたが、不幸にも夫は信仰の薄い人でしたから、毎時殘酷に遇はれ、始の中は時々信者の勤を守る事を妨げられて居りましたが、後にはいつとなく家族の者等にも責め苛まれ、主日の休みを守ると、食物までも與へられぬといふやうになりました。然し斯る無情も耐へ、「設令此うへ如何に苦められても掟に背き、教を棄てぬと堅く天主樣に誓ひ、又夫の改心を祈つて居られましたが、二年の後夫に死なれましたので、兄弟の爲に遂に其家を逐出されました。

不幸に不幸を重ねた福女チヤオクイは泣く〳〵復も某信仰厚き婦人の許を訪ねて、身の來歴を告げ、良久其家に身を置く事となりましたが、間もなくサブドレン司祭が、若き婦人等に教理を聽かせる爲、チヤオクイ女をお選びになつて傳道婦とせられました。福女は非常に喜び、一生涯此大切な勤務に從はんと決心せられて後、其深き智識と善き行爲とを以て、一心に傳道に力を盡されましたので、數年の間に數多の人々を救靈の道に導く事が出來ました。

後迫害の爲に司祭よりも數時間前に捕はれました。官吏は婦人であるから容易く教を棄てるであらうと、種々の甘言を以て欺き、或は脅し或は賺して其信仰を棄させやうと努めましたが、鐵石の如き堅き信仰は少しも搖ぎませんでしたから、官吏は立腹のあまり散々責めてから一先福女も牢舍に投れました。うして翌日も又りの翌日も手を代へ品を替へて、樣々に責めましたが到底其心を變させる事が出來ないのを見て、サブドレン司祭と同じ死刑の宣告をしました。三月一日に刑を執行して、其死骸は町外に遺棄てられたのであります。尙此三人の殉教せられた時、いろ〳〵奇妙な事があつたさうですが、確實な證據がありませんから省いて置きます。

二月廿八日（降生後二百六十八年頃）

（應神天皇時代）

アレキサンドリヤの數人の聖人聖女

（太郎）靈父樣、今天國に居られる聖人の名は皆な分明つて居りますか。

（靈父）否な、今日聖人と崇め敬はれて居られる方は、却々數へ盡せぬ位澤山ありまして、中には此世に居られた間人知れず尊き生活をせられ、又大なる隱德を施されて天に昇られた方の如に、誰にも知られぬ聖人聖女が數多居られるのです。つまり公教會が或方々を聖人の列に加へられるのは、彼等の良き手本によつて信者を慰め勵まし、其善德に倣はせ、其傳達によつて恩寵を享けさせる爲の目的でありますから、別に姓名は知れなくとも一般聖人の如く之を尊敬し、其德行に肖る事が出來るのであります。

今日は丁度往古アレキサンドリヤに大流行病のあつた時、身命を拋つて患者を救はれた方々で、事實は立派に分つて居りながら、名が明かでない數多の司祭と信者達を祝ふ日でありますから、一寸其お話を述べませう。

三世紀の中頃羅馬帝國に於て、恐ろしい傳染病が起りました。其中にもアレキサンドリヤ市が一番劇かつたのです。其折此市に大騷動が起つて日々多の人々が殺戮されたので、市中は屍の山と血の海の如になりましたから、自然傳染病も倍々烈しくなつて仆れる者は何百といふ程になりました。ろれ故人々は傳染を恐れて無情にも子は親を棄て、妻は夫を捨て只管各々自身の全からん事ばかりに努めて、誰一人之を救助る者がありませんでしたから、哀れなる病者は半死半生となつて路傍に倒れ、飢に泣き痛苦に呻ぶ、其慘狀は目も當てられぬ位でありました。

時に公教信者は未だ惡人の如く視られて、迫害に遭ふて居つた時でありましたが、天主樣の爲に愛德を顯すのは此際であると、市の司祭と信者達とが互に力を協せ勵ましあふて、信者未信者の區別なく、此可憐なる傳染病患者を救ふといふ決心をせられ、先づ道路に遺棄られて居る病人に就て一々親しく看護する事に努められました。即ち彼等を扶け起して勞り慰め、藥餌を施し、汚物を取り、尚死んで後も丁重に葬るといふ風に、骨身を厭はず親切に介抱して、立派に公教信者の勤む可き道を公に表はされたのであります。ろれ故今迄敵の如に嫌ふて居つた未信者の病人等も、此勇氣ある信者の行動に感激し、肉身も及ばぬ深き愛情に涙を流して感謝し、單に病氣が快癒たばかりでなく、大切な靈魂までも救はれた者が多數ありました。

（俊子）併し司祭樣や信者達に其病氣が傳染ましたでせう。

（靈父）然です、却々どうして烈い傳染病でしたから、其中に一人仆れ、二人仆れるといふ風に、漸々傳染して死なられましたが、直にまた他の司祭や信者達が代つて、終まで病者の看護に從はれましたのです。

永く國賊の如く脾睨まれ、何角につけて苦痛を受けて居られた信者達は、かくの如く其身の危ふき事をも顧みず、他人の苦難を救ひ助けられたと謂ふ事は、未信者に對して如何程の善き感化を與へましたでせうか、不幸にして是等多數の司祭信者等の名が知れませんが、然し他の殉教者にも劣らぬ功績を樹てられましたので、今日天主樣の尊前に於て無上の榮光を享けられ、又公教會に於ても此等の方々を聖人の列に加へられて萬代の後までも其德行を讃め稱へるのであります。

今日吾々は病氣に惱んで居る人を見舞ひ、靈魂と肉體に就て樣々の苦みに煩ふて居る人を助け慰めるといふやうに、他人に對して愛德を表はす可き機會が多くありますから、何卒皆樣は今日の此聖人方に倣ひ、場合によつては天主樣の爲に一命を献げても、ろの危急を救ふといふ位の決心をせられ、尚又此等聖人方の御傳達によつて、他人に對する愛德を立派に遂行る恩寵を頂くやうにお願ひなさい。

二月廿九日（降生後五百十三年頃）

繼體天皇時代

聖ドヂテオ修道者

（太郎）靈父樣、私は昨日宿題をせずに外の學科を勉强して學校に行きましたら、先生に痛く叱られたのです、別に遊んだのでないのですから、叱らんでも良いと私は腹が立ちました。

（靈父）太郎さん、それは大變な心得違ひです、あなたは先生の命令を守らず自分勝手な事を爲たのでせう、それが惡いのです、何故そんな氣儘や横着な事をしたのですか、勉强するのは惡い事ではありませんが、目上の命令を放つて置いて、勝手な不平を列べる等とは以の外の事ですから、一日も早く其惡い癖を矯すやうに努めなさい。

是迄度々お話した通り聖人の中にも此缺點を矯正す事に力を竭された方が數多ありますが、今日は特に聖ドヂテオといふ修道者を選んで、お話致しますから、能く注意して龜鑑としなければなりませぬ。

聖ドヂテオは羅馬の青年士官でありました。某大將の姻戚といふので、誰も別に咎める者もありませんでしたから、軍隊の規則も嚴重に守らず、たゞ讀書に耽り文筆に昵んで居られました。又信者でありましたが、ホンの名ばかりで、常に華奢な生活を好み我儘氣儘をして樂み、一向公敎の研究もせず。ます〳〵惡い方に傾いて居られましたから、天主樣の聖寵を蒙る事が出來なかつたならば、到底地獄の苦みを免れる事が出來ない有樣でありました。

ところが一日イエルザレムから客が來て、聖地の事を詳く話しましたので、ドヂテオは好奇心に驅られ一度聖地に行つて見たいといふ考が起りました。

（次郎）聖地とは何處ですか。

（靈父）此は聖主基督の御誕生の地や、御苦難御死去遊ばされた地を指して聖地と申すのであります。聖ドヂテオは頓て聖主が御受難の折、血の汗を流されたといふゲツマニに往かれ、其地の聖堂に入られますと公審判の有樣を描いてある、立派な大油繪が眼に留まりました。熟視ると多の罪人が地獄に墮されて、永遠消にね火に燒かれて居る圖ですが、眞に迫つて實際目を掩ふほど恐ろしい心地がしました。然しドヂテオは今迄あまり敎理の事に就て冷淡でありましたから、何故に這麼酷い苦悶に遭ふのか、此繪の意味が充分に會得が出來ませんでした。

スルと何時の間にか自分の傍に、美しく崇高い一人の貴婦人が居られて、奇妙にも詳しく此繪の說明をせられ、人々の現世に於ける一舉一動は悉く天主樣から審判かれて、或者は天國に昇つて無上の榮福を享け、或者は此地獄に墮されて限りなき苦罰を受けるのである」と懇篤に其理由を說諭されました。ドヂテオは今日迄其麼眞面目な考や、大切な未來の運命などについては少しも頓着しませんでしたが、此說明を聽かれ始めて自分の行狀について不安の心が起り、「然らば此恐ろしい地獄の苦罰を免れる爲には、何事をしたならば良しいか」と尋ねられますと、「此世の逸樂を避け、己の缺點を矯正し、新禱と苦行を努めたならばよろしい」と應へ了つて其尊き姿が搖消す如に見えなくなりました。それでドヂテオは此貴婦人は唯の人間でないと曉り、一層深く感動しました。

（淺子）其御方は聖母マリア樣であつたでせう。

（靈父）左樣、慈愛ふかき聖母が、彼を改心させる聖慮を以て御現れなさつたのであります。聖ドヂテオは此より後急に變つた人間の如になつて、今迄の樂を卻け、祈と苦行を始められましたが、若し救靈の爲に安全な生活をしたいならば、誘惑の多い此世間を離れて修道院に入る方がよろしい」と友人等が勸めましたので、ドヂテオはガザーと云ふ市の修院へ行き、院長に面會して「何卒私を此院に入れて下さい」と願はれました。

院長はドヂテオの容姿を視て、此青年は唯一時の熱心に驅られて入院を望むのであらう、迚も嚴しい規律

を守る事が出來まい、と良久し躊躇せられましたが、再三強て願はれますので、試に入院を許可し、聖ドロテオと云ふ德行高き行者に一切を托されました。

此聖ドロテオは却々識見の優れた方で、ドヂラオの性質が淳善といふ事を見て、熱心に導かれました。ドヂラオが後に聖人となられましたのも全く此聖人の指導が餘程力になつたのであります。聖人は先づ此新來のドヂラオに、大齋を守る事が出來るか否かを試みる爲に、五斤のパンをお與へになりました、が一日にして之を食ひ盡されましたので、翌日から少しづゝ減す事とし、ました。然しドヂラオは他の修導者よりも身體の工合が惡いので、嚴しい大齋も、永く起きて働く事も出來ぬといふ事が分りましたから、病者の看護をする職務を命ぜられました。

乃でドヂラオは毎日麁末な食事をして熱心に病者の看護を爲られましたが、手馴れぬ業である上に、稍もすれば言も行も軍隊の中に居つて下士卒に命令するやうな態度が出まして、人々は尠からず困つて居りましたが、其度毎に師のドロテオに戒飾められましたので、後には優しく親切に看病するやうになられ、病人等も亦非常に滿足するやうになりました。

其中にドロテオ師がドヂラオの重なる缺點が、好奇心と頑固と功名心とであるといふ事が分りましたので、專ら之を矯正す事に注意せられました。或日も師が病室を巡視ますと、ドヂラオは丁寧に迎へて「如何ですか、却々よく掃除が行屆いて清潔でありませう」と高慢の鼻をうごめかしますと、師は「看護人としては實に申分がないが、未だ善き修道者であると云ふ事が出來ぬ」と、ろの傲慢を誡められました。ドヂラオは直に其事に氣附き、師の足許に平伏して泣く〳〵謝られましたので、師は「罪惡であると識つて、悔ひ悛めばろれで宜敷から、此後は心を盡して、再び犯さないやうにせよ」と慰められました。

ドヂラオは斯して何事も嬰孫の如くに能くドロテオ師の命に從ひ、日一日と謙遜從順の德を守られましたから、次第に心情も平和となり、若し過つて忿怒とか傲慢の情が起ると、直樣師の許に行つて其赦を願ふといふ事になされました。

一日もドヂラオの着て居られた衣服が餘程古くなり、所々破れて見苦しくなりましたから、師は布を與へて新に仕立させられました。ドヂラオは喜んで其出來上りを待兼ね之を着やうとすると、師は態と之を他の修道者に與へよと命じ、復別に布を與へて作らせました。這度もまた他の修道者に與へる事となり、三度目に漸く自分の爲に與へられました。しかしドヂラオは之がために少しの不平も述べず、所謂馬鹿にせられたなどゝ云ふ傲慢な考も毛頭起らなかつたのみならず、却て德を修める爲に良き功績を樹たやうに想ふて喜んで居られました。

（太郎）併し靈父樣、其樣事を命ずるのは、唯本人を困らせる丈の事でありませう、可愛想に！。

（靈父）否ね、此は決して唯無益に困らせ苦める目的ではなし、いつ如何なる場合でも、目上の人の命令には、快く自分の意見や願望をすてゝ、從ふ德を養ふ習慣を作らせる爲でありました。又可哀相など云ひましたが、此は唯太郎さんばかりでなく世間にも往々斯樣な考を以て、卽ち些細な此世間の情實に妨げられて、俱に共にいとゞさへ狹き天國の門を潛る事が出來ないやうになると、いふ事に考へ及ばない人が澤山ありますが、寔に嘆はしい事ではありませんか。自分の缺點に打克つといふ事は、誰しも却々困難い事で、度々好き機會を以て練り鍛はないと、迚も一朝一夕と之を矯正す事が出來ないのであります。ろれ故聖ドロテオ師は努めて好き機會を與へ、ドヂラオを德の道に導かれました。

或日も亦上等の小刀を持つて病室に行かれました。スルとドヂラオは喜んで之を受取り、直に使用うと致されましたから、師は復も之を試し、些細な苦痛をも

耐へさせやうと思されて「其小刀を他の修道者に渡せ」と命ぜられました。ドヂテオは自分は病者の世話を爲るために是非必要であつたから、非常に之を欲しかつたのです、が從順の德は何よりも先に守らねばならぬ、といふ事をよく知つて居られましたから、快く他の者に之を渡し、其人が嬉しさうに此小刀を使ふのを見ても、別に妬ましい心を起されませんでした。

またドヂテオは平素聖書を繙く事を何よりも樂みとして居られまして、意味が深く了解る事が出來ない場合には、師の許に行つて説明を求めて居られました。

或日師のドロテオが院長と諮り、若しドヂテオが來れば嚴しく叱り、場合によつては少し擲つて下さい」と打合をして置かれました。ドヂテオは其樣な企があると少しも知りませんから、例の通り聖書を携へて師の許に行かれ、疑問を尋ねやうと致されますと、師は「今日は暇がないから院長の許に行け」とお斷になりました。ドヂテオは少し不審に思はれましたが、別に不滿足の心も起さず、快く其室を出て院長の許へ行かれました。スルと院長はドヂテオの言葉の了るのを待つて、「汝の如なツマラヌ者が、迚も聖書の深い意味なぞを曉る事が出來ない、ろんな無益な事で時間を費すよりも、以前の罪深き事を考へ、之を償ふやうに力を竭せ」と嚴しく叱責て、二度頬を打たれました。然しドヂテオは感心にも少しも面容を變へず、謹んで其誡を聞き、假にも院長に對して吃き陰言などを申されませんでした。

聖ドヂテオは斯やうにしてまでも救靈の道を重んぜられ、自分の多の欠點に打克つ爲に、屢々我が己れがといふ我慢傲慢を制へて、朝に夕に德を研かれましたから、後には謙遜耐忍の美德を具へられ、立派な修道者となられました。

五年の後劇い病氣に罹られ、將に臨終に迫らんとしました。其烈い痛苦もじつと辛抱して面にも顯はさず、傍に居られたドロテオ師に向つて「師よ、私は今此世を去つて天國に行き度のですが、何卒許して下さい」と。死際に臨んでも尙かく從順の德を重んじられた言葉に、ドロテオ師も感極まつて涙を流され、「天主樣は必ず御身に幸榮の場所を與へて下さるから、何卒安らかに眠づて天國へ往きなさい、ろして私の爲に祈つて下さい」と申されましたが、聖ドヂテオは之を聞いて微笑ながら此塵の世を去られました。時に降生後五百三十年頃でありました。

後他の修道者等はドヂテオが生前大齋も苦行もせなかつたのに、聖ドロテオが之を聖人の如に尊敬して居られるのを不思議がつて居りました、が此は聖ドロテオは天主樣に祈願つて、「何卒此修院に居つた者の中で、現今誰が一番すぐれた恩寵を蒙て居るかを示して下さい」と願ふて居られましたが、點示によつて聖ドヂテオが特に輝いて居るといふ事を知られたからであります。

斯の如く聖ドヂテオは聖ドロテオ師を天主樣の代理者として、何事も唯々諾々と其命令に從ひ、時には辱められ打たれましてもよく耐へ忍んで、心から從順の德を守られましたので、遂に善き最後をなされたのであります。されば皆樣は、此聖人の言行に倣ひ、各自の缺點を矯正す樣にせねばなりませぬ。心掛一つで天主樣の聖寵と共に其事に努めるならば、如何なる缺點にも打克つ事が出來るのでありますから、何卒此聖人の御傳達を願ふて、第一にも從順第二にも從順の德を守る事が出來る惠をお願ひなさい。

聖人物語（二月之卷）畢

明治四十三年八月三十日印刷
明治四十三年九月一日發行　（定價金三拾錢）

複製不許

著作兼發行者　大阪市北區北野小松原町天主公教會內　公教宣教師　シルベン、ブスケ
印刷人　大阪市東區佐官町五百二十四番地　戸澤東太郎
印刷所　大阪市東區佐官町五百二十四番地　聖若瑟教育院活版部

靈父ワグネル師譯述

公教要理圖解

四六版四倍形裝釘美本
定價壹圓貳拾五錢郵税拾六錢

本書は公教要理を圖解したるものにして、鮮明優美なる六十八枚の圖に一々詳細平易なる説明を加へ總傍訓を施したれば何人にも解し得らるゝ絶好の良教書也。

靈父ペ、ドルモニエ師著

天主公教會聖歌

菊版形
價六拾錢
郵税八錢

羅甸語及邦語の聖歌集なり、樂譜を附し原文と和文と歌の説明、聖祭侍者の答詞等を載せ一般信者に對し大に便益を與へたる良書なり。

靈父ドルアル師述○林壽太郎氏筆記

再版 解疑 第壹篇

四六版形
定價金五錢
郵税金貳錢

靈父永田辰之助師著

聖心聖月

定價金六錢
上製金拾錢
郵税金貳錢

聖心聖月三十日間毎日讀誦默想すべき事項、教訓、祈禱文等を載せたるものにして、聖心聖月中必讀の書なり。又平時と雖も信仰涵養の爲座右に備ふべき良書なり。

主要なる祈禱

定價
金五厘

洗禮志願者等に暗誦せしむる爲、必要なる祈禱文を拔萃したる小冊子なり。

靈父浦川和三郎師著(再版)

聖母マリアの七の悲傷

定價金七錢
上製金拾錢
郵税金貳錢

聖アルホンソ、リゴリオ原著「マリアの光榮」中より流麗なる口語躰に摘譯したるものにして通俗を旨とし、聖母の深き御悲傷を最も平易に寫し出したる最好の修養書なり。

公教宣教師ラゲ譯

新約聖書

全

			定價（郵税別）
四六判形	同	クロース表紙角丸	金九圓拾錢
	背	厚表紙	金壹圓
	總折	皮	金壹圓拾錢
	皮	金線	金壹圓七拾五錢
	皮	赤線	金貳圓
菊半截判形	同	クロース表紙角丸	金八圓拾錢
	背	厚表紙	金九圓
	總折	皮	金壹圓
	皮	金線	金壹圓五拾錢
	皮	赤線	金壹圓七拾錢
羅馬字文菊判半截形八百五十頁	背	皮	金參圓四拾五錢
	總折	皮	金參圓七拾五錢

聖人物語 一月之卷

鹽父シルベン、ブスケ師著

定價郵税共貳拾五錢

菊版形二段百五十頁寫眞版十五枚挿入

本書は日々教會に於て祝ふ聖人中より毎日一人或は二三人の聖人を選び、其重なる事蹟と優れたる德行と吾々日々の行爲に就て補益する所を摘記し之を通俗平易なる談話體に記述したれば眞に家庭の讀物として好箇の書たるべし。

聖心聖繪

（大）縱約一尺八寸、幅一尺三寸、紙質帳簿二百斤紙「外に掛軸用として薄紙を用ひたるもあり」定價金拾五錢（十五枚以上拾四錢）

（小）縱約一尺三寸、幅九寸、定價金八錢十五枚以上七錢

聖母聖繪

縱約一尺三寸、幅九寸　絲ノ長九寸　幅六寸四分

定價金六錢　十五枚以上五錢

試みに精巧なる富士の撮影畫を見れば、身自ら山麓を歩するの思ありて爽快を覺ゆ。聖心聖繪を額として壁上に掲げ朝夕此を仰げば身自ら、主耶蘇と相親しむの思ひありて主がゲッマニアの園中の憂悶、十字架上の苦死等を偲び自ら主を愛敬し奉るの心起るべし。聖母聖繪は、聖母が聖き御獨子を抱き給へる半身畫にして、何れも精巧なる「コロタイプ」印刷に附したるものの也。一般信者の家庭に廣く勸むる爲特別廉價にせり。

右何れも當院に於て發行又は取次販賣致候也

大阪市東區玉造紀伊國町
東京市神田區錦町一丁目十番地
聖若瑟教育院

取次販賣所　三才社

자3V98

特21
805